ダンガンロンパ1・2
DANGANRONPA 1・2
ビューティフルデイズ
Beautiful Days
原作・監修／
スパイク・チュンソフト
DANGAN
RONPA
ビーズログ文庫

ダンガンロンパ1・2
ビューティフルデイズ
DANGANRONPA 1·2
Beautiful Days

「ダンガンロンパ　希望の学園と絶望の高校生」より
illustration/花邑まい

「スーパーダンガンロンパ2　さよなら絶望学園」より
illustration/カズアキ

「スーパーダンガンロンパ2　さよなら絶望学園」より
illustration/さとい

ダンガンロンパ1・2
Beautiful Days

原作・監修　スパイク・チュンソフト

電子版 ビーズログ文庫

目次

カズアキ

さとい

あとがき

ダンガンロンパ
DANGANRONPA
希望の学園と絶望の高校生

【登場人物紹介】

大和田 紋土（おおわだ もんど）
超高校級の暴走族

関東一円を総べる暴走族の２代目総長。情に厚い。

十神 白夜（とがみ びゃくや）
超高校級の御曹司

巨大財閥の御曹司で、プライドが高く、仲間を見下している。

石丸 清多夏（いしまる きよたか）
超高校級の風紀委員

品行方正で成績優秀、誰よりも規則を重んじている。

苗木 誠（なえぎ まこと）
超高校級の幸運

抽選で入学を許された、ごく「平凡」な高校生。

モノクマ

希望ヶ峰学園の学園長。

山田 一二三（やまだ ひふみ）
超高校級の同人作家

三次元の女子には興味がない、カリスマ同人作家。

葉隠 康比呂（はがくれ やすひろ）
超高校級の占い師

的中率30%のマイペースな占い師。誰よりも実は臆病。

桑田 怜恩（くわた れおん）
超高校級の野球選手

プロも注目する実力を持つが練習が嫌い。軽薄な性格。

CHARACTERS

大神（おおがみ） さくら
超高校級の格闘家

幼いころから武道に通じてきた、地上最強の女子。

朝日奈（あさひな） 葵（あおい）
超高校級のスイマー

元気いっぱいのスポーツ少女。さくらとは親友の間柄。

腐川（ふかわ） 冬子（とうこ）
超高校級の文学少女

恋愛小説のベストセラー作家だが、本人の性格は根暗。

霧切（きりぎり） 響子（きょうこ）
超高校級の???

自らの才能を明かさない、クールでミステリアスな少女。

舞園（まいぞの） さやか
超高校級のアイドル

国民的人気を誇るアイドル。苗木とは元同級生。

江ノ島（えのしま） 盾子（じゅんこ）
超高校級のギャル

カリスマ読者モデル。裏表のない性格で好感度が高い。

不二咲（ふじさき） 千尋（ちひろ）
超高校級のプログラマー

小柄だが、並はずれたプログラミングの才能を持つ。

セレスティア・ルーデンベルク
超高校級のギャンブラー

見た目に反して強烈な毒舌家。ウソの天才でもある。

スーパーダンガンロンパ2 さよなら絶望学園

SUPER DANGANRONPA 2

【登場人物紹介】

田中 眼蛇夢（たなか がんだむ）

超高校級の飼育委員

どんな動物も手懐け、自らを世界の覇王と豪語している。

十神 白夜（とがみ びゃくや）

超高校級の御曹司

巨大財閥・十神家の次期当主。その威圧感は随一。

狛枝 凪斗（こまえだ なぎと）

超高校級の幸運

常に笑顔で面倒見がよい。超高校級マニアの一面も。

日向 創（ひなた はじめ）

超高校級の？？？

記憶を失い、自分の才能を思い出せないでいる高校生。

九頭龍 冬彦（くずりゅう ふゆひこ）

超高校級の極道

国内最大の指定暴力団「九頭龍会」の跡取りと目されている。

弐大 猫丸（にだい ねこまる）

超高校級のマネージャー

無名選手も必ず一流にする凄腕のマネージャー。

花村 輝々（はなむら てるてる）

超高校級の料理人

食だけでなく性の欲求も強い、自称・シティボーイ。

左右田 和一（そうだ かずいち）

超高校級のメカニック

機械いじりに非常に長け、ソニアに好意を抱いている。

モノミ
一同の引率の先生。

さいおんじ　ひよこ
西園寺 日寄子
超高校級の日本舞踊家

可愛らしい姿に残酷な面を隠す、日本舞踊界・期待の若手。

ソニア・ネヴァーマインド
超高校級の王女

気品と愛嬌を持ち合わせた小国の王女。日本好き。

ななみ　ちあき
七海 千秋
超高校級のゲーマー

大人しそうに見えて剛胆。あらゆるジャンルのゲームをこなす。

おわり　あかね
終里 赤音
超高校級の体操部

食べることと戦うことしか頭にない、スーパーアスリート。

みおだ　いぶき
澪田 唯吹
超高校級の軽音部

常にハイテンションな超人気ガールズバンドの元ギタリスト。

べこやま
辺古山 ペコ
超高校級の剣道家

鋭い眼光と凛々しさを持つ、寡黙でストイックな剣道の達人。

つみき　みかん
罪木 蜜柑
超高校級の保健委員

ご奉仕することに生きがいを感じている。しかし空回りが多い。

こいずみ　まひる
小泉 真昼
超高校級の写真家

友達思いのしっかり者だが、男子に対してはやたらと厳しい。

カバー・絵扉・人物紹介イラスト／小松崎類

ダンガンロンパ
DANGANRONPA
希望の学園と絶望の高校生
お米食べろよ！
～苗木誠が超高校級の熱血だったら～
小説：志麻友紀　イラスト：明咲トウル

苗木誠は超高校級の熱血だ。

「え？　熱血？　そんなの聞いてないよぉ〜。君は超高校級の幸運で不幸で普通の高校生でしょ？『こまけぇことはいいんだよ！』って、ちょ、ちょっと待ってよぉ〜!!」
　と追いすがる白黒ぬいぐるみ学園長は置いておいて……。

「私、苗木君の助手になりますね！」
　朝、廊下でぶつかるという、どこのラブコメも真っ青な再会を果たした、超高校級のアイドル舞園さやかはそう宣言した。

　それが彼女の運命の分かれ目だったかもしれない。

「ありがとう舞園さん！」
　苗木はがっちりと舞園の華奢な肩を掴んだ。「きゃっ！」と舞園が小さな悲鳴を上げたのは、乱暴に肩を掴まれたからではない。
　超高校級の熱血のとおり、苗木の両手の熱さだ。それは火傷しそうに燃え上がるようなそれでありながら、舞園の皮膚を焼けただれさせるものではない。むしろ、その熱さは、身体の中心からほっこりと熱がわき上がるような熱さ。
　この閉じこめられた学園の中で、ともすれば絶望の冷たさに凍えそうになる。その心を蘇らせ、燃え上がらせるのに十分な温かさだった。

「二人で力を合わせて、みんなでこの学園を出よう！」
「……私、助手としての経験もないし、苗木君の力になれないかもしれないけど……」
「それを言うなら、ボクだって、こんな経験はしたことない！　だけど、舞園さんが力になってくれるってだけで十分だ！
　キミががんばれって言ってくれるだけで、全国にいるファンの人達はみんながんばるだろう？　それと同じだ！」
　キラリ……苗木はこれぞ青春とばかりにさわやかな笑顔を浮かべた。舞園もそれに応えるように、心からの笑顔を浮かべる。
「はい！　私も苗木君がいつでも笑顔でいられるように『がんばれ！』って応援します！」
「……それじゃダメだ！」
「え？」
「ボクだけじゃない！　キミはアイドルだろう？　全国、いや、世界中にいるファンのために、キミは『がんばれ！』ってエールを送らなきゃ！」
「……だけど、こんな閉じこめられた学園の中じゃ、誰も見てなんて……」
「そんなことない！　なんでそこで諦（あきら）めるんだ！　電波に乗せなくたって、人の思いは通じる！　まして、キミはみんなのアイドルなんだ！　キミが『がんばれ！』って思えば、みんながんばる！　思いは伝わるんだ！」
　今度は舞園の肩ではなく、両手をがっちりと握（にぎ）りしめて力説する苗木。理論も根拠（こんきょ）もない、ただ、がんばれは伝わる！　という彼の言葉だが、しかし、舞園は無性に身体の奥から力がわき上がってくるのを感じた。
　―――これが超高校級の熱血……。
「そうですよね！　〝私がここにいる！〟って叫（さけ）べばみんな気づいてくれますよね！　みんな、私のこと忘れないですよね！」
「忘れる訳ないじゃないか！　キミは、超高校級のアイドル舞園さやかなんだから！」
「なら、私、がんばって、超高校級の助手でアイドルになります！」
　二人で両手を握り合って、きゃっきゃうふふ～と回転し笑いあう。
　こうして、舞園さやかは、超高校級の熱血アイドルとなった！

　が、話はそれで終わらない。

そんな二人の会話を物陰から、盗聴（？）していたプログラマーが一人。

「か、感動したよぅ！　ボクは今、猛烈に感動した！」

　ヘッドホンを首にかけて、飛び出してきたのは、超高校級のプログラマー。不二咲千尋。高校生とはとても思えない、中学生、いや、小学生さえ思わせる可憐な姿。

　その小動物を思わせる黒目がちの両目はキラキラと輝いている。

「二人の話を勝手に聞いてゴメンナサイ！　で、でもすごく感激したんだ！

　ぼ、僕、ずっと気弱で、だから、こんなで、可愛いふりして、みんなに守ってもらって、でも……。

　もう、可愛いふりなんてしない！　強くたくましくなって……」

「どうして〝可愛い〟を捨てるんだ！」

「はい？」

　唐突に大声を張り上げた苗木に、不二咲はきょとんとする。ごおおっと炎を背にした苗木を、すでに熱血助手となった舞園はうっとりと見ている。

　ちなみに、ここは学園の寮の廊下なのだが、この大声にも誰も出て来ない。実はみんな部屋にいて、息を殺して潜んでいた。

　誰も巻き込まれたくなくて……。

「捨てられた〝可愛い〟が可哀想じゃないか！」

「でも、強くなるのに〝可愛い〟なんて……」

「可愛くても強くなれる！　可愛いまま強くなれよ！　どうしてそこでがんばらない！

　可愛いのに強い！

　強いけど可愛い！

　これぞ、世界の萌え！　最強の可愛い！　じゃないか！」

　なんだか微妙に論点がずれているが、そこに「その通り！」と飛びこんできたのは、山田一二三。超高校級の同人作家だ！

「強くて、可愛いは世界の至宝だ！　苗木誠殿！」

「そうか、キミもそう思っていたんだね！　山田クン！」

「だけど、強くて可愛いなんて、二次元にしかいないよ、三次元には残念ながら……」

「どうして、そこで諦めるんだ！」

　ばあああんっ！　と苗木のパッションが燃え上がり、「ひ、引きこもりがちの僕には太陽はまぶしい……」と山田がよろめく。そんな山田を苗木は指さした。

「二次元も三次元も関係ない！　キミが情熱を持って漫画(まんが)を描けば、そのキャラクターは人々の心の中に存在するんだ！　それは生きているのと同じだ！」
「そ、そんな僕のキャラクターが三次元なんて……そ、そんな、そんな……」
　ぶるぶる山田は恐怖(きようふ)に震(ふる)えて床(ゆか)にうずくまるが、そんな彼の肩を苗木はポンと叩(たた)く。顔をあげた彼に慈愛(じあい)に満ちた微笑(ほほえ)みを見せる。
「なにを怖(おそ)れるんだ、キミが生み出したキャラクターだろう？　ならば、キミは彼ら、彼女らの父親であり兄だ、家族だ、兄弟(きようだい)じゃないか？」
「きょ、兄弟、い、妹……お、お兄ちゃん」
　山田の身体は今度は恐怖ではなく、歓喜(かんき)に震えた。その肥満(ひまん)した巨体の表面がぶるぶると小刻(こきざ)みに、明らかに人間の動きではなく、謎(なぞ)の生命体Xの動きで。
「そうだ！　僕の手で妹を守るんだ！　お兄ちゃんとして！」
「そう！　きっとキミは、世界最強のお兄ちゃんとなる！」
　苗木の熱血の息吹(いぶき)に呼応(こおう)した山田の両目には、ごおおおっと炎が燃え上がった。こうして、超高校級のお兄ちゃん……もとい、超高校級の熱血同人作家が誕生した。

「す、すごい！　舞園さんも、山田君も〝熱血〟に変えるなんて！　ぼ、僕だって、〝熱く〟〝強く〟なれるよね!?
　なら僕だって、可愛い〝まま〟燃えるよ！　熱くなれぇぇえええ!!」
　苗木と山田のやり取りを見ていた不二咲が、ますます〝猛烈に感動〟すると、普段の気弱な声が信じられないくらいに、学園中に響(ひび)き渡る声で叫んだ。
　まさしくそれは、世界の中心で〝熱血〟を叫んだケモノ。
　超高校級の熱血プログラマーが誕生した瞬間(しゆんかん)だった。

　その瞬間、暴走した不二咲の熱血プログラムが、学園の監視システムをハックどころか燃え上がらせ、監視モニター前のモノクマを発狂(はつきよう)させていたのだが、それは誰も与(あずか)り知らぬことだった。

そしてその夜、食堂でのこと。

「パンが無ければ、お菓子を食べればいいじゃない？」

　モノクマの手違いによってパンが補充されず、お菓子だけが補充されていた。そんな事態に超高校級のギャンブラー、セレスティア・ルーデンベルクが言い放った。

　まるで革命軍が目の前に迫っているのにもかかわらず、優雅に言い放ったフランス王妃のごとく。

「それは違うよ！」

　間髪を容れず、食堂に響き渡る『異議あり！』もとい『それは違うよ！』の声。

　苗木誠だ。

　彼は、椅子に腰掛け優雅に紅茶を飲むセレスにずいっと迫る。間近に迫った顔に、セレスは顔色を変えず無視しようとした。

　しかし、苗木のぐわりと燃え上がる目から発射されたビームのごとき熱線に、持っていたカップがぴしりと割れる。それに流石のセレスも苗木を見ると、彼はすかさず、セレスを指さした。

「日本人なら、お米食べろよ！」

「お米なんて優雅じゃない、ブリオッシュに紅茶のほうが……」

「たしかにパンもいい！　紅茶の香りをボクは否定もしない。だが、日本人だからこそ、米の優雅さを知るべきだ！

　魚沼産コシヒカリを六甲の美味しい水で炊いて、京都の玉露でお茶漬けを頂く。箸先五分しか濡らさず、ちんちんろりん……すする音さえ楽の音のごとく、お茶漬けを頂くお姫様こそ、優雅だとボクは思う！」

「ちなみにお新香はナス一択だ！」と言い放った苗木に、セレスは衝撃を受けていた。

　今まで彼女の中ではベルサイユが一番であり、優雅なドレスを着たロココの女王が一番であったのに……今の表現で、和風の城に住む振り袖姿の姫様が、ずずっと西洋ではマナー違反の音を立てて、お茶漬けをすする。それが、得も知れず優雅だ……と思ってしまったのだ。

「わ、和風の世界……私は知らなかった……」

「知らなくたっていい、今から知ればいいんだ！　白鷺城も、エルミタージュも知ればいい！　そうして、キミは和洋すべての女王となればいいんだ！」

「まあ、なんて素敵！　和洋すべての女王、この世界の女王なんて！
　やってみせるわ！　ポーカーだってブラックジャックだって、負けたことのない、わたくしですもの！」
　ホホホ！　とセレスは勝ち誇(ほこ)ったように笑う。
　こうして、超高校級の熱血ギャンブラーが誕生した。

「馬鹿(ばか)じゃねぇの？」
　そう馬鹿にしたように言ったのは、超高校級の野球選手、桑田怜恩(くわたれおん)。だけど本人はロッカーを目指しているという。
「熱血とか根性(こんじょう)とか、なんの足しにもなりゃしない。そんなものなくたって、俺は野球出来てたし」
　実際、彼は汗(あせ)と涙の練習などしなくても、エースで四番、世界中のスカウトに注目されるほどの実力を持っていた。
「そんなものなんの意味もねぇよ！」
　汗とか涙とか……そんなもの唾棄(だき)すべきもののように彼は言った。彼は嫌悪していたのだ。必要以上に熱い指導とか、むさ苦しい友情とか、宗教じみた精神論にだ。
「それは違うよ！」
　しかし、苗木の一言とともに、桑田に投げられたのはラケット……ん？　バッドではなく、なぜかラケット。
「さあ、桑田クン、僕の熱き想いを受けてくれ！」
「お、おい！　なんで、グローブでもバッドでもなく、ラケット……うわあああああっ!!」
　そこに炸裂(さくれつ)したのは、苗木の愛の千本ノックならぬ、千本熱血サーブ!!
　球(たま)代わりのブラッディオレンジは、剛速球(ごうそっきゅう)で飛んでいき、桑田の背にする壁(かべ)にぶち当たり、ピンクの血のようなシミを作った。
　一瞬の猛攻(もうこう)。壁がまっピンクに染まり、そのピンクの水たまりに、桑田はへなへなとへたり込んだ。
「こ、この俺が、テニスとはいえ一球も打ち返せないなんて！」
　呆然(ぼうぜん)と桑田がつぶやく。野球でないとはいえ、球技で遅(おく)れをとるなんて、彼には信じられなかったのだ。
「キミが一つも受けられなかったのは仕方(しかた)ない。今のはボクの愛と情熱を込めて打ち込んだものだ。それに対してキミは、ただラケットを構えて、技術と身体だけで打ち返そうとした。

心を込めたものには、心で返さなければ意味はないんだ！」

「心で……」

桑田は、今度は愕然（がくぜん）とした。こちらを見つめる苗木の二つの瞳（ひとみ）の奥にはごおおおっ！　と燃え上がる炎。それはまさに、桑田が心から嫌（きら）った熱血野球のバイブル、あのアニメを思わせた。だが、桑田の心には今、確かにその炎が宿（やど）っていた。死ぬほど嫌っていた炎が……。

「そうだ、桑田クン！　キミはあの星を目指すんだ！」

苗木はひざまずき、うずくまる桑田の肩を抱いて、天を指さした。そこには食堂の天井（てんじょう）しか見えないはずなのだが、見上げる二人には夜空にきらりと輝く星が見えた。そう星が。

「あそこに見えるだろう希望の星、情熱の星、そして、野球の王子様の星が！」

「おう！　見えるぜ、苗木！　オレは目指すぜ！　歌って踊（おど）れて、野球もエースで四番の王子様（プリンス）になる！」

いつの間にやら、目指す星の意味が変わっているが、二人の瞳には炎が宿り、そして、たった今、同じくその情熱の星の住人となったセレスが、自分の座っていた椅子の陰に隠（かく）れて、半分顔を出しながら、二人の姿を見守り、涙を流していた。嗚呼（ああ）、セレス姉ちゃん……。

こうして、超高校級の熱血野球選手が誕生した。

「ださ～い、ださ～い、ださ～い、あんた達、はっきりいって、ダ・サ・イ・わよ！」

そう叫んだのは、超高校級のギャル江ノ島盾子（えのしまじゅんこ）。星を目指して燃え上がる二人と、さめざめ泣くセレスにしーんとなっていた食堂の静寂（せいじゃく）を打ち破（やぶ）るかのように、彼女はわめく。

「努力とか忍耐とか汗くさいし、星とかお米食べろなんて、訳わかんない！　あたしがわかんないものは、流行じゃないの！　ダサいの！　かっこ悪いの！」
「真剣になるなんて〜かっこ悪い〜」と言ってる彼女のほうが、真剣で必死だった。
　そう、彼女は必死でなにかを否定しているようだった。だから、苗木はふわりと慈愛に満ちた笑みを浮かべて言った。
「そうだよ、江ノ島さん」
「ハハハ！　苗木ったら認めたわね！　自分が、かっこ悪くて、ダサいこと！」
「いいや、それは違うよ！　江ノ島さんは、それでも努力や根性を出すことを素敵だと思っているんだ。本当は、自分だってそうしたいんだ！」
「な、なに言ってるのよ！　あたしは、努力や根性なんて……訓練なんて、訓練なんて……訓練、実戦……」
　苗木にがちりと肩を掴まれ、がくがくと揺さぶられながら、江ノ島はうわごとのように言う。
「かっこ悪くたっていいんだよ！　努力する者達の姿は何時だって美しい！　そう、キミのそばかすだって、盛ってない胸だって可愛いんだ！」
　なにげに、ひどいことを言ってるような、言っていないような、しかし苗木の言葉に、江ノ島はぽおっと頬を赤くする。
「そばかすに……無い胸が可愛い……。
　こ、こんなとき、どんな顔をすればいいか、わからないの……」
「笑えばいいと思うよ」
　にっこり笑う苗木に、江ノ島もにっこりと屈託なく笑う。そして、なぜかアーミーナイフを取り出して言った。
「あなたは死なないわ、あたしが守るもの……」
　こうして、超高校生級の熱血ギャルが誕生した。

その後も苗木の熱血による快進撃は続いた。

超高校級のスイマー、朝日奈葵と超高校級の格闘家、大神さくらは、もともと体育会系である。

苗木の熱血演説など要らず、三人でがっちりと手を握り合うのも当前の流れだった。

「二人ならボクの心をわかってくれると思っていたよ！」

「うん！　泳ぐなら努力と根性と熱血は当たり前だもんね！　それに、私は明るく笑ってドーナツ食べていきたいな！」

そう朝日奈が笑えば、彼女の親友さくらも、静かに微笑しうなずいた。

「うむ、我の道にも熱血は必要ぞ。戦いの心は波一つなく静かでなければならぬ。されど、情熱は忘れてはならぬ！」

三人、同時にうなずく。こうして、熱血スイマーと熱血格闘家……もとより、誕生していた。

そして、超高校級の占い師、葉隠康比呂が熱血化したのは、ついでというか、なんというか偶然である。

「うお～燃えている、燃えている、水晶玉が燃えているべ！」

「それだ！　その情熱に燃える未来こそが、みんなの未来なんだ！」

「苗木っち！　それじゃ、みんな燃えちまうべ！」

「違うよ！　フェニックスだって炎となり灰のなかから蘇るんだ！　これはその再生の未来なんだ！　情熱の炎はけっして消えない！」

「……ま、まあ、俺の占いは30％の確率で当たるやつだから。全部当たったら、超能力だべ」

「なんで、全部当てようとしない！　いや、当たると思わないんだ！　鰯の頭も信心から！　お米食べろよ！　シジミにニジマスなんだよ！」

「ちょ……苗木っち！　言ってることが支離滅裂だべ。……ま、当たると思えば当たる、当たったって俺が思えば当たったことになるか！」

「そうだよ！」

こうして、超高校級の熱血占い師が〝適当〟に誕生した。

そして、その夜のサウナ対決。

　そう、寮にあるサウナルーム。そこには超高校級の暴走族、大和田紋土と、超高校級の風紀委員、石丸清多夏。それになぜか苗木誠の姿があった。

　暴走族と風紀委員の対決に、熱血が割り込んだ結果だったのだが……。

「心頭滅却すれば火もまた涼し！　というけれど、ボクの心が燃えていれば、サウナなんて暑くないんだぁああ〜!!」

　ごおおぉおおおお〜と燃え上がった苗木に、暴走族と風紀委員も敵わず、ゆだって倒れた。

　すると。

「すごいぜ、お前の根性！　自ら燃えるなんて、こんな走りをする奴、どこにもいねぇ！」

「苗木君！　君の熱い心を僕も感じたよ！」

　目覚めた二人はなにを感激したのか、苗木の両手を取り握りしめる。苗木も、きらりと汗が輝くさわやかな笑顔を見せた。

「二人の情熱を僕も感じたよ。僕達はもう兄弟だ！」

「おう、兄弟。苗木、お前が長兄だ！」

「ならば大和田君、君が次兄だな。僕は末弟でいい」

　こうして、にこやかに肩を組む。暑苦しい、熱血三兄弟が誕生した。

　そして最後に残った難関、超高校級の御曹司、十神白夜の前に現れたのは……。

「白夜様には近寄らせないわ！　この熱血、暑苦しい！　地球温暖化の原因！」

超高校級のネガティブ……もとい、文学少女腐川冬子（ふかわとうこ）。ぴしりと苗木を指さすその指先が震えているのに、「あ、あたしったら震えてる！　これじゃ、負ける！　いや、どうせ負け続けの人生だから、これ以上は負けようがない！」とネガなのかポジなのかも、わからなくなっている。

「ああぁ〜ああぁ〜!!」と意味不明な叫び声をあげてうずくまったあと、がばりといきなり顔をあげて「どうせ、あたしは熱血どころか、冷血！　お日様（ひさま）サンサンのあなたとは正反対に日陰の身よ！」と苗木に摑み掛かった。

「努力！　根性！　それもいいじゃない〜いいじゃない〜。

　がんばってがんばってがんばって、これだけがんばれば報（むく）われるんじゃないか！　と、読者にほんの少しの希望を与えておいて、やっぱり報われなかった！　なんにも奇跡は起こらなかった！

　花は咲かず、実は実（みの）らず、夢は叶（かな）わず、恋人同士は結ばれない！　これが、純文学の現実（リアル）ってものよ！

　別に不幸なことなんかじゃないわ〜。ありふれている話よ。世の中大半の人は報われない。一割の成功者と七割の普通と二割の敗北者。それが世の中ってもんじゃない？」

　さすが純文学少女。彼女が突（つ）きつけた〝現実〟は、たしかにリアルだった。この世知辛（せちがら）い重みの前には、さすがの苗木の〝熱血〟も通用しない……と思ったが。

「それがどうした！」

　その一言で打ち砕（くだ）いてしまった。まったくひるんでいない苗木の、その両目に燃える炎に、腐川はうろたえたように言った。

「なによ！　現実を直視しないつもり!?」

「現実は現実だ。起こったことは変わらない。それは認めよう」

「ほら！　いくら熱血だって現実は変えられないじゃない！」

「そう、現実は変えられない。だが、そこで諦めない、めげなければ熱い心は砕けることない！　人生に終わりなんてない、幾（いく）らだってチャレンジ出来るんだ！」

「へぇ、それでチャレンジャーのまま、人生終わっちゃったらおしまいじゃない！」

　さすがネガティブ……もとい文学少女。さらに世知辛い人生のエンディング『夢かなわず』を突きつけてきた。だが……。

「終わったって構わないさ。それでもボクは諦めずにめげなかった」

「へぇ、そんな自己満足。誰一人あんたを認めていないというのに？」

「誰一人なんてことはない！　少なくともボクはボクを認めている！　自分で自分を認めなくてどうす

る！　自分にがんばれ！　って言わなくてどうする？　自分こそが一番の味方だというのに！
　ボクはボクを応援し、ボクはボクを認めよう。失敗したときはダメだな！　と怒ると同時に、がんばれ！　と自分を叱咤する。それでもめげて泣き崩れるときは、自分で自分を抱きしめて、よくやったな……と眠る夜もあるだろう。
　だけど朝になればまた一日が始まって、朝日とともにがんばろう！　って気になる。
　そして、人生の最後には、本当に本当によくやった！　と自分を誉めて目を閉じよう！
　我が人生にいっぺんの悔いも無し！」
　そのとき窓にも鉄板を打ち付けられた学園だというのに、天から光がさして、片手をあげた苗木を照らし出した。それ見ていた大神さくらは思わず「おお……我が師父、らお……う……」と謎のつぶやきを漏らしたとか。
「超ポジティブシンキング……じ、自分で自分を認める、誉めるなんて恐ろしいこと、あ、あたしには出来ないわ……」
　腐川は床にぺたりとへたり込んだ。超ネクラ、超ネガティブな彼女にとっては、それは恐ろしい敵だった。けして、後ろ向きにならない悪魔など……。
「誉めなくたって構わないさ、後ろ向きも、後ろを向き、さらに向きまくればいつかは前向きになるし、沈みに沈んで地下のマントルを通り抜ければ、反対側のリオデジャネイロに着く最短コースじゃないか！」

　またもや意味不明というか、言葉の力技というか、無理やり元気注入！　というか、腐川の手をぎゅっと握りしめて苗木は言うと「ぎゃあああああああああああああっ！」と腐川が叫び声をあげた。
　深海魚でなくとも、人間の体温は魚にとっては触れられれば火傷するぐらい熱いのだという……腐川にとってはそんな感覚だったのだ。これは彼女が背を向け続けた太陽、ぎらぎらと輝く光そのものだった。
　その光が彼女の全身を包み込み、がくがくと揺さぶり言った。
「キミは、その後ろ向きすぎる思考で、人々を感動させる文章を書いてきたじゃないか！　そのままでいい！　そのままでいいんだよ！　キミはそのままでも、これ以上不幸にもなりようはないし、悪くなりようもない！　それは最強ってことだ、素晴らしい！
　だからこのまま後ろ向きに突き進んでいれば、それは前向きで諦めないも同然なんだ！　影はいつしか光となる！」
「ふふ……そうね、光と影は表裏一体。光が強ければ強いほど影は暗く濃くなり、光とともに大きくなる。あたしは、あの方の影……いつまでも影……でもあの方と前に進み続ける諦めない影となる！」
　こうして、超高校級の熱血文学少女が誕生した。

そして、次は……いよいよ。

「努力に根性……ふん、くだらない。そんなに必死にならずとも、俺は完璧だ」

超高校級の御曹司、十神白夜は言った。たしかに彼こそ完璧の代名詞であり、成功のための汗や涙など不要のものに思えた。

「俺はもとより完璧。無駄な熱さなど不要なものだ。足りない奴らこそ、その熱血とやらで補えばいい。俺はお前達を否定はしないが、仲間にはならない」

椅子にゆったりと腰掛けて、脚を組んで皆を睥睨する。その様は、まさしく帝王のようであり、熱血のね……の字も寄せ付けないような、クールビューティ。絶対零度のブリザードのバリアさえ見えた。

天下の熱血、苗木もとりつく島もないように見えたが……。

「それは違うよ！　十神クン！」

出た！　超高校級の熱血どんでん返し。たとえ、掴むところが無かろうが、真っ赤に燃える拳は、無理やり指をめり込ませて、とっかかりを作る。

俗にごり押しともいうが、深く考えてはいけない。

「どうして自分が完璧だなんて思うんだ！」

「なにを言う、どこからどう見たって俺は完璧ではないか！」

「そう、確かにキミは〝優秀〟だ、すごいよ。ボクより勉強も出来るし、きっと運動神経だって抜群なんだろう！」

「当たり前だ。俺に出来ないことはない！」

「それならキミは、これからなにもしないつもりなのか？　これで完璧だと言って、そんな社長の椅子にふんぞり返り、日向ぼっこする老人みたいに一日、ぼけーっとして過ごすと？」

「なにもしないなんて冗談じゃない！　そもそも、俺が座るべきは社長の椅子なんて、小さなものじゃない！　これからも十神財閥は世界に、いや世界はすでに手に入れているからして、これからは宇宙を手にお入れください白夜様……ではなく、我が往くは星の財界！」

組んでいた脚をほどき、十神はついに椅子から立ち上がった。白夜大地に立つ！
「そうだ十神クン！　キミは完璧なんかじゃない！　完璧なら、なにもしなくていいはずだ！」
「な、なんだと!?」
十神は愕然とした。苗木の指摘（してき）はその通りだったからだ。完璧ならば自分は動く必要などない。しかし、自分は動こうとしている。
「自分が完璧だ！　なんて思った瞬間から、それで打ち止め、成長なんかない！　むしろ退化が始まるんだよ！　だから、前に進もうとするキミは正しいし、キミは完璧なんかじゃない！　キミは成長しようとしているんだよ、十神クン！」
「前へ、前へ、明日へと血反吐（ちへど）を吐（は）きながら、進んで行こうするキミは美しい！」などと、苗木に言われて、がっしり熱い手で両手を握りしめられてしまえば、十神はもうあらがいようがなかった。自分を侵食（しんしょく）する暑苦しい心に。
「そうだ！　俺は停滞（ていたい）などしない！　俺は完璧だが、より完璧を目指して進み続ける！」
拳を握りしめて、ごう～と両目に炎を宿す。
ここに超高校級の熱血御曹司が誕生した。

十神まで落ちたとなれば、残すはあと一人……いや、一匹。一頭と言うべきか。
みんなが集まった体育館で、燃える瞳に囲まれたモノクマがおろおろとしていた。
「オマエラ、なんで目に炎なんて宿しちゃってるのよ！　火遊びは危険！　寝小便（ねしょうべん）するよ！　ぎゃあああああああ!!」
〝おしおき〟をする暇（ひま）もなく、みんなの燃える瞳の〝目からビーム〟に照射（しょうしゃ）されて、黒焦（こ）げスクラップとなる学園長。
「じゃ～ん！　ボクは死なない、命を……幾つも……」
そう言いながら、体育館の舞台の上の机の上にぴょんと跳（と）び出したモノクマだったが、熱血集団がギ

ロリと見たとたん、真っ黒焦げとなって演台から転げ落ちる。

「ちょっ！　いきなり『焼き放て！』なんて酷いじゃない……か！」

　次々に飛び出すモノクマであったが、たちまち熱線を受けて、前の仲間達と同じ運命をたどる。

「も、止めてぇ！　らめぇぇぇぇぇ!!　スペアがないの……」

　最後のモノクマがぐらりと演台から落ちると、ぐしゃりと灰となり崩れた。

　そして邪悪な絶望は沈黙し、学園に希望が訪れたように思えたが……。

　学園のどこともわからない場所。

　単独行動をしていた彼女だけは無事と言えた。

「〝絶望〟よりもやっかいな〝熱血〟ね」

　ふう……と彼女、超高校級の？？？霧切響子は息をつく。

　彼女だけ離れていたために、あの熱血の嵐……に巻き込まれずに済んだのだ。

　なんだか、あれはおかしい。勢いと熱だけで、居並ぶ超高校級の者達が論破されていくなんて……。

「恐ろしいわ、苗木誠」

「そんなことはないよ！　霧切さん！」

「で、出たわね！　熱血の化け物！」

　冷静沈着な彼女の声は悲鳴に近かった。

　じりじりとシャッターがあがり、苗木の小柄な姿がシルエットとして浮かび上がる。

「さあ、最後に残ったのはキミ、一人だ」

恐怖に引きつる霧切の顔に影がかかる。

世界が〝熱血〟に塗(ぬ)り潰(つぶ)されていく………………。

「はっ！　ゆ、夢か……」
がばり！　と苗木は起き上がり、息をついた。
昨日、眠りについたベッド。閉鎖(へいさ)された学園の寮は変わりのないように見えた。苛(いら)つく、モノクマの「オマエラ起きろ！」の声に起こされたとしても。
「変な……夢だったな」
そう変な……いや、悪夢だった。自分があんな暑苦しくも恥(は)ずかしい熱血となり、みんなに次々と襲いかかって、同じようなテンションになるなんて。
「全部、夢だ」
そう言い聞かせて苗木は部屋の外に出る。すると、舞園とぶつかって……。

そして視聴覚室。モノクマがみんなに用意したDVDを苗木は先に見ることになった。
自分用に用意された画像を見るうちに、苗木の顔色はどんどん蒼白(そうはく)……を通りこして、真(ま)っ青(さお)になっていく。顔面にも汗、手にも汗、がくがく全身が震える。
見つめる液晶画面には、今朝(けさ)夢に見た、あの恥ずかしくも消し去りたい自分の姿があった。とても暑い、暑苦しい自分の姿が……客観的に見てとても納得できるような理屈(りくつ)ではない。ごり押しの恥ずかしい論理、どうしてそれでみんな論破されてしまうのか？　いや、その前にこんな恥ずかしい姿はない。これはあり得ない。
これは黒歴史だ。

ぷつん……と唐突（とうとつ）に画像は終わった。そして、どやどやと視聴覚室に人が近づく気配。

あれは夢ではない、現実だったのか？
画像が残っているということは、そうだ、そうに違いない。
みんな、みんな……こんなボクの恥ずかしい姿を……。

みんな夢であって欲しかった。
現実なワケがない。
もし、みんなあれを覚えているとしたら……。
ゆらり……と、苗木の中にどす黒いコロシアイの気持ちが芽生（めば）えた瞬間だった。

END

illustration：左近堂絵里

JUNKO
&
MONOKUMAAAA!!
illustration：左近堂絵里

ダンガンロンパ
DANGANRONPA
希望の学園と絶望の高校生
「不二咲さん、がんばる!」
小説：佐々木禎子　イラスト：紗与イチ

不二咲千尋（ふじさきちひろ）は、はじめて会ったときから彼に憧（あこが）れを抱（いだ）いていた。

もっともそれに気づいたのは出会いのときより少し時間が経過してからだ。不二咲は「超高校生級のプログラマー」と謳（うた）われているが、そう聞いたときに人が思い描くような目から鼻に抜けるタイプの人間ではない。むしろ、じっくりと周囲を窺（うかが）って、ゆっくりと自分の気持ちに気づいていくスロースターターな人間だ。

あらゆるジャンルの超一流の人材を集め育て上げることを目的とした『私立希望ヶ峰学園（きぼうがみねがくえん）』。食堂の一画から腹の底に力を込めたかのような気合いの入った声が飛ぶ。

「ごらああああ！　オレのリーゼントには男の魂（たましい）が宿（やど）ってんだよ。気安く触るんじゃねぇ。セットが乱れるだろうがああああ!!」

怒鳴（どな）ったのは大和田紋土（おおわだもんど）だ。

リーゼントに長ラン、ボンタンを穿（は）いた「超高校生級の暴走族」の彼は、関東を統（す）べる暴走族の元総長だ。

すでに食事は食べ終えたのか、大和田の前の皿は空（から）になっている。テーブルに肘（ひじ）をつき、どうやら崩（くず）れたらしきリーゼントを手櫛（てぐし）でささっと直す大和田に対し、

「ご……ごめん。触るつもりじゃなかったんだ。転びそうになって、つい」

と慌（あわ）てて謝罪（しゃざい）しているのは苗木誠（なえぎまこと）である。苗木の顔いっぱいに「しまった！」と書いてある。苗木は基本、気持ちが素直（すなお）に顔に出る。

大和田は威嚇（いかく）するように苗木を睨（にら）みつけ舌打ちをして椅子（いす）から立ち上がった。

「今回は大目にみてやる。次からは気をつけろよ」

「うん。わかった。気をつけるよ」

反省する苗木を尻目（しりめ）に、

「触った程度で崩れる男の魂って……うざいんですけどー。なにそれー」

江ノ島盾子（えのしまじゅんこ）が毒づく。それに対しては大和田は再び「チッ」と舌打ちをしただけだった。

「待ちたまえ！　大和田くん！　自分の食器は自分で片付けると決めたじゃないか！　トレイをそのまま放置して立ち去るとは何事だ!!」

石丸清多夏が目をつり上げて大声を発し、歩きだした大和田の後ろをきびきびとした速歩で追いかける。「超高校生級の風紀委員」の石丸にとって体育館以外の校内の場所は走ってはいけない場所なので、たいてい異様に姿勢のいい速歩で移動している。

「うっせぇな」

「なんだと!? けしからんぞ大和田くん!!」

ふたりは不良と風紀委員。相性がいいわけがない。

どちらも「超高校生級」で、どちらも一歩も引かない。あらゆるシーンで一触即発となり、周囲がいつもはらはらする組み合わせだ。

「……あの、ボクが大和田くんのかわりに片付けておくよ。さっきのお詫びに」

そしてこういう際に貧乏くじを引くのはだいたいいつも苗木だ。

苗木の提案に、

「ああ。悪ぃな」

大和田がさらっと告げ、歩き去った。ドアを開けた瞬間、背中に『暮威慈畏大亜紋土』の刺繍が入った長ランの裾がぶわっと揺れる。

──大和田君、かっこいいなぁ。

不二咲はそう思ったのだ。

思ってしまったのだ。

大和田の強さや剛胆さが不二咲にはまぶしかった。ときに野放図にも思えるふるまいも、芯のある強さの表れに感じられる。

──あんなふうになってみたいなぁ。

不二咲は胸の前で両手を組んで、大和田の後ろ姿を見送った。

プログラムのなかに潜むバグを見つけだすように、丁寧に自分の気持ちに向き合った結果──不二咲は自分の心のなかに大和田への憧れを見つけだしたのだ。

バグと憧れを同一視するのはおかしな話だが──大和田の強さに惹かれる分、不二咲はいままで以上に自身の脆さが気になってしまう。表裏一体のその感情が不二咲の心をかき乱すから、大和田への気持ちは一種のバグみたいなものであったのだ。

食堂から自室に戻った不二咲は鏡を覗き込む。

そこに映っているのは、おどおどとした小動物系の自分の顔だ。自然のままで茶色みがかったショート

の髪の毛先が外に向かってウェーブを描いて、はねている。くるりと丸い茶色の目。小学生に間違えられることもある童顔に思わず嘆息を漏らす。

「弱そう……だよねぇ」

　零れた独白の声も、弱々しい。

「ううん……と……。髪には男の魂が宿ってるんだよねぇ。っていうことは、ひょっとしたら髪型を大和田くんみたいにしたら……強くなれたり……しないかなぁ」

　なんとなく髪をひとふさ指で掬い、鏡と向き合いつぶやく。

　くしゃくしゃっと髪を集めてリーゼントになるように前髪を持ち上げてみた。不二咲の髪は細い猫っ毛で、額を出すように前髪を上げても、指のあいだからぱらりと髪の毛が逃げ落ちてしまう。それでも必死に髪を上げ、

「ご……ごらぁ……」

　大和田の真似をして小声で凄んでみた。

　鏡を観察するに、不二咲が強そうに見えない要因のひとつは、いつも困ったように垂れている眉のような気もする。怖い顔を作ってもう一度。

　全身に力が入る。眉ではなく、どうしてか両方の肩がぐいっと持ち上がり、眉間にしわが寄る。しかしそこまでしても不二咲の表情は優しげだ。

「お、おれのリーゼントには男の魂が宿って……宿って……宿っているんだよぉっ！」

　最後のほうは早口になった。言い切ったら顔が真っ赤になった。なぜか走ったあとのように息が乱れた。しかもちっとも強くなさそうだった。

「……やっぱり、無理なのかなぁ…………」

　情けない。

　どこをどう真似ても、大和田のように強くはなれないかもしれない。しゅんと気落ちし、前髪を上げていた手をおろすと――。

「うぷぷぷぷふぷ」

　さっきまで誰もいなかった場所に忽然と姿を現したのはモノクマである。

　モノクマは半身が白くて愛らしいクマ、もう半身は黒くて赤い目とつり上がって裂けた邪悪な笑みで固定されている。聞く者に不安感を呼び込む、ざらざらした独特の声を持つこの学園の学園長だ。

「きゃっ」

　驚いてぴょんと飛び上がった不二咲に、

「ねーねー、不二咲さんはひとりで部屋に閉じこもって、息を荒くしてなにをしているのかなー？　とっても他人には言えないような恥ずかしい遊び？　ねーねー、それ、人に知られたくない恥ずかしい遊びのひとつかなー？　はあ、はあ……頬を染めちゃって……はあ、はあ……」

　モノクマが身悶えるように身体をくねらせて言う。

「違います。遊びじゃないですよぉ」

「恥ずかしいっていうのは否定しないんだー？　うぷぷぷぷぷふ。じゃあそれは恥ずかしい本気ってことなんだねー？」

「え……？」

　動揺したのは、いまの状況を人に知られたら恥ずかしいと感じたからだ。

「遊びじゃないなら本気でしょー？　不二咲さんがひとりで人には言えないような恥ずかしいことを本気でしてる。ああ……なんだか、うっとり～。うぷぷぷぷ。興奮する～」

「あの……それは……」

　そしてたしかに――大和田の真似をしようとした不二咲の行為の根っこには、遊びではなく真摯な本気が含まれていた。

「じゃあボク、突然、帰るね！」

　モノクマは、不二咲がモノクマの言葉を訂正しきれないうちに、来たときと同じように忽然と消えてしまったのだった。

　モノクマに指摘されたとおり――不二咲は「人には言えない本気」な気持ちを大和田に抱いてしまったようだった。大和田のようになりたいという気持ち。形から入ればいいのだろうか？　大和田の魂がリーゼントに籠もっているというのなら、不二咲もあの髪型にすれば大和田のようになれるだろうか。

　翌日、ランドリーに行くと大和田と葉隠康比呂が立っていた。大和田は仁王立ち。葉隠はのほほんとした顔で腕組みをして、回転する洗濯物をじーっと見つめている。

「ぶっちゃけ、洗濯機には宇宙を感じるべ。回転するコスモパワーだべ？」

　葉隠が熱弁をふるっているが、大和田は仏頂面で、聞いているのか、いないのか傍からは不明だ。

　大和田は、いつもどこかピントのずれた不思議なことを言う「超高校生級の占い師」葉隠の言動に、どう反応すればいいのかわからないのかもしれない。

「はっ!?　宇宙ってことは……ここから宇宙人がくるかもしれない。いや、でも洗濯機だべ？　しかし宇宙船につながるワープ装置がある可能性も……？」

葉隠はひとりで混乱し、頭を抱えだした。よくわからないことを言ってひとりで狼狽（うろた）えたり、ひとりで納得したりするのは葉隠の通常の状態だ。
「ああ？　なに言ってんだ、おめぇ？」
　大和田が胡散臭（うさんくさ）そうにうなり返す。その低い声ですらたくましい。
「葉隠君。学園にある洗濯機は宇宙とはつながらないと思うよぉ」
　不二咲は、爆発したようなドレッドヘアーをかきむしりだした葉隠におずおずと声をかける。
「そうか？」
　不二咲を見返した葉隠に「うん」と、ちょこんとした動きで首肯（しゅこう）すると、葉隠はほっとした顔になった。
「だべ？」
「……うん」
　ふたりのやりとりを、大和田がなんとも判断のつかない険（けわ）しい顔で見ていた。大和田の視線が自分に注（そそ）がれ、不二咲はわたわたと落ち着かない気持ちになった。
　見られている！　いま自分は大和田君に見られている！
「あの。大和田君」
「ああ？」
　ぎろりと睨み返され、少し慌てたまま不二咲は言葉を紡（つむ）いだ。
「あのね……その……大和田君の髪型、かっこいいよねぇ」
　昨日からそれしか考えていなかった。だから自然とそう言ってしまった。自分がかっこよくなるためには男の魂のリーゼントが必要な気がする。しかしリーゼントは不二咲の髪質では難しい。
「お、おう……」
　大和田が目を瞬（しばたた）かせ、続けた。
「おめぇ、わかってんじゃねぇか」
　そうして、耳の横のあたりの髪をさっとかき上げてそっぽを向いた。目尻が少し緩（ゆる）んでいるから、褒（ほ）められて悪い気はしないのだろう。
「あのね、僕の髪、柔（やわ）らかくて、大和田君みたいにならないんだぁ。大和田君はいつもどうやってその髪型にしているのかなぁ」
「いろいろとテクがあんだよ。男の勲章（くんしょう）だからな」
　石丸と顔を突きつけるようにして言い争っていたとき、大和田のリーゼントの先端（せんたん）がくしゃっと崩れたのを見たことがある。だからカチカチに固いわけではなさそうなのだ。

触ったら強くなれそうな気がして——。
「そうなんだぁ。あのね、ちょっと触らせてもらってもいいかなぁ」
「駄目だ。リーゼントは男の誇りだ。むやみに触らせるもんじゃねえ」
つまり、うかつに触れてはならないけれど、喧嘩のときに崩れるのはありなのだ。そこにも大和田のリーゼントに対するこだわりや美学が感じられる。
「そうだよねぇ。ごめんねぇ」
きっぱりと断られ、涙目になる不二咲である。
男の魂にして男の勲章にして男の誇り。リーゼントの前髪部分にはさまざまなものが詰まっているようだ。
不二咲はよほどしょんぼりとした顔をしていたらしい。大和田がばつの悪そうな表情を浮かべ、
「悪ぃな。オレのリーゼントは触らせられねぇが、ここから出たときはおめぇにオレの愛車を触らせてやるからそれで勘弁してくれ」
「愛車？」
「バイクだ。めったに人は乗せねぇけど、おめぇはちっとは話がわかるみたいだからな。バイクはいいぞ、バイクは」
活き活きとした目で語りだす大和田に、不二咲もきらきらと目を輝かせて聞き入る。
「本当に触らせてくれる？」
「ああ。男に二言はない。ただ、うちの族の連中におめぇが見つかるとちょっとまずいかもしんねーな。見つからないようにしねーとな」
——やっぱり僕みたいな弱い人間が大和田君の知りあいなんだって思われると不名誉だったりするのかなぁ。
うなだれた不二咲に、大和田は頬を指でぽりぽりと軽く掻きながら言う。
「見つかったらよ、おめぇはその……アレだからよ。『暮威慈畏大亜紋土』は硬派な族だから女は入れてねえ。それでも他の族はマスコットがいるところもあるから、うちにも欲しいって言うヤツがたまにいてよ」
「マスコット？」
きょとんと聞き返したら横で葉隠が「葡萄だべ！」とうなずいている。
それはマスカットだ。さすがに葡萄の話ではないことは不二咲にもわかる。
「おめぇくらいアレだと、そういうヤツが浮かれることもあるかもしれねぇから」
「アレってなんだべ？」

葉隠はぐいぐい会話に参加してくる。
「いちいちうっせぇな。つまり不二咲は……可愛いからよ」
　後半部分は言いづらそうに、つけ足すみたいに早口で言った。
「葡萄に可愛いも可愛くないもないべ！」
「ああ？　誰も葡萄の話なんてしてねーっての」
　大和田が葉隠に言い返す。葉隠は腕組みをしてつかの間逡巡し、
「そうだったべ！　葡萄の話じゃなかったべ！」
　と大きく首肯した。
「うん。話してたのは、バイクの話だよねぇ」
　不二咲が言うと、
「そりゃあいいべ！　年取ったときの趣味として最適だべ！」
　と葉隠は素直に同意した。
「おお、なんだおめぇもわかってんじゃねぇか。年くってもアメリカンタイプのを乗り回してる連中もいるし、バイクは一生の相棒だ」
「アメリカ人も一生やるってさすが国際的だべ。五・七・五だべ」
　──バイクと俳句を勘違いしてるんじゃないのかなぁ。
　すれ違っている会話の内容に、うろうろと大和田と葉隠の顔を見比べた不二咲である。しかしにこやかに会話しているのだから、わざわざ間違いを指摘するのもはばかられる。
　すると錆の浮いた金属みたいな声が背後から聞こえてきた。
「オマエラ、なに和気藹々としているんですかー？　けしからん。ま──ったくけしからん話だよ！　もっと殺伐とすべきなのに笑顔で話し合ってるなんて、当事者としての自覚にみんな欠けてます！　これだからシラケ世代は困る！　コロシアイ、レッツエンジョイ、アーユーオーケー？　詠み人モノクマ」
　途端に大和田の眉間に深いしわが刻まれた。
「うるせぇ!!」
　殺気立った大和田に、
「うぷぷぷぷぷ。不二咲さんの恥ずかしい話をせっかく教えてあげようと思ったのに。ねーねー昨日、ボクは見てしまいました。不二咲さんたら部屋で息を荒げてひとりでアンナことを！」
　とモノクマが不気味な笑い声と共に言う。
　恥ずかしい話って……。

──昨日、大和田君の真似を鏡の前で練習したのばらされちゃう!!

弱いくせになにをしているんだと笑われてしまうかもしれない。大和田に呆(あき)れられたらどうしよう。いたたまれなくなって、不二咲は両手で顔を覆(おお)った。

しかし。

「だから、うるせぇって言ってんだよ！　てめぇの話には興味はねぇ!!　オレはオレの見たもんだけを信じる男だ!!　消えやがれ!!」

大和田がモノクマを怒鳴りつけた。

モノクマは「しょぼーん」と言って、いじけた様子を見せて消滅(しょうめつ)する。

続いて大和田が不二咲に声をかける。

「おい。おめぇ……あれだ。泣くなよ」

大和田は顔を両手で隠(かく)した不二咲を「泣いたのか」と思って慌てたらしい。リーゼントの前髪部分がふわっと下がる。不二咲の顔を覗き込もうと大和田が腰を屈(かが)めた。

「モノクマの野郎(やろう)がおめぇになんか言ってきたらオレがシメてやっから。気にすんな」

──駄目だよぉ。そんなこと言わないでよぉ。大和田君。

不二咲は大和田の男気(おとこぎ)に胸を衝(つ)かれ、本気で泣きそうになった。

「大丈夫。泣いてないよぉ」

顔を覆っていた手を離して返すと、

「そうか」

安堵(あんど)したように大和田が言った。

「あのね。大和田君、ありがとう」
「別にオレはなにもしてねー。ただあいつの言いぐさが気に食わなかっただけだ」
　大和田はふいと不二咲から視線をそらした。
　不二咲の心のなかにあった大和田への憧憬(どうけい)が、さらにまた膨(ふく)れ上がる。どこか照(て)れくさそうにしている大和田の横顔に、不二咲の視線は釘付(くぎづ)けだ。
　無言で見つめていたら、大和田がぼそりと続けた。
「男として許(ゆる)せねぇことってあるからよ」
「そっかぁ」
　大和田の行動原理のすべてに「男として」の裏付けがあるのだ。大和田はなんとシンプルで、なんと力強いのだろう。
　不二咲の胸が熱く震(ふる)えた。
　人と人のあいだで情熱は伝播(でんぱ)する。大和田の「男の気構え」という熱が、不二咲の心に染み渡っていた。
　そのあと少しだけ会話をしてから大和田がランドリーを出ていった。
　残された不二咲は、去っていった大和田をうっとりと眺(なが)め、つぶやく。
「僕もあんな髪型にしたいなぁ……」
　髪型の問題ではない。そんなことはわかっている。でも――他にすぐに大和田を見倣(みなら)い、真似をできる要素が不二咲にはないのだ。
　せめて髪型くらいは……。
　それを聞いた葉隠が言葉を返す。
「はあ？　あれ、髪型じゃないべ。つーか、大和田っちのあの髪型ってフランスパンとかクロワッサンの領域だべ。三割の確率で大和田っちは頭にパンを載(の)っけてるべ!!」
「……パン？」
「なかにパンが入ってるから触らせらんないんだべ！」
「…………パンかぁ」
　荒唐無稽(こうとうむけい)な説である。しかしパンならば不二咲にも焼ける。
　すぐに男らしくはなれなくてもパンならば焼けるのだ！
　――リーゼントにはいろんなものが詰まってるみたいだよねぇ。
　芯としてパンを入れて、そこに髪をふわっと載せて形作ったら、簡単には崩れないが、誰かと喧嘩をし

て顔を付き合わせたときには先端が崩れる理想のリーゼントスタイルができあがるに違いない。
　やってみる価値はある。不二咲はそう思った。

　不二咲はパンの作り方の本を探すために図書室に行った。厨房(ちゅうぼう)にもレシピカードがいくつかあったが、クロワッサンとフランスパンの作り方はなかったのだ。
　図書室では「超高校生級の御曹司(おんぞうし)」である十神白夜(とがみびゃくや)が読書をしていた。椅子に座り書物の頁(ページ)を捲(めく)る十神の姿は、美貌(びぼう)も相まってとても絵になっている。
　だが、十神を熱いまなざしで凝視(ぎょうし)するセーラー服に三つ編み姿の腐川冬子(ふかわとうこ)が、
「なによ。白夜様の迷惑(めいわく)になるから図書室は立入禁止なのに、どうしてアンタなんかが入ってきたの。キーッ。この愛玩(あいがん)小動物ッ！」
　といきなり叫(さけ)びだし、不二咲を押しだそうとした。
　いつもならここで抵抗せずに腐川に負けて去るのが不二咲だ。
　――でも、今回はがんばるんだぁ。
　だってちょっとでも大和田君に近づきたいんだ！
「パンのレシピ本を探したくて」
　声がひっくり返りそうになったけれど必死で腐川に言い返す。
「か、可愛いうえにさらにパンまで手作りして……。アンタもしかして白夜様に気に入られようとしてるんじゃないでしょうね。どうせあたしは……ブスなうえになにひとつできないそんな女よ……」
　地を這(は)うような暗(くら)く陰鬱(いんうつ)な声で腐川が言う。
　腐川は決して視線を合わせず、不二咲の斜(なな)め後ろを見据(みす)えている。
「そんなことないよぉ。腐川さんは素晴(すば)らしい小説を書いてる『超高校生級の文学少女』だもの。すごいと思うよぉ」
「えっ……」
　誉められた腐川の動きが止まる。「いまだ！」と不二咲は「ごめんねぇ。パンの本だけ探したらすぐ出ていくから」とそそくさと書棚(しょだな)の前まで進む。
　静かに探すつもりだったが、腐川とのやりとりがうるさかったようで――。
　十神が本から顔を上げ、斬(き)りつけてくるような鋭(するど)い目つきで不二咲を見た。
「愚民(ぐみん)め。目障(めざわ)りだ。去れ」
「そ、そうよ。去りなさいよ！」

十神の言葉にのっかって不二咲を再び押しだそうとする腐川に、十神が告げる。
「おまえもだ」
「えっ」
腐川が絶句している。
不二咲は書棚の隅にあったパン作りの本をどうにか見つけだし、「ありがとうございました。失礼します」とぴょこりと、ふたりに向かってお辞儀をし図書室を抜け出る。
次にレシピ本を手にして厨房へ向かった。
幸いなことにこの学園生活において食材は潤沢にある。調理器具も揃っている。時間もたくさんある。
厨房にはセレスティア・ルーデンベルクと山田一二三の先客がいた。
「ロイヤルミルクティーご用意いたしました」
ぷるぷるに膨らんだ風船に手足をつけたような山田から紅茶のカップを差しだされ、セレスはカップに口をつけると、
「あら。ぬるいですわ」
と人形のように整った美しい顔の眉をひそめる。刹那、セレスはティーカップの中身を山田の頭に降り注いだ。
「うわっ。あちっ。あちち。ひ～」
頭をかきむしってしゃがみ込んだ山田を冷たい目で見下ろし、セレスが言い放つ。
「熱くはないですわ。よろしくて？」
そこで口調と顔つきが豹変した。
「ぬりーんだよ！　この温度じゃぬりーんだよ！　その身体でロイヤルミルクティーの温度を覚えろ！　このビヂグソがぁ!!」
「は、はい。申し訳ありません。覚えました。覚えましたご主人様。ぶひー」
いつものセレスと山田である。
入り込めない〝ふたりの世界〟を共有している。
「山田君、大丈夫？」
それでも不二咲は山田が心配で小声で聞いた。
山田は勢いよく「なあに、これくらい平気ですぞ。心配ご無用」とすちゃっと立ち上がる。けれどすぐに、
「誰に許可もらって立ち上がってるんだ、このブタがぁ！」
とセレスに張り飛ばされた。

「ぶひー!!」

——僕が声をかけたらよけいに山田君がひどい目に遭ってしまうよねぇ。

本当は助けてあげたいけれど、助けようとするとセレスが山田をもっといたぶる。わかっていることなので不二咲はうつむいて、

「ごめんねぇ。ちょっと使わせてねぇ」

とふたりに断り、材料を揃えて調理台で粉を振るいはじめた。

しばらくはセレスの罵声と山田の悲鳴が厨房を支配した。

「なにを作ろうとされていらっしゃるのかしら？」

とうとうセレスが山田を足蹴にするのに飽きたのか不二咲の側に寄って尋ねる。そして不二咲が答えるより先に、脇に置いたレシピ本を手に取って眺め「パン……ですの？」とつぶやいた。

「不二咲千尋殿！　この学園の食材庫にはすでにパンがあるというのに、なぜあえてパンを焼こうと？」

山田も不二咲に近づき、眼鏡をくいっと指で持ち上げて不二咲の手元を覗き込んで聞いた。

「えっとぉ……」

どう答えていいのか考えると、手が止まってしまう。小首を傾げ「あのね」と隣に立つ山田を見返す。

不二咲の頭のなかでは「大和田君のようになりたい」から「髪型を真似したい」「そのためにパンを焼いて芯にして前髪を固めてみようと思って」というのがフローチャートとなってつながっているのだが……。

あらためて説明しようとしたら、かなり無茶苦茶だ。

——僕、どうしてパンなんて焼こうとしているんだろう？

思い詰めたあまり妙なことをしているような気が……？

「えっとね……」

不二咲は口ごもって山田を見つめた。

「むむ……」

と唸り、なぜか山田は目をがっちりとつぶってしまった。

「……山田君、どうしたのぉ？」

「僕は二次元オンリー二次元オンリー三次元ナッシン二次元オンリー」

謎の呪文を山田がつぶやき、顔に苦悶の表情を浮かべて「ぐぬぬぬぬ」と言っている。

と——。

セレスが凍りつきそうに冷えた声で、

「紅茶のおかわりが欲しいですわね」

と静かに言った。

　山田ははっと目を見開き、

「はい。ただいまご用意させていただきます！」

　下僕(げぼく)の口調でロイヤルミルクティーを淹(い)れるための牛乳を取りに走ったのだった。

　材料を計量し粉を振るい、混ぜて捏(こ)ねる。ぎゅっぎゅっとパン生地を捏ねている不二咲の手元を山田が眼鏡のレンズを光らせ、興味深げに見守っている。

　淹れ直したロイヤルミルクティーを片手に、セレスも「焼きたてのパン、いいですわよね」と食べる気満々になっている。

　もうここまできたらパンを焼かねばならない……。

　途中で正気に戻っても、焼かないという選択肢(せんたくし)を選ぶことは許されない状況になっていた。

　しかも――朝日奈葵(あさひなあおい)と大神(おおがみ)さくらまで厨房にやって来てしまった。

「ねーねー、ドーナツ作ろうよ。ドーナツはいいよ～。天国の食べ物だよ～」

　朝日奈が食い入るように見つめる先には、イースト菌(きん)で発酵(はっこう)させ、膨らんだパン生地(きじ)がある。

「ドーナツかぁ」

　おうむ返しで答え、不二咲はうつむいた。

　それは大和田の髪型からは遠いものだ。美味(おい)しいけれど。

　困惑(こんわく)し、どうしようかとパン生地と朝日奈とを見比べた不二咲の戸惑(とまど)う胸中(きょうちゅう)を察(さっ)してくれたのか、

「朝日奈よ。不二咲はパンを作ろうと努力しているのだ。ここまで努力してきた不二咲のために、初心どおりにパンを作らせるべきだと我(われ)は思う」

　大神が重々(おもおも)しく告げる。

「え～？　でも、そうだね。不二咲ちゃんはパンが食べたかったんだもんね。じゃあ今回はパンで、次はドーナツ作ろうよ」

「ああ。朝日奈のドーナツは我が作ろう」

「やったー」

　屈託(くったく)のない笑みを浮かべた朝日奈に、大神が深くうなずいた。

　朝日奈と大神はとても仲が良く、通じ合っている。ふたりの友情は固いのだ。

「で、パンって何時間くらいでできあがりますの？」

　空気を読まずにセレスが言う。

「捏ねて、発酵させて、成形して、二次発酵させてまた成形してから焼くみたい。三時間から四時間くらいかなぁ」
「二次発酵！」
　山田が小鼻を膨らませて興奮する。この単語のどこに興奮要素があるのか不思議だ。
　さらにパン生地を捏ねるという行為が山田をエキサイトさせていった。
「血が騒(さわ)ぎますぞー。ちょっと失礼」
　山田が腕(うで)まくりをしてパン作りに加わった。山田は、不二咲の返事を待たずに生地を手にまとめ叫んだ。
「パンとフィギュア造形には相通じるものがありますぞ！　キタコレー!!」
「そうなんだぁ？」
　不二咲にはもうそれくらいしか返す言葉がない。
　山田は次々ととても手の込んだ立体造形をパン生地で作り上げていく。山田の思いがけない才覚と器用さに目を見張りながら、不二咲も初志貫徹(しょしかんてつ)でクロワッサンを作る。
「不二咲よ。がんばれ」
「そうだよ。不二咲ちゃん、ファイトッ」
　体育会系女子ふたりに応援されながら不二咲はクロワッサンを——そしてフランスパンを——作った。その横でセレスの罵声(ばせい)を浴(あ)びながら山田がなんだかよくわからないけれど芸術点だけは異常に高いパンを作ったのだった。

　焼き上げたアツアツのパンがオーブンから取りだされた瞬間、みんながわっと声を上げた。
　美味しそうなパンの香りが鼻腔(びこう)をくすぐる。
　山田は胸を張り、朝日奈ははしゃいで跳(と)んだ。大神は「よくやった。不二咲よ、見事、やり遂(と)げたな」と不二咲を褒め、セレスは「新しい紅茶を頼みますわ」と微笑(ほほえ)んで山田に命じた。
　表面はカリッとしていい具合に焦(こ)げ目がついている。キッチンミトンをつけた手で触れる。中身はふわっとしていて、強く握(にぎ)るとぷしゅっとつぶれてしまいそうだ。
　どう考えても、熱いパンを前髪に仕込むと火傷(やけど)をする。それにもう不二咲はパンを前髪に入れるべきだとは思えない。こんなにがんばって、みんなの応援と共に作ったパンは、みんなで食べるべきだ。
　——でも、やっぱり大和田君に食べて欲しいなぁ……。
　当初の目的とはずれてしまったが、努力の成果だ。
　不二咲は、不二咲の熱い想いを込めてこのパンを作ったのだ。

強くなりたい、と！

キンコンカンコーン。チャイムの音が厨房に鳴り響く。ざわっと空気が震え、全員が同時に耳をそばだてる。

『オマエラ、パンが焼けました。食堂に集合です!!』

聞こえてきたモノクマの声の放送はなんとも暢気な内容だった。

パンの盛られた皿が食堂のテーブルにでーんと載っている。頭に載せる予定だったパンだけれど、やはりパンは皿の上にあるのが一番だ。

「美味しそうなパンだね。……なんか、妙に凝った形のパンもあるけど」

一番まともな感想を述べるのはいつでも苗木だ。

「そうですね。焼きたてのパンって、いい匂い。でも最近食べ過ぎてちょっと太った気がするし、どうしよう」

舞園さやかが思春期の女の子らしい悩みを漏らす。くせのないストレートの髪に、セーラー服。清楚な美少女の彼女は、国民的アイドルグループの一員でもある。

桑田玲恩がその後ろからするっと手をのばし「美味そうなほう、もらいっ」と、ひょいっとパンをひとつ掴んだ。クロワッサンを手のひらの上で何度か弾ませてから、齧りつく。赤い髪をパンクロッカー風に立て、ピアスをいくつもつけた彼は、見た目に反して実は「超高校生級の野球選手」である。

「あひっ。これ焼きたてすぎだっちゅーの。アチっ。熱いっ。美味いけどアチーっ!!」

齧りついてはみたが舌に火傷を負ったようで大慌てで水を飲んでいる。

「ふうん。そう。パンね」

全体に体温が低そうに見える霧切響子が、手袋をはめたままパンにそっと触れ、つぶやいた。霧切はなんに関してもテンションが低く、いつでも冷静沈着なのだ。

「一見、パンじゃなさそうに見えるのもあるわ。でもすべてがパンなのね」

と、山田が作ったパンを検分して、言う。

そして──。

不二咲は食堂に姿を現した大和田に、別な皿に盛ったクロワッサンとフランスパンを差しだした。

「大和田君、できたよ。僕の魂をこめた、男のクロワッサンとフランスパンだよ」

大和田はいきなり目の前に出されたパンを見て、驚いたように目を見開いた。

「男の!?」

　怪訝（けげん）そうにしてから、大和田はパンを見る。

「僕が作ったんだぁ」

　――どうしよう。食べてくれないのかなぁ。

　不二咲の心臓がばくばくと鳴った。

「んだよ。くれんのか」

　そう言って――大和田はクロワッサンを掴み取った。そして、大きな口を開けて齧りつく。

「あ……」

　熱い……かも？

「うめえ。なんだこれ。オレがいままで食ったどのパンより、うめぇよ」

　大和田はそのまま次々と皿の上からパンを取って食べていく。

　あっというまに平（たい）らげて、皿が空っぽになった。

　その時間、およそ五分。

「僕が何時間もかけて粉を振るったり捏ねたり発酵させたり焼いたりしたパンを……たった五分で食べてしまうなんて。すごいよぉ。大和田君」

　すごいなぁと思ってしまったのだ。

　不二咲の悩みや試行錯誤（しこうさくご）を、大和田はたった五分で食べ尽（つ）くしてしまう。ためらいもなく手をのばし、美味（おい）しそうに頬張って、飲み込んで――。

「え……なんだよ。わ、悪かったな。もっと味わって食ったほうがよかったか？　ごちそうさん。美味かったから全部食っちまった」

「ううん。嬉（うれ）しいんだ。大和田君に食べてもらえて光栄だなぁ。熱くなかった？　大丈夫？」

「熱くて当たり前だ。……おめぇの魂こもってるって言ってたしな。冷めないうちに食うのが男の心意気ってもんだろ」

「僕の……魂」

「ああ。おめぇの魂、受け取ったぜ！」

　大和田の笑顔がきらっと輝いて見えた。

「大和田君、僕の魂、感じてくれたんだね。僕の……こんな僕の……」

「おめぇ自分のこと『こんな』とか、言うな。美味かったよ。すげぇ、美味かった」

　大和田は不二咲の目を見て、強くうなずいた。

それだけで不二咲は幸福になれる。

　大和田は無自覚のまま、いろんなものを不二咲にくれる。勇気とか希望とか、この先、不二咲が顔を上げて堂々と生きていけるような、なにもかもを渡してくれる。

　涙ぐんでしまった不二咲に、大和田が慌てふためく。

「なんだよ。なんで泣くんだよ」

「だって……嬉しくて」

「はあ？」

「大和田くん！　不二咲くんにいったいなにをした？」

　つかつかと近づいてきた石丸が大和田に食ってかかる。

「なにもしてねぇ！」

「だが、不二咲くんは泣いてるじゃないか!?」

「うっせぇな。なんだよ。やんのかぁ、ごらぁ!?」

　ふたりの顔がぎゅっと近づき、睨みあい、怒鳴りあう。掴みかからんばかりのふたりのあいだで、不二咲は「違うんだ。違うんだよ」ともたついたが、不二咲の制止は大型犬と狼のいがみ合いのなかに放り込まれたマルチーズの遠吠えのようなものだ。

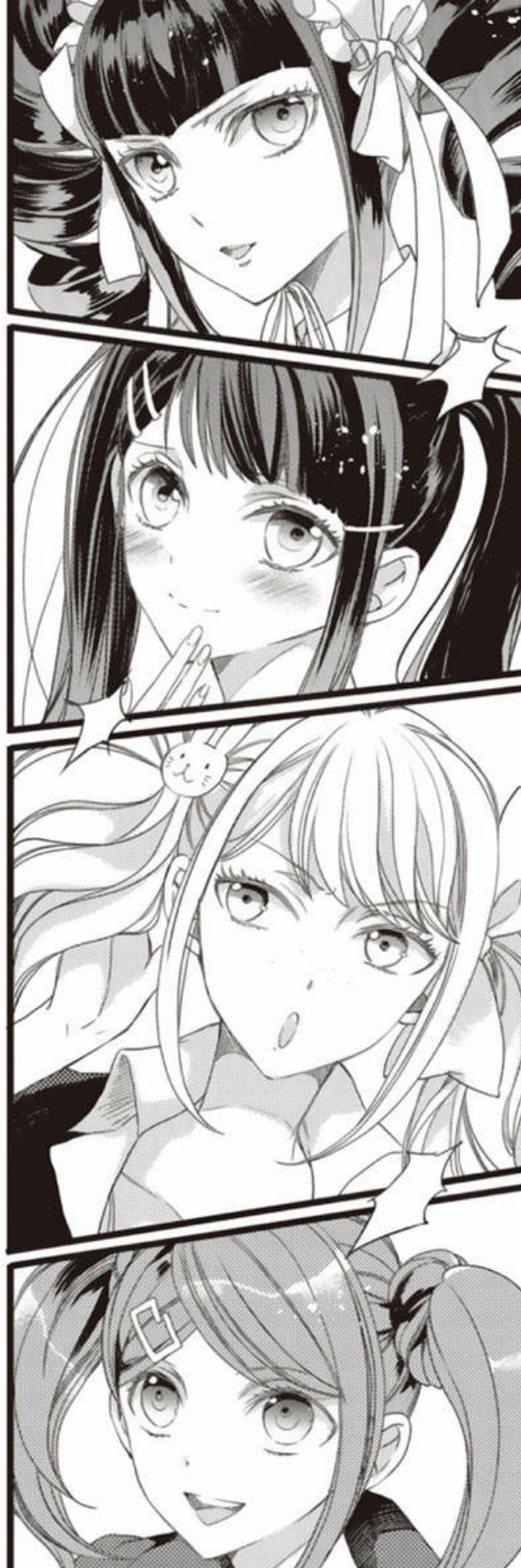
　そしてその騒動は――みんなより遅れて食堂にやって来た十神が、ドア付近で掴みあいをしている大和田と石丸を「なんだ？　邪魔だ」と睨みつけるまで続いたのだった……。

END

illustration：冨士原良

by 明咲トウル
苗木お前不安じゃねーの
超高校級の幸運だけで入学決めて
えっ
キャラクターぷろふぃーる
将来どうなるのか考えなかったのか
運なんて確率だ今後も幸運な保証なんて無い
試験や実技運だけで卒業できるとでも思っていたのか?
うーんまぁねん
でもなんとかなるかなって思って!
試験も!?
うん!
得意科目
くても?
ちょっとだけ前向きに考えればなんとかなるかなって
何…この子怖い!
ぞくッ…
ちょっと心配だったけど
それに入学したとたんこんな事態になっちゃったし…
あっやっぱりなんとかなってるって
何言ってるお前なんて「不幸」じゃねーか
人よりちょっと前向きなだけだよ!
てすと
てすと

ダンガンロンパ
DANGANRONPA
希望の学園と絶望の高校生
[ツインテール天国1]
小説：水澤なな　イラスト：明咲トウル

「あのさー、なんかありえなくね？」
　食堂で急にそう言い出したのは、江ノ島盾子（えのしまじゅんこ）だ。
「どうかしたんですか、江ノ島さん？」
　向かいの席に座っていた舞園（まいその）さやかが、小首を傾（かし）げながら問い返す。
「思ったんだけどさ、このメンツって、なんかかぶり多くね？」
「かぶりって、何がですか？」
　江ノ島の言葉に、舞園がテーブルを見回す。
　席に着いているのは、江ノ島と舞園のほかには、霧切響子（きりぎりきょうこ）、朝日奈葵（あさひなあおい）、腐川冬子（ふかわとうこ）、セレスティア・ルーデンベルク、不二咲千尋（ふじさきちひろ）の五人だ。
「見てわかんだろ？　髪型だよ、髪型！　なんで七人中、三人もツインテールなんだよ！　ぶっちゃけ、マジウザいんですけど」
　その言葉に、セレスが食いつく。
「あら、心外ですわ。こちらこそ迷惑（めいわく）なのですけれど。ツインテールといったら、わたくしのようなゴシック系キャラの専売特許（とっきょ）ですわ。あなたのようなスベタ系ギャルは、盛り髪でも巻き髪でも好きにすればよろしいんじゃなくて？」
「はあ!?　なんだとー!?　誰がスベタだ、このメスブタ！」
「まーまー、ケンカはよくないって。どっちも似合ってるんだからいーじゃん！」
　険悪な二人の間に入り込んだのは、朝日奈だ。

そんな三人のやりとりを横目に、腐川が不平を漏らす。

「うう……っ、あたしのこの髪型がツインテールだというの？　あたしのは三つ編みじゃない。それなのに、そんな文句なんか言われても……」

「え、でもぉ……二つに結わいてたら、ツインテールなんじゃないのかなー？」

　おそるおそるといった口調で、不二咲が口を挟む。

「アンタは黙ってな！　あたしに口出しできるのは白夜様だけなんだから！　殺すよ！」

「ひい……っ！　ごっ、ごめんなさい……！」

　態度を豹変させた腐川に、不二咲が震え上がる。

　怯えた不二咲は、隣にいた霧切の腕を縋るようにぎゅっとつかんだ。

「……心配しなくても、殺されたりしないわ。少し落ち着いたらどう？　それより、髪型がどうこうなんてくだらないわ。そんなにかぶりがイヤなら、坊主頭にでもしたら？」

　霧切の抑揚のない声での発言に、江ノ島が目を吊り上げる。

「はあっ!?　ありえなくねー？　横から口出ししてほしくないんですけど！」

　険悪になったテーブルの雰囲気を打ち破ったのは、朝日奈の声だった。

「あ、じゃーさ、誰がクイーン・オブ・ツインテーラーか決めようよ！　それで、一番になった人がツインテール権をもらえばいーじゃん！」

　――というわけで、全員がツインテール姿になった。

「あたしが似合ってるのは当然でしょ。超高校級のギャルなんだから」

　顎をしゃくってみせる江ノ島に、セレスがもの申す。

「それを言うなら、わたくしこそ似合っていて当然ですわ。正統派、ツインテールキャラですもの」

「あー、はいはい！　二人ともすごい似合ってるよ。私はやっぱ、いつものポニーテールの方が落ち着くかなー」

「うふふ。そんなことないです。朝日奈さんもとてもよくお似合いですよ。私は髪がボリューム不足なのか、あんまり似合いませんね」

「そうかしら？　本職のアイドルだけあって、しっくりきてると思うわよ」

「ありがとう、霧切さん。霧切さんもとってもお似合いです」

「ふ、ふん！　何よ！　上辺で褒め合って馴れ合っちゃってさ！　どっ、どうせあたしなんか！」

　いつもより高い位置で三つ編みをした腐川が食ってかかる。

「えっと、あの……そんなことないよ。腐川さんだって似合ってる、よ」

怯えながらもそう言う不二咲から、腐川はプイッと顔をそらす。
「ふ、ふん！　あんたみたいな短い髪の無理やりツインテール女になんか同情されたくないから！」
「そ、そんなぁ……」
　再び険悪なムードになりかけたところへ、新たな人物が割って入る。
「お主（ぬし）ら、どうかしたのか……？」
　入ってきたのは大神（おおがみ）さくらだ。七人の視線が、大神に釘付（くぎづ）けになる。
「さ、さくらちゃん、その髪型、どうしたの……!?」
　大神は、ふだん乱雑にしている長い髪をキレイなツインテールにしていた。

「……ああ、これか？　今日は風が強くてな。稽古の邪魔になるので縛っただけだ」

　ツカツカと歩み寄った朝日奈が、大神の左手を取って頭上に掲げる。

「ユーアー、ウィナー！」

「なんだ？　どういうことだ？」

　訝しむ大神に向かって、ほかの六人からまばらな拍手が捧げられた。

END

ダンガンロンパ
DANGANRONPA
希望の学園と絶望の高校生
[超高校級の贈り物]
プレゼント
小説：伊織　咲　イラスト：冨士原良

夕方、ボクが教室の扉を開けるとそこには誰もいなかった。

この私立希望ヶ峰学園の生徒は「超高校級」の才能に秀でた生徒ばかり、午前中はここでみんなとわいわい話していたんだけれど、授業もないことだし、みんなそれぞれの才能を研くために訓練でもしにいったのだろう。

「はあ……」

ため息をつくと、教室内の冷えきった空気がゆったりと揺れた。

天に恵まれたひとつの才能。それをみがけるみんながうらやましい。ボクの能力は研きようがないものだから。

「超高校級の幸運」の持ち主、苗木誠。それがボク。

この希望ヶ峰学園に入学できただけでも「幸運」なんだろう。でもなにか——ボクひとりだけの幸運じゃない、みんなのように誰かを助けたり勇気づけたりする力がほしい。

ボクはなにもない手のひらを、なにかをつかみ取るようにぎゅっとにぎりしめた。

そのときだ。

不意にガタッ、と音がしてびくっとボクの背筋が強張った。

冷たい汗を感じながらボクはおそるおそる教室内を探る。すると教室の真ん中あたりの席の下からゆらりと長い黒髪が浮かび上がってきた。

——だっ、誰!?

ボクは思わず後ずさって逃げかけたけれど、髪留めピンを見留めて足を止めた。

「……舞園……さん？」

「あ、苗木君」

机の下から顔を覗かせたのは、クラスメイトの舞園さやかさんだった。

どうやら彼女は机の下で探し物をしていたらしい。けれど「超高校級のアイドル」の彼女の表情はいつになく翳っていて、いつも笑顔の舞園さんらしくなかった。

「どうしたの？　なにか失くしもの？」

「うん、今朝机に入れておいたはずのものが見あたらなくて……」
　舞園さんはいまにも泣きそうなのをぐっとこらえているように見えた。よっぽど大事なものだったんだろう。
「ボクも一緒に探そうか？」
「え？　でも……」
　すこし驚(おどろ)いた様子の舞園さんに、ボクはあわてて言葉を継(つ)いだ。
「あ！　もちろん舞園さんさえよければだけど！」
　舞園さんとボクは希望ヶ峰学園に入学する前からおなじ中学の同級生だった。だけどごくごく普通の中学生だったボクが人気アイドルの彼女に話しかけるなんてできるはずもなくて、この学校に来てから普通のクラスメイトになれたけれど、いまでも接するのにちょっとためらいがある。
　けれど舞園さんもあわてて「いいえ、そうじゃないんです！」と言った。
「苗木君も忙(いそが)しいだろうし悪いなって思って」
「えっ、そんな。ボクは訓練もないし……ボクでよかったら力になるよ」
　その一言にそれまで泣きそうだった舞園さんに笑顔がもどり、ボクもほっとして肩の力が抜けた。
「それでなにが見つからないの？」
　すると舞園さんはすこし照れたように視線を床に落として口を開いた。
「あのですね……」

「ねえ、霧切(きりぎり)さん」
　校舎の上の植物庭園。南国の木々の木陰(こかげ)で洋書に目を落としていた彼女に声をかけると、霧切さんは薄(うす)い色合いの目を上げた。
「あら苗木君……なにか用？」
　あたたかい植物庭園の空気とは裏腹に霧切さんの声音(こわね)は冷え冷えとしていて、表情も鉄面皮(てつめんぴ)を貫(つらぬ)いている。ボクはすこし怯(ひる)みかけたけれど、べつに霧切さんに悪意があるわけじゃない。彼女は誰に対し

てもこんな感じだ。

　だから怖がるな、と自分におまじないをかけてボクは言葉をつづけた。

「霧切さんにお願いがあるんだけど」

　一瞬、霧切さんの目がボクを探るような――観察されたような気がしたけれど、ボクがぐっと耐えていると霧切さんが言った。

「お願いってなに？」

「あ、あの、一緒に失くしものを探してほしいんだ」

「失くしもの？」

「うん。こういうのは霧切さんなら得意なんじゃないかなって。さすがにボクの運の良さだけじゃ無理そうだし」

「ふうん、超高校級の幸運の持ち主でも失くしものをしたりするのね。――で、なにを失くしたの」

　あいかわらずの抑揚のない声だけどどうやら頼みを受け入れてくれたらしい。促されるままボクがそれを答えると、霧切さんの眉がかすかに寄った。

「……手作りクッキー？」

　どうしてクッキーなんて作ったのという思いが、怪訝そうな声音ににじんでいる。

「あっ、ボクが作ったものじゃないんだ。作ったのは舞園さんなんだけど……」

「―――」

　その瞬間、植物庭園の空調が一気に氷点下に下がったかと思った。

　霧切さんの冷たい視線がいつにもまして冴え冴えとボクの顔に突き刺さる。――えっ、ど、どうしたんだろう？

　動揺するボクを前に霧切さんは「……そう」と息を漏らすと、ふたたび洋書に視線を落とした。

「手作りだったらまた作ってもらえばいいじゃない。じゃあね」

　話は終わったとばかりに霧切さんの黒手袋の指先がページを繰りはじめる。

　周囲から意識を遮断してふたたび本の世界に没頭しはじめた霧切さんに、ボクはそれ以上声をかけることができなかった。

「どうしちゃったのかな霧切さん……」

　はじめは話に乗ってくれそうな雰囲気(ふんいき)だったのに、急にそっぽを向かれてしまった。

『手作りクッキー』って言った直後の豹変(ひょうへん)だったけど、なにか気に障(さわ)ったんだろうか。

　冷静な霧切さんの判断力は失(う)せもの探しに向いていると思ったんだけどしかたがない。

　霧切さんの助力を期待できなくなったボクは、クラスメイトの葉隠(はがくれ)くんに相談してみることにした。

「ん～～～～～……」

　娯楽室(ごらくしつ)のソファーの上でハンドボールくらいの透明(とうめい)な水晶玉を唸(うな)りながら覗きこんでいる彼、葉隠康(やす)比呂(ひろ)くんは「超高校級の占い師」で、霧切さんに次いで失せもの探しに向いていそうな人物だ。

　そんな葉隠くんを後ろから見ているボクからは、水晶玉には葉隠くんのおおきなドレッドヘアがゆがんで映っているようにしか見えないんだけれど、超高校級の占い師ってくらいだから葉隠くんにはなにかが見えているのだろう——そう思ったのだけど。

「なーんも見えんべなあ」

　葉隠くんの一言に思わずつんのめりそうになった。

「ええ!?」

「なーんか茶色いふわふわは見えんだけども」

「……それって葉隠クンの髪なんじゃ……」

「おお！　きっとそれだべ！」

　そう言って葉隠くんは「はっはっはー」と豪快(ごうかい)に笑い飛ばしたけれど笑っている場合じゃないって！

「クッキーの在(あ)りかはわからないのかな？」

「わかるべ。けどいまはちょーっとばかり調子が悪いみたいだから先にべつの奴(やつ)を当たってくれねーかな？　その間になんとかしとっからよ」

「べつのって言われても……」

　クラスメイトを思い出しても、ほかに失せもの探しの適任者なんて思い当たらない。

「石丸(いしまる)っちが武道場にいるべ」

「石丸クン？」

石丸っちこと石丸清多夏くんは「超高校級の風紀委員」だ。

たしかに手作りクッキーは舞園さんと教室中を探しまわったけれど見つからなかった。クッキーに足が生えているはずがないし、教室内から無くなったならそれはもう誰かによる窃盗事件だ。教室内で起きた窃盗事件、風紀委員の石丸くんなら力になってくれるにちがいない。

「うん、そうだね。石丸クンに相談してみるよ。でも武道場にいるってよくわかったね。やっぱり占いで？」

そう訊ねたボクに葉隠くんは「いんや？」と首を横に振った。

「さっき通りすがりに廊下から見えたべ」

思わずこけそうになったボクの背中を葉隠くんはばんばんと叩き、ボクの首に腕を回すと親指を立ててみせた。

「俺の占いの的中率は三割だけんど百聞は一見にしかずだからよ！　この目で見たことのほうが確実だべ！」

「…………」

その三割という確率が高いのか低いのかわからないけれど、返す言葉が見つからなかったボクは、

「じゃ、じゃあ行ってくるよ」とふらふらと娯楽室をあとにした。

葉隠くんの目撃情報どおり石丸くんは武道場にいた。クラスメイトの桑田怜恩くんと大和田紋土くんも一緒だ。

桑田くんが矢道の真ん中でボールを、大和田くんが射場でバットを構えている。どうやら野球をしているようだけど、弓道をするはずの場所で罰が当たるんじゃないかな……。

石丸くんは守備なのかと思いきや、監督よろしくふたりの脇で腕を組んで仁王立ちしていた。

桑田くんと大和田くんは火花を散らし合っていて、石丸くんも真剣な面持ちだったけれどそれはいつものことだし、ただの見物なのかもしれないと思って声をかけてみた。

「あの、石丸クン。ちょっと困りごとがあるんだけど……」

「困りごと!? どうしたんだ苗木くん!! さあ、この僕に話してみたまえ!!」
「超高校級の風紀委員」の血が騒いだのか、石丸くんはがぜんやる気でボクの話を聞いてくれた。
「なにっ、教室で窃盗事件!? それはいかん、いかんぞ苗木くん!! クラスの風紀の乱れは即座に正さねば……!!」
「だよね。それで石丸クンの力を借りられないかなって」
「無論！　それを解決するのは風紀委員たるこの僕の使命、いや宿命だ……!!」
　心強い言葉をもらってほっとして、ボクは「じゃあまずは現場を見てもらえるかな？」と石丸くんを促して教室に向かおうとした。けれどそのとき矢道から桑田くんの声が飛んできて、ボクたちの足を止めた。
「おいおい石丸、オレたちの決闘はどうしてくれんだよ」
「苗木テメェ！　男の勝負の邪魔をするんじゃねえ……!!」
「えっ……男の勝負……？」
　ただの野球にしては熱くなってるなって思っていたけれど、どうやら桑田くんと大和田くんは野球で決闘をしていたようだ。そして石丸くんはその立会人だったらしい。
「大和田ぁ！　オレに野球で勝負を挑もうなんて百年早ぇんだよ!!」
「ざけんな！　相手の苦手なことで勝っても男がすたるだけだろうがよ!!」
「一〇〇球ストレートで打ち取ってやるから覚悟しろよ!?」
「上等だ！　シロウトに頭上を越されて泣きをみやがれ……ッ!!」
「…………」
　あまりに熱い男同士の戦いにボクは思わず呆気に取られた。……いや、ボクも男なんだけど、うん、なんか……入りこめないや。
「たしかにこれは正当な男同士の決闘だ！　一〇〇球勝負、この僕が公正な立場で見届けよう！　苗木くん、誠に申しわけないがこちらの勝負が先約だ。だが決着がつき次第、すぐさま駆けつけさせてもらう!!」
　そう言うと石丸くんはふたたび、白学ランの腕を組んで仁王立ちになった。
　一〇〇球勝負っていつになったら決着がつくんだろう……。
　野球は一試合を三者三振で打ち取っても八一球、一〇〇球ってことは一試合分以上の時間がかかるってことはわかる。いくら桑田くんが「超高校級の野球選手」とはいえ、大和田くんも勝負事となったら「超高校級の暴走族」のメンツにかけてそう簡単に負けるはずがない。
　今日中に終わるのは期待できそうにないなと思いながら、「じゃあよろしく頼むよ」とだけ言い残してボ

クは校舎にもどることにした。

「葉隠クン、どう？　なにか見えた？」
　娯楽室にもどると葉隠くんは腕組みして頭をかしげていた。
　覗きこんでみると、さっきまで透明で葉隠くんのドレッドヘアを映し出していたはずの水晶玉が真っ黒になっている。
「えっ、これってどういうこと!?」
「いまどこにあるのか、クッキーのまわりの状況を占ってみようって思ったんだべ」
「クッキーのまわり？」
「そ。それで成功したらこのとおり」
「このとおりって……」
　まさかもう焼却炉（しょうきゃくろ）に捨てられて真っ黒焦（こ）げに……と最悪の事態を予想して青ざめたボクに、葉隠くんが告げた。

「まだ箱の中だからまわりは真っ暗だったべなー！」

　その答えにがくっと全身から力が抜けた。なんだよそれ……。
「つまりクッキーはまだ食べられてないってことだべ！」
「どうせならクッキーの箱のまわりを占ってよ!!」
「そ、それはちょうどいまから占おうと思ってたところで……」
　あきらかにいま思いついたんだよね？　おののく葉隠くんの様子から一目瞭然（いちもくりょうぜん）だ。
「でも苗木っちー。この占いは無駄（むだ）でもなかったべ？　このクッキー、さっきまで揺（ゆ）れていたんだべ」
「揺れていた……？　じゃあ誰かが持ち運んでいるってこと？」
「そーゆーこと。これからどこかで食べるつもりなのかもしれねーな！」

葉隠くんの一言にボクははっとした。
クッキーはラッピングした箱に入っていたと舞園さんから聞いている。ラッピングや箱の重さから中身がお菓子と気づいた犯人が教室外から持ち出して、どこかで食べようとしているのかもしれない。
男の決闘をしていた桑田くん、大和田くん、立会人の石丸くんは犯人ではない。ここにいる葉隠くんでもない。そのほかの誰かだ。
「そういや女子たちが優雅にティータイムをしようとしていたべ？」
その一言にボクははじかれたように娯楽室を飛び出した。

——こうしている間にも舞園さんのクッキーが食べられてしまうかもしれない……！
ティータイムをするにはお湯や茶器が必要だし、確率が高いのは寄宿舎の食堂だ。
娯楽室を飛び出したボクが食堂に向かってあわてて階段を駆け下りていると、階段の踊り場で人とぶつかってしまった。
「いったぁー……」
「ごっ、ごめん！　大丈夫!?」
ぶつかってしまった相手はクラスメイトの江ノ島盾子さんだ。
肩がちょっとぶつかっただけだけど、彼女の華奢な身体は支えきれずに尻もちをついていた。
「急いでたんだ。本当にごめんね」
そう言って手を差し出したボクだけれど、江ノ島さんの短いスカートからかなりきわどいふとももが目に飛び込んできて、「ごごごご、ごめん……！」とあわてて後ろを向いた。
ほんの一瞬、でもばっちり見てしまった白いふとももを忘れようと理性を総動員させていると、不意にボクの首筋をつーっと撫でる指があった。
「えっ、江ノ島さん!?」
「やだー苗木ったら赤くなってるー」

「そんなことないよ！」

「とか言っちゃって首筋まで真っ赤になってかわいー。そんなに急いでどうしたのー？」

「た、たいした用事じゃないんだ。本当にいろいろごめん！」

「えー、理由を話してくれなきゃ盾子許さなぁーい」

　急にぶりっ子じみた声音が混じって、完全に遊ばれてるってわかった。けれど「超高校級のギャル」のおみ足を拝んでしまった以上、ただでは済まないことも事実だ。

　江ノ島さんにもてあそぶように頬を撫でまわされたボクは覚悟を決めて、すべてを話したうえで訊ねた。

「江ノ島さんは教室でそのクッキーを見かけなかった？」

「なに苗木、アタシを疑ってるワケ？」

　江ノ島さんの化粧気の濃い目が険を帯びて、ボクはあわてて両手を振って否定した。

「疑ってるっていうんじゃなくて、クラスのみんなに聞いているところだから江ノ島さんにも聞いておこうかなって……」

「あー、そーゆーこと」

　すると江ノ島さんは、ハン、と笑い飛ばした。

「バーカ、このアタシがクッキーなんてほいほい食べるわけないじゃん」

「え？」

「苗木も見たでしょ。この足、この顔、このナイスバディ。アタシがこれを維持するのにどれだけ苦労してると思ってんの」

「え……え？」

「こっちは身体で稼いでたの。食事だって全部カロリー計算済み。クッキーなんて太るようなもの、考えなしに口にしないって」

「そう、なの？」

　ボクは中学の給食で出されたものをなにも考えずに食べてたけどな。

「女の子ってお菓子が好きなんだなって思ってたんだけど」

「大、大、だーい好き。でもね、だーい好きなお菓子でも食べられないの。食事制限しなきゃいけないし、お肌のメンテも欠かせないし、でもストレスをためてもダメで睡眠時間を減らすのもダメ」

「女の子って大変なんだね……」

「そうそ。カワイイを維持するのって大変なのよ。だからその一件にアタシは関係なし」

「そっか……時間を取らせてごめんね」

「べっつにいいけどー？　でも苗木と舞園ってそーゆー関係だったんだー」
「え!?　ちっ、ちがうよ!?　そのクッキーはボクへのプレゼントじゃないし！」
「ふうん？　そうかなー？　舞園ってば昨日、受け取ってもらえるかな？　ってすっごく嬉しそうに作ってたけどー？」
　そ、そうなんだ……誰にあげるつもりだったんだろ。
「苗木はさー、基本的にいい奴なんだから、もうちょーっとばかり女心を勉強したらイイ線いくと思うよ？」
　すると江ノ島さんは「じゃあね」って撮影のワンシーンみたいに愛らしいポーズを決めて去っていった。

　舞園さんから聞いてなかったけれど、舞園さんはその手作りクッキーをどうするつもりだったんだろう。当然プレゼントなんだろうけれどいったい誰にあげるつもりだったんだ？
　そんなことを考えながら階段を下りていると、二階の廊下にクラスメイトの腐川冬子さんの後ろ姿が見えた。
　え、いまワゴンに載せて運んでいたのってまさか、ティーポットなんじゃ？
「ちょっと待って腐川さん！」
　けれどボクの声なんて耳に届いていないようで、腐川さんはにやけきった顔をしたままワゴンを押して室内に入っていった。あそこはたしか図書室だ。図書室は飲食禁止だっていうのにあんなところでティータイムをするつもりだろうか。
　ボクがあわてて後を追うと、ふたりきりの図書室で腐川さんはとろけてこぼれ落ちそうな顔をしながら紅茶を注いでいた。
　その近くに座って経済誌を読んでいたのはクラスメイトの十神白夜くんだ。
　十神くんは腐川さんがそっと差し出した紅茶に顔を上げもせずに「ご苦労」とだけ言って手を伸ばした。
「ねえ十神クン……」

邪魔しちゃ悪いなと思いながらもボクが声をかけると、十神くんは視線だけわずかに上げて眼鏡(めがね)越しにボクを見留めた。
「なんだ、苗木か。なんの用だ」
「あの、図書室は飲食禁止のはずなんだけど……」
「それがどうした」
十神くんの口ぶりは、そのようなことは言われなくても知っていると言わんばかりの堂々としたものだった。
「だからここでの飲食は……」
「この俺が喉(のど)がかわいたから持ってこさせたんだ。なにが悪い」
「えっと……水分で本が傷(いた)んでしまうかもしれないし……」
すると十神くんはそんなボクの意見は、はん、と鼻で笑い飛ばした。
「ここの本はすべて十神からの寄贈(きぞう)だ。傷んだならまたすべて買い換えてやるさ。それで文句(もんく)なかろう」
十神くんは「超高校級の御曹司(おんぞうし)」、十神一族の跡継(あとつ)ぎだ。たしかにこの希望ヶ峰学園は私立だし、スポンサーがいいっていえばいい話なのかもしれないけれど……。
話は終わったとばかりに視線を雑誌にもどした十神くんに、ボクはあわてて食い下がった。
「あのさ十神クン、ちょっと訊きたいんだけどさっき教室でお菓子を拾わなかった？」
「は？　菓子？」
「そう。可愛(かわい)らしくラッピングされた手作りクッキーなんだけど――」
「白夜様がそんなことするわけないじゃない！」
説明途中に甲高(かんだか)い叫び声を上げたのは傍(かたわ)らにいた腐川さんだった。
「苗木はこの白夜様が落としものを拾うような御方(おかた)だと思ってるわけ!?」
「腐川、黙(だま)れ」
「――――」
十神くんはたった一言で腐川さんを鎮(しず)めて、言葉を継いだ。
「俺は落ちているものを拾う趣味もないし、素人(しろうと)が作った菓子にも興味はない。健康管理は上に立つ者の第一条件だからな」
十神くんにそう言い放たれるとそうかもなと思ってしまう。実際、教室に落ちていたとしても十神くんが拾う姿、ましてや食べる姿なんて想像できない。邪魔だと蹴(け)りとばすのが関の山だ。
「用件はそれだけか？　――誰がおまえまで飲んでもいいと言った」

「ひっ！」

　十神くんは、言葉を封じられた腐川さんが背後でこっそり自分の紅茶を注いでいたことに気づいていたらしい。腐川さんは待てを命じられた犬のようにその場で固まった。

　たしかに十神くんの堂々とした言葉には力があるけれど、絶対服従するほどのものだろうか？　腐川さんが十神くんに好意を寄せているのはわかるけど……女の子の気持ちってよくわからないな。

「そういえば腐川さんは厨房から来たんだよね。ほかに誰かお茶する様子はなかった？」

「…………」

「苗木の質問だ。答えろ」

「は、はい……っ！　しょ、食堂にセレスがいたわよ！」

「セレスさん？」

　セレスさんことセレスティア・ルーデンベルクさんもクラスメイトのひとり、ゴシック趣味のツイン縦ロールのお嬢さまだ。

　貴族の風格があり、バラに囲まれた優雅なお茶会が似合いそうな雰囲気を持っている。

「そういえば先日、セレスがお気に入りの輸入品クッキーを食べ尽くしたらしくてな。うちで取り扱っていないかと聞いてきたぞ」

「えっ!?」

　じゃあクッキーを切らしたセレスさんが持ち去った犯人？

　ボクは十神くんと腐川さんに礼を言うと、食堂に向かって駆けだした。

「あら、苗木君ではありませんの」

　寄宿舎の食堂に飛び込むと、腐川さんの言ったとおり、セレスさんがひとり優雅にお茶をしていた。

　ボクは急いでテーブルに目を走らせたけどそこにクッキーはなくて、すこしほっとした。

「どうしましたの？　そんなに息を切らせて急ぎのご用？」

「あの、セレスさん、教室でクッキーを見なかった？」

セレスさんは思いがけないことを聞いたように「クッキー？」と問い返した。
「……さあ、見おぼえがありませんけれど……それがどうかしましたの？」
　ボクはいままでの経緯をひととおり説明して、
「なにか知っている人いないかなって、みんなに訊いてまわってるんだけど」
　そう告げると、セレスさんは「まあ」と声を上げた。
「じゃあ苗木君はわたくしが食べてしまいやしないかとあわてて来たんですの？　──冗談じゃありませんわ。わたくしは一庶民の作ったクッキーなんて口にしませんわ。わたくしがいつも食べていたのは祖国から取り寄せたものですもの」
　言われてみればたしかにそうだ。セレスさんがお茶をしている姿はよく見かけるけれど、お茶請けはきまって横文字のパッケージに入った舶来ものだった。
「そのクッキーは食べ尽くしたって十神クンから聞いたから」
「そうですわね。この状況でも十神財閥の力ならなんとかなるかもと思ったんですの。でもクッキーがなければマカロンを食べればいいだけですわ。それでなにか問題でも？」
　どこかの王妃さまみたいな言葉だな……。
　けれどそれを当然のように言ってのけて似合ってしまうセレスさんに、ボクは「そ、そうだよね……はは」と話を合わせて愛想笑いを浮かべるしかなかった。
　やっぱり女の子ってよくわからないや……。

　寄宿舎から学園棟にもどったボクは、教室の前まできていたことに気がついた。
　学校中を駆けまわったけれど手がかりがつかめないまま捜索の糸口が切れてしまった。クラスメイトにも大勢訊いてまわったのに目ぼしい情報はなにもない。
　でもクッキーが教室から勝手になくなるはずもないから、持ち出したのはクラスの誰かってことになるんだけど……

残るクラスメイトはあと数名。こうなったら全員に話を訊いておこうと、すべてのクラスメイトに訊いてまわることにした。

このちかくにいるのは体育館にいる大神さんかな。「超高校級の格闘家」である彼女はいつも体育館で自主練習に励んでいる。

彼女がプロテイン以外のものを摂取している姿は想像できないんだけど、あの大きな身体を維持しているんだからお腹がすくことだってあるだろう。

けれど体育館を訪れたボクにかけられたのは意外な声だった。

「あー苗木ー、おーっす！」

「あれ？　朝日奈さん？」

体育館前ホールには大神さくらさん、朝日奈葵さん、そして不二咲千尋さんがいた。

「超高校級のスイマー」の朝日奈さんは大神さんとおなじ体育会系だからかよく一緒にいるけれど、「超高校級のプログラマー」の不二咲さんも一緒というのはめずらしい組み合わせだ。

「練習してたらお腹すいちゃってさー。さくらちゃんと食べようと思って購買に行ったら不二咲ちゃんと出くわしたから誘ってみたんだー。苗木も入ってく？」

三人は女子会といった感じで車座になり、めいめいに飲み物を置いてその中心はお菓子であふれていた。――ん、お菓子？

「ちょっ、ちょっと見せて！」

ボクがあわてて三人の輪に割って入ると、不二咲さんが「どうしたの、苗木君？」と小動物のような目で心配そうに見つめてきた。

そんななかボクがお菓子をあさるともうかなり食べ散らかされていて、その中にはクッキーもあった。これって……

「朝日奈さん、このクッキーは……？」

「さあ？　多分さっき購買で買ったやつだと思うけど。でも教室の机に入れておいたものも持ってきてるからちがうかな？」

「朝日奈さんの机の中、お菓子でいっぱいでしたもんね」

「そうそう。いろんな人からもらったお菓子も突っ込んであったから、不二咲ちゃんと一緒に持ってきたんだー」

「……そのときさ、朝日奈さん、教室でお菓子を落としたりしなかった……？」

「あ、うん。両手で抱えきれなくて派手に落としちゃったんだよー。でも苗木、よくわかったね？」

朝日奈さんと舞園さんがいた席はすぐちかくだ。抱えきれんばかりのお菓子を落としてしまって、不二咲さんに手伝ってもらって拾ってここに持ってきた――そのとき、はじめから落ちていた舞園さんのお菓子も一緒に拾ってしまった。

つまり……

「舞園さんのクッキーを持ち去った犯人は、朝日奈さん、キミだ……！」

「…………は？」

人指し指を突きつけたボクに朝日奈さんは呆然(ぼうぜん)としていた。朝日奈さん本人に持ち去る意思はなかったのだから無理もない。

「苗木君、舞園さんのクッキーってなに？」

不二咲さんに訊かれてボクが説明するとみんな静かに聞いていたけれど、やがて大神さんがぽつりと言った。

「――ちがうぞ、苗木。朝日奈ではない」

「え？」

「朝日奈はずっと我(われ)と共(とも)にいた。朝日奈が口にしていたのは市販の菓子ばかり。どこぞの誰が作ったかも知れぬ怪(あや)しいものは我が口にはさせぬ」

「ええ……!?」

大神さんのその断言に、ボクは食べ散らかされた包装紙をあさってみると、たしかにすべての包装紙に製造元を示すシールが貼(は)ってあった。つまり大神さんの言い分が正しかったということだ。

しまった～～～……!!

「苗木ヒドイよ！　食べ物だからってなんでも私のせいにして！」

「ごっ、ごめん朝日奈さん……!!」

ぶーぶー言っていた朝日奈さんだけど、ボクが土下座(どげざ)せんばかりに平謝(ひらあやま)りするとすぐに態度を軟化(なんか)させてくれた。

「まあいつもお腹すかせてるし、疑われるのもわかるけどさー。本当にそのクッキーを拾ってたら気づかずに食べちゃってただろうし……」

犯人だとまちがった相手が朝日奈さんで助かった。これが熱血男子連中だったらぼこぼこにされるとこ

ろだし、十神くんやセレスさんだったら一生恨まれそうだ。
「けどさ苗木、犯人はキミだってなにー？　推理ドラマの真似？」
「あ、いや、ははは……」
「なんか面白そうだね。話聞かせてよ」
　わいわいと話が膨らんで思わず女子会に引きずり込まれていたボクだけど、
「——バカね」
　冷たいその一言がボクを現実に引きもどした。
　ふり返ると、体育館ホール前の扉に腕を組んでもたれかかっていたのは。
「霧切さん……？」
　植物庭園ですげなく断ってきたはずの彼女だった。

「ついて来なさい」

抑揚の薄い声でそう言い残すと霧切さんはさっと踵を返した。

ボクが霧切さんについてゆくと、ついた先は四階にある情報処理室だった。

普段は不二咲さんがプログラムの勉強をしているはずの場所だ。でも不二咲さんは一階の体育館前ホールにいたし、ほかに情報処理室を使うような人はいないから無人のはず。そして事実、情報処理室の灯りは消えていたけれど、室内はほんのりと明かるかった。

なんの光なんだろうと思って近づくと一台のパソコンが起動している。

そしてその席に座っている人物がひとり。

「山田クン……？」

ほの暗い室内で「ひぃ！」と声を上げたのは「超高校級の同人作家」であるクラスメイトの山田一二三くんだった。

「なっ苗木誠殿！　ななな、なにか我輩にごごご、ご用でも……？」

「山田クン、なんで電気をつけないの？」

「あわわっ、我輩としたことが失念しておりました……！」

そのときいっせいに部屋の灯りがついた。霧切さんがスイッチを押したらしい。

――あっ！

山田くんが操作していたパソコンの傍らにあったもの、それはラッピングされた小箱だった。

「――山田クン、それ、なに？」

「こっ、これはっ！」

「教室で拾ったものなんじゃないの？」

「た、たしかに拾ったものでして、あとで石丸清多夏殿に届けようかと……！」

そういえば石丸くんは武道場なんて意外な場所にいたから、彼が見つかるまで預かっていたという話も

辻褄が合う。

「でもその不自然な透明袋はなにかしら？」

　霧切さんがそう指摘したのでよく見てみると、小箱は透明な袋で覆われていた。赤を基調にした包装紙で綺麗にラッピングされているのに、その上からさらに透明な袋で包んである。あきらかに不自然だ。

「超高校級のアイドルの手作りだってわかっていたから、そうやって指紋や汚れがつかないようにしたんじゃない？」

「そっ、それは……！」

「そしてわざわざ情報処理室まで持ってきたってことは、誰かに見せびらかして自慢でもするつもりだったのかしら？」

　この学校は超高校級の生徒ばかりだから忘れがちだけど、超高校級のアイドル舞園さやかの手作りなんて言ったらファン垂涎のアイテムのはずだ。一目拝みたいと思う人も大勢いるだろう。

「え、でも山田クンってアニメキャラにしか興味がないんじゃなかったっけ？」

　同人っていうのはよくわからないけれど山田くんはとてもアニメにくわしくて、アニメの二次元キャラが大好きだ。でも三次元アイドルは守備範囲外だったはず。

　しかしその一言はオタク心に火をつけたらしく、山田くんは胸を張って語りだした。

「舞園さやか殿はたしかに実在アイドル、しかし彼女本人がアニメ化されるのではというほどの人気者！　仲間内でもアニメ化はいつなのかと議論が絶えない存在で――」

「……ふうん、そうなの」

　霧切さんの零下の声音に「ひぃぃぃ!!」と山田くんはすくみ上がり、すべての真相を自白した。

「ラッピングもそのままだし中身も大丈夫だと思うよ」

　クッキーを取りもどすことに成功したボクは舞園さんにそのクッキーを返すことにした。

　お昼に舞園さんの机の下で偶然クッキーを拾った山田くんはそれが舞園さんの手作りだと気づき、こっ

そり持ち出してネットで仲間に自慢しようとしていたところだったらしい。
　クッキーは指紋ひとつつけないよう念入りに保管されていたから、これなら中身も問題ないはずだ。オタクな山田くんがコレクターズアイテムを扱うのに慣(な)れていたのが不幸中の幸(さいわ)いだった。
　舞園さんは「取りもどしてくれてありがとうございます」とそれをボクから受け取ったけれど、透明袋から取り出すと向きを変えてボクに差し出した。
「苗木君、これ、よかったらもらっていただけませんか？」
「え？　でも他の人に贈るはずだったんじゃ……」
　すると舞園さんはふるふると首を横に振った。
「本当は海外公演をしているはずのアイドル仲間に贈るつもりだったんですけれど、今日中に発送しないと間に合わないからいま別のものを送ってきたところなんです」
　本当に届くかどうかはわからないですけど、と舞園さんは力なく微笑(ほほえ)んだ。
　……ああ、そうなんだ。だからあのときあわてて探していたんだね。
　外の状況がわからないいま、ここからの送り物がアイドル仲間に届く保証(ほしょう)なんてない。けれど舞園さんは届くと信じて作ったんだ。──舞園さんの希望、叶(かな)えてあげたかったな。
「間に合わなくてごめんね。せっかく仲間のために作ったのに……」
　すると舞園さんは「ううん、そんなことないです！」とあわてて否定した。
「今日、苗木君が声をかけてくれてすごく嬉しかったです！　……あ、あの、今日だけじゃなくて、苗木君はいつも親切にしてくれて、ずっと感謝していたんです」
　そして舞園さんは恥(は)ずかしそうにうつむいていたけれど、やがて顔を上げて言った。
「──いつもありがとう、苗木君」
　それはテレビの中でさえ見たこともない、舞園さんのとびきりの笑顔だった。

「霧切さんのおかげで助かったよ」
　すべての片が付いたときにはもう夜時間になっていた。

「舞園さんの用には間に合わなかったけれど、無事解決することができてよかった」
　すると霧切さんはボクが抱えるラッピング箱を見やり、目をすがめた。
「……それ、あなたに渡すためのものじゃなかったの？」
「えっ!?　まさかボクのためのはずないじゃないか……！」
「そうかしら。あなた、彼女とずいぶん親しそうだし」
「それはただおなじ中学だったからだよ！」
　舞園さんとは単なるクラスメイト、プレゼントをもらったりする仲じゃない。
「とか言ってちゃっかり受け取ってるじゃない」
「これはただのお礼代わりで……」
「そうかしらね？　食事制限のきびしいアイドル仲間にそんなカロリーの高いものを贈ったりするかしら？　それに外部とはずっと連絡が取れていないのに急に贈り物だなんて」
　あれ？　そういえば江ノ島さんからおなじような話を聞いた気がするぞ？
「でも公演中のアイドルってカロリー消費もすごそうだし、もしかしたら届くかもしれないじゃないか。……届いてほしかったんだよ、きっと」
「そうかもしれないわね。でもそのクッキーははじめからあなたに渡すためのものだった――そう考えたほうが辻褄が合うわ」
　結果的にこうしてクッキーがボクの手許（てもと）にある以上、霧切さんの説を否定できない。けれど江ノ島さんも霧切さんも考えすぎだよ。べつにボクは舞園さんからプレゼントをもらうような仲じゃないんだから。
「まあ、どっちにしろ今後はせいぜい利用されないように気をつけるのね」
「利用って……それは違うよ。舞園さんはそんな人じゃない」
　ボクはそう反論したものの「そうかしら？」と霧切さんは否定的だ。
「それにボクだって利用されたなんて思ってないよ」
　今日一日、ボクはクッキーを探して校舎中を駆け回ったけれど、全然苦じゃなかった。クラスメイトのみんなとたくさん話せたし、いつもより充実した一日だった気がする。
「舞園さんに喜んでもらえてボクも本当に嬉しかった。ボクの才能はみんなとちがってほかの誰かの役に立ったり勇気づけたりするものじゃないけれど、ボクにもできることがあるんだなって」
　みんなのためになにかがしたい、そう思っていたけれどなにもなかった手のひら。でも今はこの手の中には舞園さんの感謝の想いの詰（つ）まったクッキーがある。
「特別な才能じゃなくてもなにかできることがある、そうわかってよかったよ」
　その言葉を霧切さんはボクの隣で静かに聞いていたけれど、やがてぽつりとこぼした。

「――苗木君はお人好しすぎるわ」
「お、お人好しって……」
　あんまり褒められた言葉じゃないような……でも気にかけてくれているのかな。

「心配してくれてありがとう、霧切さん」

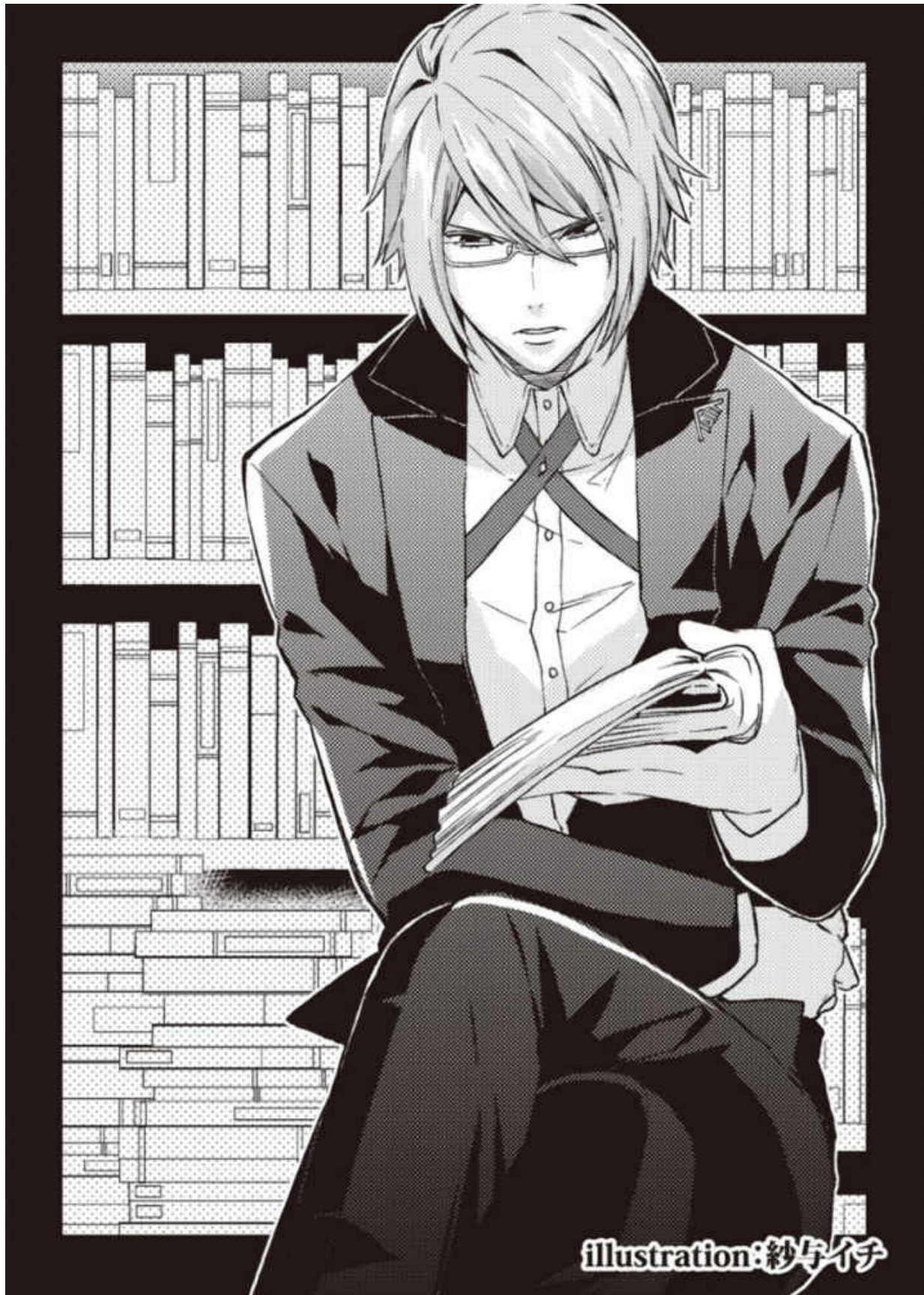
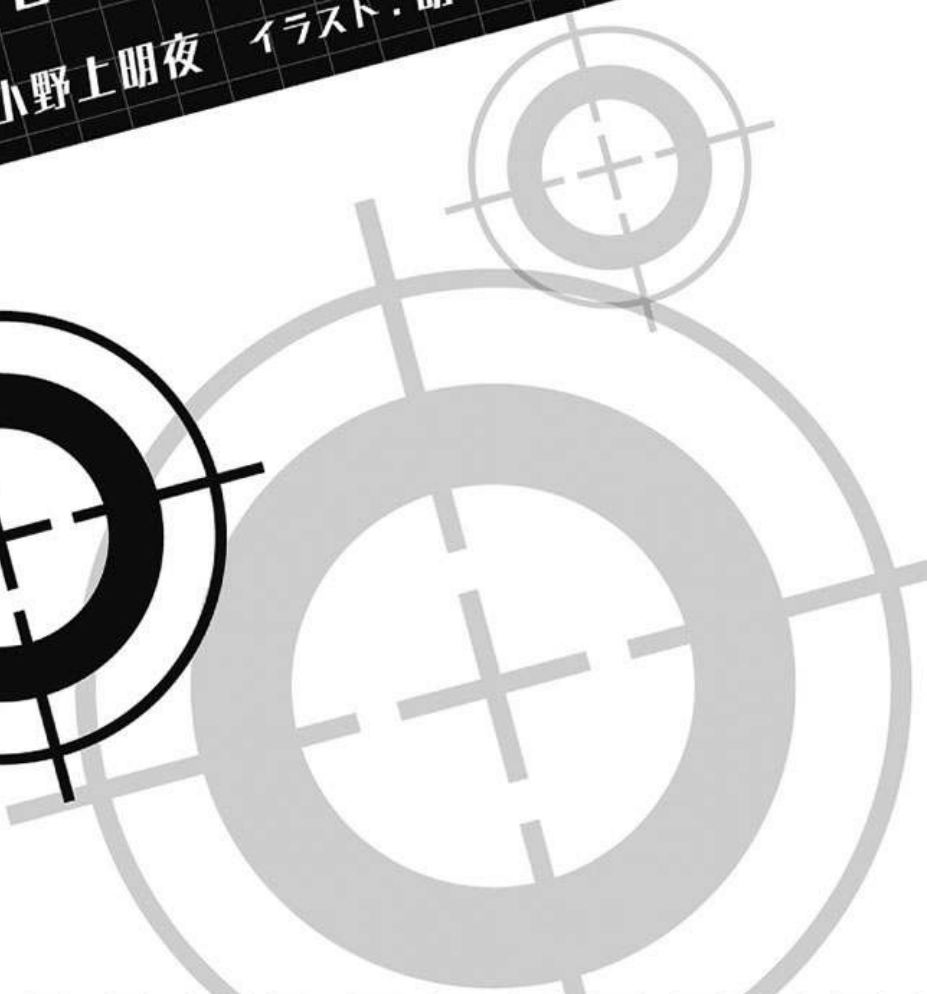
　傍らの霧切さんを見つめて告げる。すると霧切さんはすこし視線を逸らし気味に目を伏せた。……え、どうしたのかな。
「……そんなふうだから利用されるっていうのよ」
「え？」
　すこし小声だったから聞き取れなくて聞き返すと、霧切さんは内ポケットからなにかを取り出した。
「あげるわ」
　それはシンプルなラッピングのほどこされた小箱だった。
「え……開けてもいい？」
　霧切さんはうなずいて、開けてみるとちいさなクッキーが並んでいた。クッキーはひとつずつ形がちがって、一番右端にあるのは星形クッキーだ。
「カウントダウンクッキーよ。海外での風習で毎日ひとつずつ食べて幸せなクリスマスを待つの。苗木君にもあげるわ」
　――毎日ひとつずつ、幸せになるために。
　先の見えない絶望の毎日、だけどなんだか幸せのおすそ分けをもらったみたいな気分だ。
　霧切さんは超高校級のパティシエなんかじゃないと思うけれどとても嬉しい。人を幸せにするのは特別な才能だけじゃない、そう言ってもらえたような気さえする。
「あっ、ありがとう！　霧切さん！」
　その言葉に応える霧切さんの表情は、冷えきった夜でも温かく感じられるものだった。

END

illustration：紗与イチ

取り扱い注意
紗与イチ
あ
十神クン 襟が折れて 皺になってるよ
！
昨日資料を 読んだまま 机で寝たからか…
わざわざ それを 立ち止まったのか？
あーうん
ご苦労な ことだな
十神クンみたいな人でも そんな普通な一面が あるんだなって… 親近感湧いちゃったよ
喜べ おまえのような愚民を 俺のアイロン係に任命してやる 嬉しいか？そうかそうだろうな 涙が出るほど嬉しいだろうな なにせこの俺のために働けるん からなおまえも十神のた
じゅう
うううう
あついあついあついよ 十神クン
おしまい！

illustration：高山しのぶ

スーパーダンガンロンパ2
さよなら絶望学園
SUPER DANGANRONPA 2
[派遣勇者ナナミンの怠惰な冒険]
小説：小野上明夜　イラスト：明咲トウル

真っ黒な画面から流れ出す、今時三音で構成されたチープな音楽。俗にピコピコ音などとも呼ばれる、どこかノスタルジックなメロディに誘われて画面内に現れたのは、ドットで構成されたキャラクターたち。昨今のリアルなCGを見慣れた眼には、その粗さがむしろ魅力的だ。

限られたデータでも分かりやすいよう、強くデフォルメのかかった二頭身キャラたちは画面内を縦横無尽に走り回った後、やがて中央下部に横一列で整列する。

同時にパンパカパーン、と派手なSEが流れ、並んだキャラの上にタイトルロゴが現れた。あえてダサ目のフォントで綴られた題名は「はけんゆうしゃ　ナナミンの　たいだな　ぼうけん」。

「うん、これぞゲームって感じだね!!」

ナナミンこと七海千秋は、最新鋭の携帯ゲーム機画面を見つめて満足そうに微笑んだ。

ジャバウォック島の一画にあるホテル・ミライ。二階のレストランに三度の食事が用意されているため、希望ヶ峰学園コロシアイ修学旅行ご一行様は、毎日ほぼ決まった時刻にこの建物を訪れる。

一階はロビーだが、無人のレセプションに用もないため大抵は素通りだ。だが本日は隅に置かれたソファに座って無心に小さな画面を見つめている七海に気づき、日向創が声をかけてきた。

「七海、今日は携帯ゲームをやってるんだな。しかも、モノミまで一緒になって」

七海の生活は食う寝るゲームで構成されている。普段なら夕食前のこの時間は設置されたゲーム機に貼りつき、延々名古屋撃ちなどをしているため、珍しがられているようだ。

「あ、日向くん。ゲームっていうか、バグ取りだよ」

一瞬だけ顔を上げて挨拶した七海は、すぐにゲーム画面へ眼を戻した。

「あちしはお手伝いでちゅ！」

隣のモノミは何やら誇らしげだが、はた目には七海と一緒に画面を見ているだけにしか見えない。専門用語が分からなかったらしく、日向が眉根を寄せた。

「……バグ……？」

「デバッグのことかな、七海さん。プログラムのバグ、つまりはミスを探して修正してるってことだね」

横から話に入ってきたのは、爽やかな笑みを浮かべた狛枝凪斗である。超高校級の幸運という才能

の持ち主（ぬし）である彼は、己（おのれ）の才能が文字どおりの運頼み、過ぎる幸運とバランスを取るように訪れる不運という扱（あつか）いの難（むずか）しさのためか、他の生徒の才能に興味津々（きょうみしんしん）だ。

「うん、そう。今自作ゲームのテストプレイ中なんだ。モノミちゃんに感想をもらってるところ」

　飛び交（か）う単語で大体状況が把握（はあく）できたらしく、日向が興味深げな顔をした。

「そういや七海は超高校級のゲーマーだよな。お前が作ったゲームのデバッグをしてるのか？」

「簡単なのだけどね。今はゲームが作れるプログラムもたくさん無料配布されてるから」

　個人作のゲームなど今時珍しくない。中には商業作品として販売されるものだってある。これぐらい大したことないと七海は思っているが、才能大好きな狛枝の眼が輝（かがや）き始めた。

「へえ、すごいな、さすが七海さん！　ねえ、よかったら見せてもらってもいいかい？」

「いいよ、どうぞ」

「おい、よせよ狛枝、邪魔（じゃま）してやるな。ミスするかもしれないだろ？」

　日向は渋（しぶ）い顔をするが、むしろ望むところだ。そろそろモノミ以外の、特に日向創の意見がほしいとは思っていた。

「大丈夫だよ、 ATB（アクティブタイムバトル） じゃないから」

「……アクティブ……？」

「そうだよ、モノミごときの意見を必要とするなら、ボクらの意見はさらに必要でしょう？」

　才能大好きな狛枝は、才能を持たない者には大層辛辣（しんらつ）である。

「狛枝くん、ひどいでちゅ！」

　……いろいろな意味でまあいいや、という顔をした日向が、狛枝と一緒に画面を覗（のぞ）き込んできた。

　オープニングはとっくに終了し、現在の画面はゲームプレイ中のものだ。タイトル画面同様、プレイ画面もオールドットで表現されている。

　上のほうにバーカウンターが配置されており、その向こうにはピンク髪の二頭身キャラクター。特殊（とくしゅ）なイベント演出を除（のぞ）き、ここ「ゆうしゃはけんしせつ」以外の画面が表示されることはない。

「『はけんゆうしゃ　ナナミンの　たいだな　ぼうけん』……？　このゲーム、お前が主人公なのか？」

　画面の最上部に表示されたタイトルを読み上げ、日向が質問してきた。ピンク髪のキャラの髪型は外跳（そとは）ね気味（ぎみ）のおかっぱで、眼の前の少女にそっくりだ。

「うん、まあ、そうだね。プレイヤーは勇者派遣業（ゆうしゃはけんぎょう）受付の『ナナミン』になって、お助けキャラの『ウサミン』

にアドバイスしてもらいながら、各クエストに見合った能力を持つ勇者を派遣していくの」
　ゲーム内の「ナナミン」の横には、なるほどウサギ耳が特徴的な「ウサミン」がいる。モデルは聞くまでもないだろう。
「派遣した勇者がうまくクエストをこなせればOK。たくさんクエストをクリアして、経験値とお金を貯めて準備を整え、最終的に魔王シロクロクマを倒せばクリアだよ」
　ナナミが説明をしている間に、下からモブキャラが現れて、カウンター越しにクエスト、すなわち依頼内容を告げた。まだ始まってすぐの段階なので、「かけだしのそうげん」にて「やくそう」を三個集めてきてほしいという至極簡単なものだ。画面右上に表示された選択肢から「うける」を選ぶ。
「つまり、肝心なことは人任せってことか。お前らしいな……」
　日向が苦笑し、狛枝がフォローを入れた。
「そんなことないよ、采配って難しいんだから。七海さんが作ったゲームなんだし、派遣する勇者の適性を相当見極めないと、すぐ詰まっちゃうんじゃないかな？」
「……そうだね。各勇者キャラの能力値は結構極端だから、難易度は高めだよ。一度派遣したキャラは戻せないし、クエスト中の行動はキャラ任せだし、死んじゃったキャラはロストして復活しない仕様だし。ゲームに不慣れな人には、すぐに初見殺しって言われちゃうかもね」
　分からない程度にそっと瞳を伏せて、七海は応じた。
　初見殺しとは、初めてそのゲームをする際に往々にして手詰まりとなる仕掛けのことだ。強すぎるボス、難解だったりリアルラックが必要な仕掛けなど、下手をするとゲームプレイする気力自体を失わせたりもする。
「でも、大丈夫。ちゃんと初心者向けに、救済措置はあるから」
　説明代わりにコマンド操作をし、派遣可能な勇者一覧を表示させた。総勢十五名、ジョブも保有スキルもバラバラだ。
「最初は万能突っ込み戦士『ハージメ』を選んでおけばいいよ。専用スキル『反射ツッコミ』で、他のキャラが何か失敗してもなかったことにしてくれるから」
「……おい、七海」
　何かに気づいた様子の日向であるが、狛枝はにこにこしている。
「へー、頭にアンテナが付いてるなんて、面白いキャラだね。他の特徴は皆無だけど。その点こっちの『ナギット』ってキャラは、ふわふわ白髪にパーカー付きローブで分かりやすい」
「そうだね、でも『ハージメ』は便利なんだよ。特にその、ロシアンルーレット賢者『ナギット』とは相性抜群

。『ナギット』はラックの値が極端に高くて、時にはＭＰなしで強力な魔法が使えるけど、反動で自分も大ダメージを受けてすぐピンチに陥るの。でも『ハージメ』と組ませると、『ハージメ』の『避雷針アンテナ』が発動するんだよ」

ゲーム画面は「ゆうしゃはけんしせつ」のままだが、依頼を受けて勇者を派遣すると、画面下部に横長の別画面が現れる。「かけだしのそうげん」用の緑背景の中、手にした杖（つえ）を振り上げ魔法を唱（とな）えている「ナギット」の横で、「ハージメ」が赤点滅（てんめつ）状態で倒れている姿が描写されていた。平たく言えば死にかけているのだ。
「ほら、庇（かば）ってくれた」
「やったね、七海さん。クエストクリアだって!!」
「要するに俺と狛枝がモデルだよな、このキャラ!?」
　耐（た）えきれなくなった日向が盛大に突っ込みを入れると、狛枝が嬉（うれ）しそうな顔をした。
「日向クン、いや、ここはハージメと呼ぶべきかな？　さすが超高校級の突っ込み！」
「違う！　俺がまだ才能を思い出せてないからって、適当なことを言うな!!　この超高校級の無神経!!」
　四人で騒（さわ）いでいたところ、主（おも）に日向の大声を聞きつけて他の面々が集まってきた。夕食の時間が近づいてきたので、通り道である一階にみんな来ていたのだ。
「お、なんだ、七海、新しいゲームやってるのか？　え？　お前が作ったの？　マジ？」
「電脳遊戯王（でんのうゆうぎおう）が自（みずか）ら生み出した仮想世界か……フ、面白い」
　左右田和一（そうだかずいち）と田中眼蛇夢（たなかがんだむ）が興味深げに画面を覗き込んでくる。左右田はメカニックとして、田中は厨二（ちゅうに）設定好きとしてであるが、ゲームに興味がある点は共通しているようだ。
「オー、ジャパニーズゲームは最高のエンターテインメントと聞き及（およ）んでおります！　ヒゲの配管工（はいかんこう）が危ないキノコをキメて世界を救うなんて、ワクワクが止まりません!!」
　日本文化に興味を持つソニア・ネヴァーマインドも、瞳をきらきらさせている。色好（いろよ）い反応に左右田が食いついた。
「あ、ソニアさんもゲームがお好きなんですね！　ど、どのキャラが気になりますか？　オレ的にはマイルドヤンキー鍛冶職人（かじしょくにん）『イチカズ』とかが」
「まあ、混沌（こんとん）の猛獣（もうじゅう）使い『シャアムロ』……かっこいいですわ！　お供（とも）のハムハムちゃんズもベリーキュート!!」
「フ……さ、さすが闇（やみ）の聖母（せいぼ）、見る眼があると言ってやろう……ありがとう」
　無邪気（むじゃき）に喜ぶソニアから眼を逸（そ）らし、田中は顔にグルグルとストールを巻きつけている。悲愴（ひそう）な表情をしている左右田の肩を、日向と狛枝がそっと叩（たた）いた。
「ほう、七海が作ったゲームか。ふむ……あえて流行の真逆を行く。ベタではあるが、マーケットが成熟しきった感のある現在、それもひとつの手ではあるな」

「へー、ガチャガチャしてて可愛いグラっすねえ！　音ゲー要素はないんすかあ？」
「恋愛要素と脱衣要素はあるのかい？　特に脱衣要素はあるのかい？」
　十神白夜はプロデューサーのごとき発言をし、澪田唯吹と花村輝々は自分の得意分野に引きつけて質問した。先の三人より温度は低めながら、多少興味はある様子だ。
　この六人はそれぞれに好奇心を刺激されたようだが、中には最初から専門外として遠巻きにしているだけの者もいる。
「千秋ちゃん、ゲームを作ることもできるんだ！　すごいね。アタシもカメラのメンテぐらいならできるけど……」
「わたしはねえ、アリさんをプチプチするゲームが好きかな！　あーでもぉ、このキャラとかこのキャラとか、プチプチしがいがありそう……なんてね!!」
「うう、西園寺さん、どうして私を凝視するんですかぁ……？」
　小泉真昼、西園寺日寄子、罪木蜜柑はあまりゲーム自体に馴染まないようだ。少しだけ画面を覗き込んだものの、すぐに二階に上がっていってしまった。
「七海が作ったゲームぅ？　フム、ちと興味はあるが、ワシは遠慮しておこう。視力が落ちてはいかんからな。ゲームは一日一時間じゃあ!!」
「オレもそんなちっちゃい画面、ずーっと見てると飽きちまうぜ。それより、メシメシ!!」
　体が資本の弐大猫丸と食欲の権化である終里赤音も、同じくレストランへと消えていく。
「……すまないな。私もゲームというものは、よく分からない。だが、ドット絵というのか？　このキャラはなかなか可愛い……いや、なんでもない」
　辺古山ペコはそもそもゲームに対する知識が薄いようだ。デフォルメキャラの見た目に後ろ髪引かれる様子ではあったが、同じく二階へ上がっていく。
「ゲーム？　はっ、下らねえ！　てめえの命がかかってる状況で、よくそんなことができるモンだな」
　ゲーム以前に群れることを嫌う九頭龍冬彦も、細い肩をそびやかして去っていってしまった。
「みんなの反応は、それぞれでちゅねえ」
「そうだね」
　早くもくっきりと分かれた反応を心に留めながら、七海はまだ残っている面々のために次なる依頼を受ける。今度は「巨大テンプラを食べ尽くせ！」に挑戦だ。
「どうかな？　モノミちゃん」
「そうでちゅね、この内容なら、天才変態料理人『ハナムラー』とどすこい御曹司『ビャクテイ』が向いてい

ると思いまちゅ」
　的確なアドバイスである。うなずいた七海は、まずその二キャラを選択した。
「で、サポートに『ハージメ』を付けるね」
「『ハージメ』は大丈夫か？　さっき受けた傷は回復したか？」
　日向が不安そうに見守る中、画面下部に食堂の背景が浮かんだ。拡大されて一際ドットが目立つ巨大テンプラの上を、選ばれた三体のキャラがちょこまかと動き回る。
　途中突然襲いかかってきた網杓子に「ハナムラー」がすくい上げられそうになる、という展開もあったが、「ビャクテイ」の「権力ツッパリ」により事なきを得た。
「ヒュー、さっすが『ビャクテイ』ちゃん、クールっすねー!!　しびあこ!!」
「全くだね、男でも惚れてしまうよ。いや、男だからこそ……かな？　ンフフ!!」
　澪田と花村がきゃっきゃと盛り上がり、十神は「必要な場面で必要な力を出しただけのことだろう」と冷静に評価し、狛枝は「アハハ、『権力ツッパリ』で『ハナムラー』は弾き出されたけど、代わりに『ハージメ』がテンプラ油の中に落ちちゃったよ！」と笑って日向に頭を叩かれた。
　続いて「さらわれたハムハムちゃんズ」クエスト。今回もモノミのアドバイスに従い、混沌の猛獣使い「シャアムロ」とぶっ飛び王女「ネヴァー」をチョイス。
「『イチカズ』も使ってやってくれよ！」
　左右田のわがままによりマイルドヤンキー鍛冶職人「イチカズ」、そしてサポートに「ハージメ」もチョイス。最初にハムハムちゃんズをさらった魔物を討伐、その後魔物が発した瘴気の影響で魔物化したハムハムちゃんズを討伐するという二段階のクエストだ。
　変わり果てたハムハムちゃんズを抱き締め、静かに涙を流す「シャアムロ」。その彼を抱き締め、「ネヴァー」もまた涙を零す。二人の涙が入り交じり、ハムハムちゃんズの上に落ちた時、ハムハムちゃんズは見事生き返り依頼達成となった。
「よかったですわ……」
　ドット絵と文章のみの簡素な表現がかえって胸に迫るのか、ソニアは瞳を潤ませている。
「……よかった、本当に……」
　仰々しい表現も忘れるほど感動しているらしく、田中の眼も潤んでいる。
「『イチカズ』も活躍しましたよソニアさん！　こう……応援とか!!」
「『ハージメ』だって活躍しただろ!?　『シャアムロ』の必殺技が出るまでの間、攻撃を受けてやってたんだぞ!?　おかげでまたHPがギリギリだ!!」

左右田と日向が口々にアピールするが、感動の煙幕（えんまく）に阻（はば）まれて二人にはあまり届いていない様子だ。
「んー……じゃあ、次は」
　新たなクエストに手を出そうとした七海を、日向が止めた。
「七海、ゲームは程々にして、とりあえずメシにしようぜ」
「うん、そうだね」
　促（うなが）されるまま、いったんセーブしてゲーム機の電源を落とす。一行はゾロゾロとレストランへと上がっていった。

　夕食を終えた後、七海は一階のロビーに戻って再びゲーム機の電源を入れた。隣にモノミがちょこんと座り、食前とほぼ同じ場面が再現される。
「お前、まだそのゲームをやるのか？」
　コテージに戻りかけていた日向が、呆（あき）れたように声をかけてきた。
「うん。できれば何周もして、しっかりデバッグしたいんだ。誰もロストさせないで、クリアできるように……」
　わずかに声の調子を落として言えば、今度は狛枝が元気づけるように笑う。
「さすが超高校級のゲーマーだね！　さっきは意見を出し忘れてしまったし、ボクらも付き合おうよ、ね、日向クン？」
　最初から興味を示さなかった面々はもちろん、ある程度興味を示していた者たちも、気づけば各人のコテージへと向かっている。時間が遅いためもあるが、クエストを受けて勇者を派遣したら後はほったらかし、という単調なゲーム内容に飽（あ）きてしまったのだろう。残っているのはこの四人だけだ。
「狛枝くん、たまにはいいこと言いまちゅね！　日向くんも、ぜひお願いしまちゅ」
「日向くん、いい？　できればお願いしたいな」
　狛枝はとにかく、モノミと七海が揃（そろ）って頼むと効果があったようだ。
「……そうだな。俺も『ハージメ』の扱いには、言いたいこともあるし」
　ぼそっとつぶやいた日向に狛枝が「そうこなくっちゃ」と笑い、並んで再び画面を覗き込む。二人の視線を感じながら、七海は画面上の「ナナミン」を見つめた。
「じゃあ今度は、『海と水着の平和を守れ！』に挑戦するよ。モノミちゃん、今度はどうしようか」
「女の子のキャラなら誰でもいいと思いまちゅ」
「分かった。じゃあ、『ネヴァー』はさっき派遣したから……ひとりでも楽隊（がくたい）『イブキッス』、ドエス舞姫（まいひめ）『ピヨ

コ』、世話焼き画家『マヒルマ』、エロドジナース『ミカ』で行くね」
「で、サポートには『ハージメ』で決まりだね！」
「おい、たまには『ハージメ』を休ませてやれよ！」
　狛枝に言われるまでもなく、「ハージメ」もチョイス。画面下部には海の光景が広がり、イカやタコの形をした魔物が表示される。
「……なあ、七海。もしかして、この展開……」
「うん、海と水着と言えば、水着がポロリシーンはお約束だよね」
　七海は冷静だが、赤くなったモノミがいきなり画面を隠すように抱きついた。
「み、見てはいけまちぇん!!　こういうのは、せめて大学生になってから……ああっ!?」
「そんなことを言われても、見ないとバグ取りに貢献できないじゃないか」
　問答無用でモノミを抱き上げた狛枝が、ぬいぐるみの耳元にフッと息を吹きかける。その指先が、つつっとモノミのモコモコした体を撫でた。
「それともモノミ、キミが代わりにポロリシーンを見せてくれる……？　例えばこの手、とか」
「いけまちぇん、グロシーンも高校生には早いでちゅ!!」
　ジタバタ暴れるモノミの奮闘をよそに、七海はさっさとイベントテキストを送っていく。
「七海、その、これ、見てもいいのか？」
　ソワソワしつつも正直なもので、日向の眼は画面から離れない。
「大丈夫だよ、そこまで刺激的な内容じゃないから」
　程なくイカとタコもどきによる触手の襲撃を受け、お約束のイベントが幕を開けた。
「……確かに、グラフィックをいっさい変えないで『キャー！　水着を返して!!』って言われても、何も感じないな」
　想像以上に刺激が足りなかったようだ。健康な男子高校生らしい発言に、狛枝もうなずいた。
「そうだねえ。ま、そこは想像で補うしかないよ。あ、ほら、水着ポロリを『ハージメ』のせいにされて、仲間にボコられるイベント発生!!　でも文字だけだから、何も感じないね!!」
「お前はそうだろうな!!」
　落胆を上乗せした怒りを吐き出した日向は、眉根を寄せて七海を見た。
「なあ、七海。その……お前が俺を、どういう風に見てるかは分かったけどさ。だからこそ、せめてゲームの中でぐらい、もうちょっとかっこよくしてくれよ」
「確かに、かっこよくはないかもしれないね」
　常にサポート役として出ずっぱりの「ハージメ」だが、実際の主人公は「ナナミン」だし、正直扱いがい

いとは七海も思っていない。

「けど、日向くんがこういうキャラだから、このゲームは進んでいるんだと……思うよ」

　カウンターの内側にこもったきりで、冒険に出ない「ナナミン」だけでは話が進まない。十五名の勇者、特に「ハージメ」がいるからこそ、物語が動くのだ。

「ハハ、はっきり日向クンって言われちゃったね」

　ムードぶち壊しの茶々を入れてきた狛枝に「うるさい」と言い返しながらも、日向は満更でもなさそうだ。視線を逸らして、

「そっか。なら、まあ、仕方がないよな。誰かが貧乏くじを引かないと、どうしようもない場面もあるし」

「そうだよ日向クン。あ、ごめん、また『ナギット』が粗相をしたみたいだね」

　照れた日向が眼を離している間に、七海は新しいクエストを受けており、早速「ハージメ」が赤点滅している。

「やばいかも」

　表情を変えないまま、七海が珍しい焦りを口にした。日向もぎょっとした顔になる。

「おい、このゲーム、ロストしたら復活できないんだよな!?」

「まあまあ、日向クン、これはゲームだよ？　それにほら、『ナギット』は復活魔法を使えるみたいだから、安心して!!」

「狛枝くん、その魔法を使うと、今度は『ナギット』がロストするんでちゅよ……？　そしていいかげん、放してくだちゃあい……」

「分かった」

「ぶえっ!?　床に叩きつけてほしいとは言ってまちぇん!!」

　わいわい騒いでいる間に、幸い間一髪のところで「ナギット」が復活魔法ならぬ回復魔法を使用し、どうにか「ハージメ」ロストの危機は去った。我がことのようにハラハラしていた日向は、ほーっと息を吐いて肩を落とす。

「心臓に悪い……そろそろ十時だし、俺はもうコテージに戻るぞ。お前らも早く戻れよ？」

「うん、そうするね」

　素直にうなずいた七海は、立ち上がりながらふと日向に問いかける。

「そうだ、日向くん、日向くんの扱い以外で、このゲームに気になるところはない？」

「もうモデルを隠す気もないんだな」

　じと目で七海を見た日向は、しばらく考えてから指摘した。

「そもそもコレ、タイトルに偽りありじゃないか？　主人公は勇者を派遣しているだけで、冒険には出ないじゃないか」
「……そうだね。タイトルに偽りありだといいね」
　ほのかに笑った七海は、床でベソベソと泣いているモノミを抱き上げ、そっと抱き締めた。

　それからしばらく、七海はモノミと一緒に「はけんゆうしゃ　ナナミンの　たいだな　ぼうけん」のやり込み作業を続けた。
　日向や狛枝は何度か声をかけてきて、あれこれと意見を述べてくれた。だが二人とも、さすがに七海ほどの熱心さは維持できない。特に日向は「ナギット」その他の流れ弾を喰らい、「ハージメ」が死にかける様を見るのがつらくなってきたらしく、次第にゲーム中は話しかけてこなくなった。
　ポツンと孤立した状態になった七海は、それでもベストエンドを目指すためにゲームをやめない。モノミとあれこれ話し合いながら、慎重にクエストをこなしていく。
「はみ出せ青春！」クエストにはミニマム極道「クズヒコ」と三つ編み剣士「ペペコ」を向かわせ、見事クリア。「君と河原で一晩中」クエストは重量級トレーナー「ニャンマル」とワイルド格闘家「マッカネ」に頼んだ。もちろん「ハージメ」には、常にサポート役を任せている。
　だが時が流れるにつれ、クエストの難易度は格段に上がっていった。経験値を溜めてレベルを上げ、金を稼いで装備を整えることで対抗するが、クエストの数にも限りはある。やがて勇者たちは一人倒れ、二人倒れ、そして……
「……あーあ。やっぱり、こうなっちゃったか」
「千秋ちゃん……」
　静かに肩を落とす七海を、モノミはふかふかした手でそっと抱き締めた。

　相も変わらずホテル一階のソファに腰掛け、携帯ゲームの画面を見つめている七海とモノミの側を日向が通りがかった。ここ最近は邪魔しないよう、声もかけずに通過することが多かったが、本日は耳慣れないBGMに気づいて足を止める。
「七海、今度は新しいゲームを始めたのか？」
「あ、日向くん。ううん、ずっと同じものだよ」
「そうか？　でも、その曲は聞いたことがないぞ」

あえてのクラシックスタイルが売りの「はけんゆうしゃ（略）」は、流れるＢＧＭもさほど多くはない。「ゆうしゃはけんしせつ」でいつも流れているのは、メインテーマとも言えるポップな曲調のもの。後はクエストで派遣した先で曲が変わり、バトルになればアップテンポなロック調の曲が緊張感を高める。

だが今、七海の手元から流れてくる曲はどこかもの悲しい、荘厳（そうごん）な曲だ。まるでレクイエムのような。

「画面も違うぞ。キャラは『ナナミン』と『ウサミン』だけど、ここは『ゆうしゃはけんしせつ』じゃないよな？」

「でも、タイトルは同じだね」

横からひょこっと顔を出したのは狛枝である。

「そうだよ。タイトルに偽りなく、『ナナミン』と『ウサミン』がカウンターを出て冒険を始めたんだ」

これまでは派遣先を下の画面に映し出すスタイルだったが、現在は『ナナミン』と『ウサミン』が実際に派遣先を歩き回っている。

「なんだ、ようやく『ハージメ』は休ませてもらってるのか？　だけどお前ら二人だけだと、バランスが悪いだろ。重量級トレーナー『ニャンマル』とかを入れて」

「……ううん。それはできないんだ」

乾（かわ）いた声に、何かを感じ取ったのだろう。日向が表情を改める。

「……ごめん。もしかして、『ニャンマル』はもう……」

「……」

「あっ、でも、戦士系なら『マッカネ』も『クズヒコ』も『ペペコ』もいるよな？」

七海を力づけようと、立て続けに勇者キャラ名を挙げる日向へ、モノミが軽く首を横に振った。

「他には誰もいないんでちゅ」

「え？　まさか……」

驚いた顔になった狛枝が指を伸ばし、七海に変わってゲーム機の操作をした。

コマンド画面に表示された勇者派遣リスト。そこに、派遣可能な勇者はもういない。

「このゲーム、後半に入ると、難易度がさらに上がるんだよ」

乾いた声でポツポツと、七海は説明を始めた。

「ギリギリまでがんばったんだけど、『絶望四天王（ぜつぼうしてんのう）』……あ、途中で死んじゃった勇者キャラの中から四人がランダムに選ばれるんだ。その四人との戦いで、生き残っていたみんなもロストしちゃったんだよね。だから、『ナナミン』と『ウサミン』が二人だけで魔王『シロクロクマ』を倒すしかないんだよ」

そのために画面構成が変わり、ＢＧＭも変わったのだ。日向が指摘したように術者系二人によるパーティーのバランスは悪いが、他にいないのだから仕方がない。プログラムを組んだ時点で、遅かれ早かれこうなる気はしていたのだ。

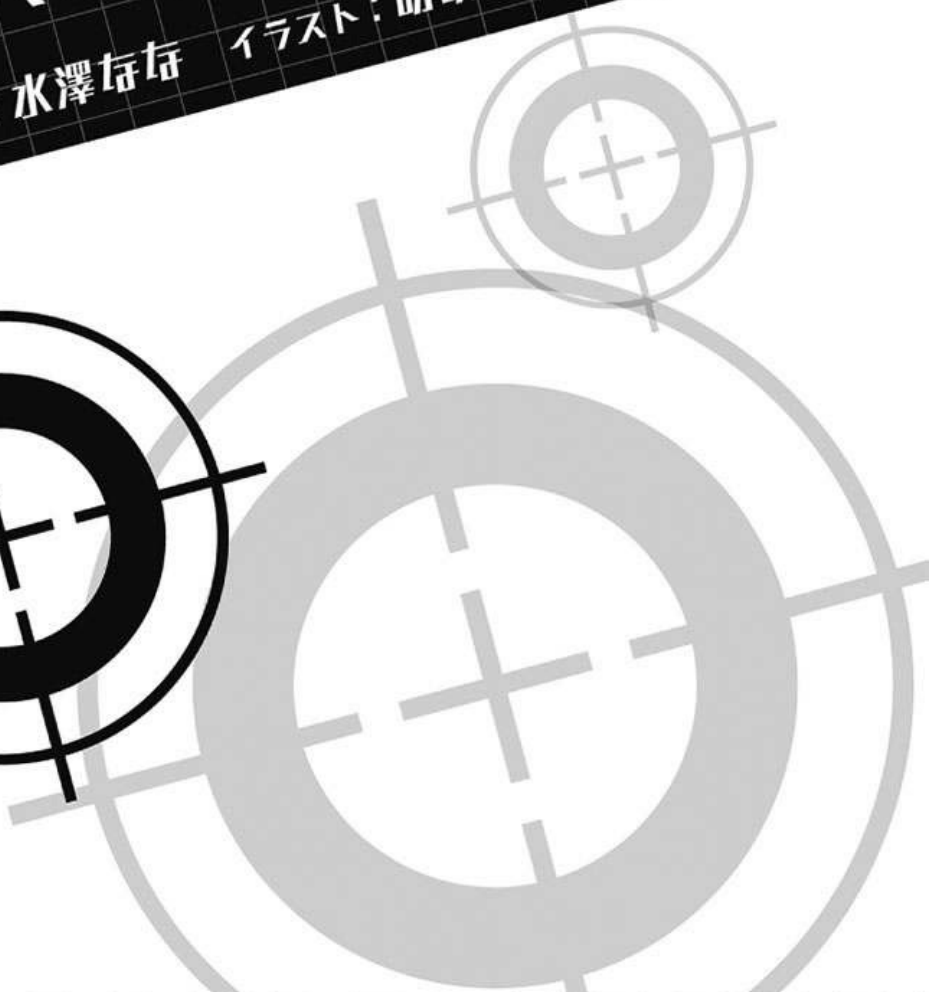
「……ごめんな、七海」
　うなだれる日向に、七海はいつものようにほんのり笑ってみせた。
「気にしないで、日向くん。大丈夫だよ、だってこれはゲームだよ？　これから何度だって、やり直せるんだから」
「そ、そうだよな。第一お前が作ったゲームなんだ。キャラの強さを変えたり、ストーリーを変えたり、好きにできるもんな」
　笑顔を見られてホッとしたのか、日向も笑って相槌を打った。ところが今度は、狛枝が表情を改める。
「それは違うよ、日向クン」
「え？」
「……うん、そうだね。狛枝くんの言うとおり……かな」
　七海も困ったように微笑んだ。日向が気遣ってくれているのは分かるが、それとこれとは別の話だ。
「創作物は、時に創造主の想像を超えることもあると……思うよ。一度動き出したゲームの結末は、ゲームマスターにも簡単には変えられないんだよ……」
　確かに七海は「はけんゆうしゃ　ナナミンの　たいだな　ぼうけん」というゲームを作った。タイトルを決め、キャラクターを決め、ドット絵を用意し、ＢＧＭを定め、各クエストとイベントを配置して全体の流れを決定した。この世界の創造主であることは間違いない。
　だが現実世界がそうであるように、一度生み出された世界は創造主自身の思惑どおりには動かない。それが気に食わないからといって、日向の言うように調整をかけ、無理やり流れを変えたところで、生まれるのは違和感だけだろう。
「……そっか」
　肩を落とす日向に、七海は頭を下げた。
「気を悪くさせちゃったら、ごめんね」
「いや、ゲームはお前の専門分野だからな。よく分かってないのに、適当なことを言って悪かった」
　気にしていないと告げた日向はひどくさっぱりしていた。その表情に押され、言うはずではなかった言葉が喉から転がり落ちる。
「――そうでもないよ、もしかしたら日向くんのほうが、正しいかも」
「え？」
「実はね、何回も何回もやり直してるんだ、このゲーム。だけど……いつも、こうなっちゃう」
　いろいろな方法を試してみた。「ハージメ」を毎回サポート役として付ける、というのもある程度周回した後に生み出した戦法だ。おかげでかなり安定してゲームを進められるようにはなったが、「絶望四天

王」戦になるとどうしても犠牲者が出始めてしまう。
「キャラの能力やストーリーはこのままで、どうにかできないかと思ったんだけど、だめみたい。日向くんの言うとおり、もっと根本的なところを変えないといけないのかな」
　ステータスをちょこちょこいじったり、クエストの順番を組み替えてもみたが、抜本的な改善には至らなかった。やはり自分はゲーマーに過ぎず、ゲームを、世界を、創造する才能はなかったのだろうか。
「このキャラたちとじゃ、全員揃ってハッピーエンドを迎えるのは無理なのかもね……」
「七海さん……」
「千秋ちゃん……」
　狛枝とモノミの呼びかけが揃った。気遣わしげな二人に対し、七海はかえっていたたまれない気持ちになる。
　だが日向は突然咳払いして、声の調子を整えた。
「なあ、──『ナナミン』」
　真面目な口調で呼ばれ、どきりとして顔を上げれば、軽くあごを上げた日向と視線が絡む。
「大丈夫だ。実は、俺……『ハージメ』はさ、実に便利なチート性能を隠していたんだ」
「えっ？」
　眼をぱちくりさせる七海を前にして、日向は汗ばんだ手の平をズボンの脇に擦りつけながら続けた。
「ロ、ロストしたとばかり思われていたが、実際は生きてたんだよ！　この俺の力で死んだ仲間たちも生き返らせ、魔王との戦いでピンチに陥った『ナナミン』たちを助けに行ってやる!!　これでどうだ!!」
　少し顔が赤く、口調もいつもより早口だ。ふんっと鼻息も荒く胸を張っているが、頭のアンテナはピーンと立って内心の緊張を伝えている。
　何も言えないでいる七海の横で、狛枝が腹を押さえて笑い転げ始めた。
「うわあ、ベッタベタ中のベッタベタ!!　さすが日向クン、恥ずかしい!!」

「うるさいぞ狛枝!!」
　ますます顔を赤くした日向に肩を竦めた狛枝は、にこっと笑って提案した。
「じゃあさ、窮地に陥った『ナギット』が最後の力を振り絞って復活魔法を使用、生き返った『ハージメ』がチート能力に目覚めて……っていう流れはどうかな？」
「てめえ、ちゃっかりおいしいところを持っていこうとしやがって……しかもそれ、『ナギット』だけ復活できないパターンじゃないよな？　もちろんお前も後から『ハージメ』に復活させてもらって、俺に涙ながらに感謝するパターンだよな!?」
　死に逃げは許さない、と日向が迫れば、狛枝は肩を竦めた。
「俺に感謝？　やれやれ、日向クンてば、完全にこのゲームと現実を混同しちゃってるね」
「うるさいぞ、話を逸らすな狛枝！　死んだはずの仲間が蘇り、全員で立ち向かうパターンは海辺で水着がポロリ以上の鉄板ネタだろ!?　ここは外すべきじゃない!!」
「それは違うよ。死にネタの需要をナメちゃいけない」
　ひとりの犠牲の上に成り立つハッピーエンドはおいしいよ、と狛枝がうっとりした声で反論する。
「ふ、二人ともケンカはやめてくだちゃい！」
　慌てたモノミが止めに入ったが、日向と狛枝の言い合いは白熱する一方。どちらがよりドラマチックに魔王を倒すか、議論は一向にまとまらない。
「千秋ちゃん、どうちまちょ……千秋ちゃん？」
　珍しく満面の笑みを浮かべた七海を見上げて、モノミが首を傾げた。
「ううん、なんでもない。ただ、やっぱり『ハージメ』はすごいなって」
　本当は七海は、もうこのゲームはやめようと思っていたのだ。
　仮にも超高校級のゲーマーである自分が作ったものである。どんなに悲惨な状況からでも、全くの手詰まりになることはない。「ナナミン」と「ウサミン」だけになっても、魔王の討伐は可能なのだ。
　一回そのままエンディングも見てみたが、物寂しい気持ちになっただけだった。多くの仲間の犠牲の上に勝利を掴んだ「ナナミン」と「ウサミン」は、新たな周回に希望を託し、再度世界をリブートさせるという終わり方になっているからだ。
　だが日向が言ったとおり、これはゲームだ。現実世界のシミュレーションなのだ。現実を模した仮想世界、だからこそ。
「そうだよね。ゲームの中でぐらい、希望が必要だし……」
　どんなに陳腐だ、ありきたりだ、デウス・エクス・マキナだと罵られてもだ。つらく苦しい物語の果てに、光

を見たいと思うのは当然の心理だろう。
「それにゲームの世界だって、現実の一部だと……思うよ！」
　ならば仮想世界で生み出された希望が、絶望を覆す可能性もあるはずだ。
「七海、俺もそれに賛成だ！」
　狛枝との議論に熱中しているようで、ちゃんとこちらの声も聞いてくれていたらしい。熱く同意してくれた日向に、七海は満面の笑顔のままうなずいてみせた。

END

スーパーダンガンロンパ2
さよなら絶望学園
SUPER DANGANRONPA 2
モノクマ&モノミの、日常生活
小説：水澤なな　イラスト：明咲トウル

キーンコーン……カーンコーンと、軽やかなチャイムが島中に鳴り響(ひび)く。

最後の一音を聞き終えるなり、モノクマは籐(とう)のイスにふんぞり返ってカメラ目線でポーズを取った。そのアシンメトリーなモノトーンの顔には、キュートさと凶悪(きょうあく)さの入り交(ま)じった人の不安を煽(あお)るような笑みを浮かべている。

「――えーと、希望ヶ峰学園(きぼうがみねがくえん)修学旅行実行委員会がお知らせします。オマエラ、グッモーニンッ！　本日も絶好の南国日和(びより)ですよーっ！　さぁて、今日も全開気分で張り切っていきましょう～！」

そう言い放ち、手にしているハワイアンなカクテルグラスを傾(かたむ)ける。

そこまで確認したモノミが、プチリとビデオカメラのスイッチを切って額(ひたい)の汗を拭(ぬぐ)った。

「……ふう～」

その顔には、ひと仕事終えたあとの満足感のようなものが浮かんでいる。

しかし。その満足感は一瞬(いっしゅん)でかき消されてしまった。モノクマの怒号(どごう)によって。

「早い！　早すぎる！　必要以上に早いよ！　今の場合は、あと一・五秒、このボクの満面の笑みを映してから切るのが正解でしょ！　なのに、どうしてあのタイミングで切るかな？　ありえないでしょ、人として！」

矢継ぎ早に畳(たた)みかけられ、モノミの額に脂汗(あぶらあせ)が浮かぶ。

「え？　え？　え？　人として？？？　……確かにあちしは魔法少女だけど、かわいいウサギのマスコットでちゅよ？」

「ボクに口答えするなんて、一兆八億二千万年くらい早いね」

「その、壮大(そうだい)かつ半端な数字はどこからきたんでちゅか？」

「いちいちうるさいなぁ。このボクにツッコむなら、せめて日向(ひなた)クンくらいの鋭(するど)さでお願いしたいものだね。まったく、センスの欠片(かけら)もなくてイヤになるよ！　カメラのオンオフすらマトモにできないなんて、これならいつものセルフ撮影の方がずっとマシだよ。ここはひとつ、死んで詫(わ)びてほしいね！　介錯人(かいしゃくにん)なしの十字(じゅうじ)割腹(かっぷく)でね！」

「えええ！　そ、そこまで言われるほどのことでちゅか？」

「もちろん、言われるほどのことだよ。まったく、せっかくこのボクの日課を手伝わせてやろうと思ったのに、こんな簡単なことすらできないなんてね」

「手伝いなんてしたくなかったのに、アンタが勝手にあちしを拉致って手伝わせたんじゃないでちゅか！　このオニ！　アクマ！　クマでなしー！」
「うるさいなー。まったく、TBBのクセに、いちいち口答えしすぎなんだよ」
「……てぃーびーびーってなんでちゅか？」
「そんなの『使えない不細工バカ』に決まってるだろ」
「えええええ〜！」
　モノミは床にガックリと膝をつき、ヨヨヨと泣き崩れる。
「ひっ、ひどいでちゅ。さして好意を抱いてるワケでもない相手だけど、放送は学園のためだと思って仕方なく手伝ってあげたのに……あちし、すっごく傷つきまちた！」
「ふーん。ボクは虫酸が走るほど嫌いな物体から何を言われても気にならないけどねぇ」
「えええええ！　あちしがオブラートに包んで『嫌い』って単語を使わなかったのに、そこまで言うんでちゅか!?　アンタにクマとしての心はないんでちゅかー！」
「あるよ。でもボクはピュアでイノセントな魂の持ち主だから、嘘がつけないんだよねぇ」
「嘘だ！　この嘘つき〜！」
「……あ、確かに、優しい嘘ならつくかなぁ。ま、それもゾウリムシよりは上と認めた相手にだけだけどね」
「あちしは単細胞生物の繊毛虫以下ってことでちゅかー！　うぇ〜、うぇっうぇっ！」
　ダバーッと流れ落ちた涙がモノミの周りに水たまりをつくり、その湿気でモノミの身体にキノコが繁殖する。
「うわぁ……なんてウエッティなウザいヤツなんだ。ベニテングタケとドクツルタケじゃないか……こんなものをこんなに生やして……まったく、仕方ないヤツだなぁ」
　モノクマが近づいてきて、モノミの前でスッと膝を折った。まるで王女にかしずく騎士のように。
　スッと伸ばされたモノクマの手が、モノミの身体に生えたキノコを優しく手折る。
「……え、モノクマ……？」
　モノミは一瞬驚いたようにモノクマを見上げ、その名前を呼んだ。
　その口に、勢いよくベニテングタケが押しこまれる。
「むがががが〜っ！　なにひゅるんでふかー！　毒でふ！　これ、毒キノコでふ〜！」
「ホラ、ドンドン食べろってば！　自分で生やしたキノコだろう？　我が子も同然じゃないか。ホ〜ラ、ホラホラ！」

モノクマは嫌がるモノミの口をこじ開け、新たに引っこ抜いたキノコを次々とねじ込む。
「んぐぎゃ〜〜〜！　ひゃめてくらひゃーい！　ひぬぅ〜！　ひんぢゃうぅううう〜！」
　涙目で抗議するモノミを馬乗りで押さえつけ、モノクマはゲラゲラと笑った。
「あっはっは！　ウケる！　ミサクラ語みたいになってやんの！」
「ひゃめて〜！　ひゃめてくだひゃ〜い！」
　モノミは、なんとかモノクマの手を逃れて、口の中の毒キノコを吐き出した。
「……げほっげほげほっ！　ひっ、ひどいでちゅ！　殺す気でちゅか〜！」
「人聞きが悪いなー！　この島ではゴミのポイ捨ては厳禁だから、それを回避させてやっただけだよ。……あ、でもこんなDVシーンが入ってると、この本、発刊できなくなっちゃうかなぁ？」
「え？　発刊って、なんのことでちゅか？」
「別になんでもないよ。……さ、DNMBでストレス発散したことだし、今日も学園長のお仕事をがんばっちゃおうかなー」
　モノクマはそう言いながら、イスにどっかりと腰を下ろした。
「……DNMBってなんでちゅか？」
　モノクマは、路傍の石を一瞥するような視線をモノミに寄越して言い放つ。
「決まってるだろう？　『ドジでノロマなドM豚野郎』だよ」
「……っっっ!?　殺されかけたあげくに、その言われようでちゅか!?　無情にもほどがあるでちゅ！　レ・ミゼラブルでちゅ！」
「そこは単数形だから、ル・ミゼラブルだよ。まったく……こんな初歩的なことまで説明しなきゃいけないなんて、あーヤダヤダ。これだからDNMBDABJSは」
「……DNMBDABJSがなんの略なのかは、あえて聞かないでおきまちゅ。これ以上、一生癒えないトラウマを増やしたくないので」
「あーはいはい、わかったよ。もうイジりあきたしどうでもいいよ。それにアイツラが動きだしたから、学園長としてしっかり見張らないといけないしね」
　モノクマはそう言って、ズラリと上下左右に並ぶいくつものモニターを見やった。
　それらには、島中に仕掛けられた監視カメラの映像が流れている。
　その中のひとつはレストランのもので、そこには多くの生徒たちが集まっていた。
「うぷぷぷぷ……。レストランで揃って情報交換かぁ。ベタな行動だねぇ」
「基本に忠実でいいじゃないでちゅか！　みんな真剣なんでちゅよ！」

「だってさー、仲良くなんかしたって無駄（むだ）なのにねぇ。この先のことを考えると、この一致団結モドキの風景が滑稽（こっけい）で仕方ないよ。どうしよっかなー。見返して笑う用にダイジェスト版でも作っておこうかなー。うぷっ！　うぷぷぷぷぷぷっ！」

　モノミは眼を吊（つ）り上げて、モノクマに背を向ける。

「アンタって本当に最低でちゅね！　あちしは絶対に、アンタの魔の手からみんなを守ってみせるでちゅ！」

　そう言って部屋を出て行こうとすると、勢いよく耳を引っ張って呼び戻される。

　それも、古いマンガに出てくるような巨大な釣（つ）り針（ばり）で。

「痛い！　いたたたたたたたたた……！　もげる！　あちしのチャームポイントがもげるぅうううう！　放してくだちゃ〜い!!」

　モノミは短い手を伸ばしてなんとか巨大釣り針を取り外し、そっと耳をさすった。

「この乱暴者〜っ！　こんなのパワハラでちゅ！　訴（うった）えてやるでちゅ！」

「なんで勝手にフケようとするかな？　今日のボクはいつも以上に忙（いそが）しいから、手伝うように言ったよね？　ほんの数分前のことまで忘れたわけ？　この、DNMBDABJSFFKBCXが！」

「なんか増えてる！　意味は聞きたくない！　聞きたくないでちゅー！」

「ボクの言うことを聞かないと、どこまででも増えるよ。アルファベットで足りなくなったら、ひらがな五十音もサンスクリット語も使うよ」

「ひぃ！　サンスクリット語まで!?　わ、わかったでちゅ。手伝えばいいんでちゅよね？　手伝えば！　……で、何をすればいいんでちゅか？」

「ちょっと日焼けマシーンに当たってくるから、モニターの見張りをしてて」

「……………………え？　日焼けマシーン？？　なんで？？？」

　モノクマはスッと立ち上がり、身体をひねってパリコレモデルのようなポーズで黒い半身を見せる。

「この美しいモノトーンを保（たも）つためには当然だろ」

「………………え。じゃあ白い方は……？」

　モノクマはクルリとターンをして、今度は白い方を見せる。

「もちろん、美白命に決まってるだろ。見よ、このシミシワひとつない、きめ細やかな柔肌（やわはだ）を！」

「肌って……それ、毛じゃないでちゅか」

　そう呟（つぶや）くモノミの顎（あご）に、大振りなアッパーストレートが繰（く）り出される。

「うるさ——い！」

「きゃあああああ～～～！　それは反則技でちゅ――――――――――――――――っ！」

　モノミは尾を引く声を上げ、部屋の壁（かべ）に激突した。

「ひどいでちゅ！　痛いじゃないでちゅか！」

「痛くしてるんだから当たり前だろ。まったく、このボクの手入れの行き届いたモノトーン肌にケチなんかつけるからそういう目に遭（あ）うんだよ。自業自得（じごうじとく）だね」

「毛だから毛だって言っただけなのに……うっうっうっ……」

　モノミはヨロヨロと立ち上がって、涙を拭う。

「そういうわけで、これから日焼けマシーンと美白マシーンにハーフで当たってくるから、あとを頼むよ」

　モノクマはモノミの返事を待たずに、そう言い置いて出て行ってしまった。

「うう……グスン……なんであちしがこんな目に……」

　モノミは半ベソをかきながらも毒キノコを拾い、涙だまりを拭（ふ）き、モノクマが飲み散らかしたままのグラスなどを片付けた。

　その上でモニターの前に座り、律儀（りちぎ）に監視をはじめる。

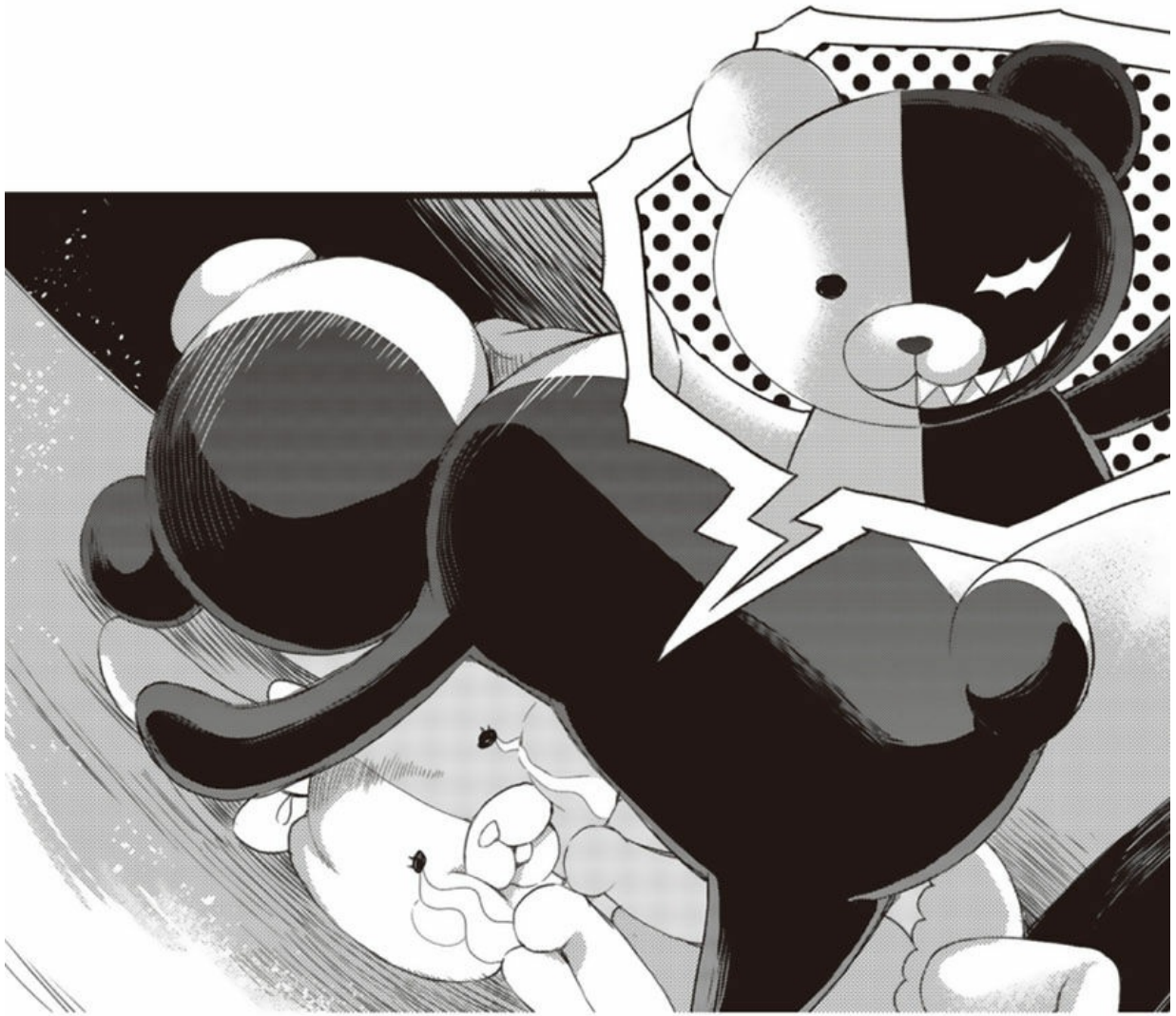
　いくつもの画面の中では、生徒たちがそれぞれ会話をしたり動きまわったりしていた。

「えーとみんなは何をしてるんでちゅかね～。……弐大（にだい）くんと終里（おわり）さんは腕相撲（うでずもう）……？　日向くんは狛枝（こまえだ）くんと一緒でちゅか。そういえば、最初から一緒にいたみたいでちゅしね。あ。レストランでは、西園寺（さいおんじ）さんが罪木（つみき）さんにモノクマ張りの暴言を……あああ！　同情を禁じ得ないでちゅ。あちし、罪木さんには何かシンパシーのようなものを感じてしまうでちゅ。……ええと、澪田（みおだ）さんとソニアさんと小泉（こいずみ）さんと七海（ななみ）さんは四人で牧場を散策で、その後ろを左右田（そうだ）くんがついていってるみたいでちゅね。……なんだかストーカーみたいでちゅ。注意した方がいいかもしれないでちゅね」

　モノミは一人でコクコクと頷（うなず）いてから、残りのメンバーを目で探す。

「えーと、あとは……十神（とがみ）くんはジャバウォック公園をロンリーに散策中で、田中（たなか）くんと花村（はなむら）くんもロケットパンチマーケットでちゅか。……ん？　なんだか不思議（ふしぎ）な組み合わせでちゅね。ま、いっか。……あ、プールサイドで最後の二人……九頭龍（くずりゅう）くんと辺古山（ぺこやま）さんも発見！　この二人は……なんだ、すれ違っただけみたいでちゅね」

　そんな感じで、モノミは懸命（けんめい）に生徒たちの行動を見守り続けた。

あっという間に時間が経ち、モニター画面の中が夕陽に染まりはじめる。
「もうこんな時間でちゅか……ずっと座ってたから、全身が強ばってしまいまちた。少し運動でもしまちゅか。とう！」
　モノミはピョコンとイスを飛び下りるなり、ストレッチをはじめた。
「いっちに、さんし！　にーにっ、さんし！　いっちに……」
　ラジオ体操のように手足を前後左右に揺すっては屈伸する。
「にーにっ、さんし……っと！　ふうう。いい汗かいたでちゅ」
　モノミは大きく息をつき、イスに深く腰掛け直した──つもりだった──が。
「え？　え？　えええっ!?」
　あるはずの背もたれが無くなっていたため、背後にころんと転げ落ちる。
「いたたたー！　……あちし、なんで落ちたんでちゅか？」
「それはバカだからでーす！」
　小バカにするような声に振り向くと、そこには背もたれを手にしたモノクマがいた。
「モノクマ、いつの間に……！」
「ん？　たった今だよ。呼ばれて飛び出て、じゃじゃじゃじゃーんってね」
「別に呼んでまちぇん！」
　モノミは起き上がって、打ち付けた頭をさすりながら唇を尖らせる。
　すると。モノクマはモノミを囲い込むようにして、壁に勢いよく手をついた。
「……ちょっ、こっ、これはまさか……噂に聞く、壁ドンではっ!?」

モノミが驚いたように目を見開く。

　するとその瞳に、にゅにゅにゅにゅにゅ〜っと白い粘度のある液体が注ぎ込まれた。

「きゃあああああ〜っ！　目がっ、目がぁあ〜っ！　あちしの目に何を入れたんでちゅかー！」

「ん？　これ？　これはねー……じゃじゃーん！　美白エッセンスの、のーこーりー」

　モノクマは、さも高級そうなパッケージの美白エッセンスを掲げてみせた。

「いやぁあああああああ！　なんでそんなものを注ぎ込むんでちゅかー！　あと、その半端なモノマネがとっても鼻につきまちゅー！」

「えー。ボクだけすっかりリフレッシュ休憩を取って、より一層美肌になっちゃったから、かわいい妹の赤い目を、キレイな白目にしてあげようと思っただけなのにー」

「やめてー！　勝手に赤いおめめにしたあげくになんでまた勝手に変えようとするんでちゅか！　だいたい黒目の方に合わせるならまだしも、白目になんかしたくありまちぇん！」

「……チッ。バレたか」

「舌打ちすなー！　それにあちしは、お兄ちゃんの妹なんかじゃないって、何回言ったらわかるんでちゅかー！　だいたい、もし本当にあちしをかわいい妹だと思っているなら、アッパーストレートをかますとか、ありえまちぇん！」

「……まあね。ボクだって、オマエが黄色いボディに赤いチェックのリボンをつけたしっかり者の、でもちょっとだけドジな妹だったら、もっとかわいがったと思うよ。でも実際は、いい歳してオムツ着用も厭わないただの厚顔無恥野郎だからなぁ」

「それ、どこの近未来からきた猫型ロボット兄妹の話でちゅか！　怒られまちゅ！　コンプライアンス違反になりまちゅ！　法務部が黙っていまちぇん！」

「……あーあ。ボクも言ってみたいよ『ボクの妹がこんなに可愛いわけがない。』とか、『我輩の妹が可愛すぎて困る！』とかさ」

「むきぃいいいい〜！　かわいくなくて、困らないで済むんだからいいじゃないでちゅか！　そもそも、プリティでキュートだったあちしの羽をもいでこんなオムツ姿にしたのは自分のくせにぃいいい〜！　自分は裸族のクセに〜！　あちし、帰る！　もう帰りまちゅ〜！」

　踵を返して部屋を出て行こうとするモノミの背後から、バシュッと風を切る音が響く。

「……えええっ!?」

　モノミが自分の耳に刺さった何かを引き抜く。それは紐付きのボーガンの矢だった。

「惜しい！　脳天を狙ったのに、ボクの腕もマダマダだなぁ」

「死にまちゅ！　脳天に当たったら即死でちゅ！　耳だって痛いじゃないでちゅか！　このっ、人ごろ……じゃなかったウサギ殺し！　狩人！　またぎ！」

　モノミは、耳から引き抜いた矢を床に叩きつける。

「お褒めにあずかってどうも」

「褒めてまちぇん！　責めてるんでちゅ！　もう、なんでこんなことするんでちゅか！」

　その一言で、モノクマが急に、人差し爪と人差し爪を合わせてモジモジしはじめた。

「……キモい。キモすぎでちゅ。なんのポーズでちゅか？」

「えー。さっきせっかく新しい衣裳を調達してきたから、モノミに見てもらおうと思って」

「……衣裳？　なんのでちゅか？」

　訝しむモノミに、モノクマは満面の笑みを向ける。

「もちろん、撮映のための衣裳だよ。これから毎日、朝から晩まで挨拶やら殺人事件報告やらをしなくちゃいけないだろ？　だから視聴者があきないように奇をてらっていかないとね。F1層やM2層以上はまだしも、C層やT層は気まぐれだからね。つくり手側が細部まで気を配った演出を心がけないと」

「ただの視聴者層区分をさも専門用語っぽく言わないでくだちゃい！　……あ、いつの間にピンクのカーディガンを肩掛けしてるんでちゅか！　テレビ局のプロデューサーにでもなったつもりでちゅか！　ここ数年リバイバルで少し流行ったからって、そんなネタ、十代の子たちにはわかりまちぇんよ！」

　モノミはピンクのカーディガンを奪い取って投げ捨てた。

「チッ！　うるさいなぁ……。まあ、いいや。とにかく、白い貝殻ビキニとか、赤いプラグスーツとか、黄色と水色の梨の妖精ルックとか、黒い千葉ットウーマンの衣裳とか、ネズミー国の雪の姉妹のドレスなんかも仕入れてきたから、見せてあげるよ」

「世界的に有名なのから、ピンポイントなものまで偏りすぎな気がしまちゅ！　しかも後半はなんだか、とある県に偏ってまちぇんか？」

「いいからいいから。じゃあ、これから着てみて」

　モノクマが、貝殻ビキニを差し出す。

「…………………………………………………………………………え？　どうしてあちしが？」

「そんなの、自分で着たって客観的に見られないからに決まってるだろう？　ほら、早く。タイムイズマネーって言葉を噛みしめて、一秒でも速く動く！　ハリーアップ！」

「え？　ええ？　えええ？」

「ほら、その下品なオムツを脱いで、さっさとこれを着る！　ホラホラホラホラッ！」

「いやぁあああああ～！　や～め～て～！　こんなのセクハラでちゅー！　い～や～！」
　モノクマの部屋に長く高い悲鳴が響いたが、助けにくる者はなかった。

　キーンコーン………カーンコーン。
　澄(す)んだ音色が、すっかり暗くなった島に響き渡る。
「……えーと、希望ヶ峰学園修学旅行実行委員会がお知らせします。ただいま午後十時になりました。波の音を聞きながら、ゆったりと穏(おだ)やかにおやすみくださいね。ではでは、いい夢を。グッナイ……」
　プールサイドで放送を耳にした狛枝凪斗(なぎと)が、そばにいた日向創(はじめ)に話しかける。
「ねえ、日向クン。今の放送、なんだかとっても楽しそうじゃなかった？」
　日向は眉(まゆ)をひそめる。
「……そうか？　別にこれまでのふざけた放送と変わらないんじゃないか？」
　狛枝は、口元に手を当てクスクスと笑う。
「ううん。なんだかすごく楽しそうだったよ、モノクマ。何かいいことでもあったのかな」
「仮にそうだったとしても、俺には関係ないな。……部屋に戻ろうぜ」
「うん、そうだね」
　二人の姿がプールサイドから消え、あとには水面(みなも)を揺らす風の音だけが残った。

END

illustration：サマミヤアカザ

スーパーダンガンロンパ2
さよなら絶望学園
SUPER DANGANRONPA 2
[ツインテール天国2]
小説：水澤なな　イラスト：紗与イチ

島のレストランでは、ちょっとした騒ぎが起こっていた。

「ちょっとちょっと〜！　何するんすか、日寄子ちゃん！」

「こら、離さんか、西園寺！　離せと言っているのだ！」

澪田唯吹と辺古山ペコの髪を、西園寺日寄子が両手でつかんで引っ張っている。

西園寺の体型のせいか、お菓子売り場でダダをこねる幼児のようにしか見えない。

「だーかーらー！　このツインテールをやめれば離してあげるって言ってるのにー！」

「ちょっと！　何してるの、日寄子ちゃん！」

カメラ片手に入ってきた小泉真昼が、驚きながらも仲裁に入る。

「ブー。だってーこの二人、なんかムカつくし、人の髪型パクるんだもーん。小泉おねぇからも、なんか言ってやってよー！」

西園寺の言葉を聞き、澪田と辺古山が険しい表情になる。

「別にパクってないっすよー！」

「……心外だな」

「まあまあ。どうかなさったんですの？」

「朝っぱらから何やってんだよ、オメーら！　ケンカか？　だったら加勢するぜ！」

続いて入ってきたのは、ソニア・ネヴァーマインドと終里赤音の二人だ。

「終里さん、煽ってどうするの……」

「ケ、ケンカはいけませんよぉ……」

さらには七海千秋と罪木蜜柑も合流する。女子八人が揃うと圧巻だ。

「うるさいなー！　誰が文句言ってもムカつくけど、罪木には特に言われたくないなー」

西園寺が罪木を睨んで言い捨てる。

「だ、だからっ！　どうして私だけダメなんですか！」

「気持ちわるいからー！」

「ひっ、ひどい……！」

「こら、日寄子ちゃんも、ひどいことばっかり言わないの。それに、人の髪の毛とか引っ張ったりしちゃダメでしょ？」

「ブー。だってー、似合いもしないくせにツインテールとか生意気なんだもーん」

「だから！　私のはツインテールではないと何回言ったら……」

「唯吹のだって違うっすよ！　こーんなにシャレオツな髪型をツインテールの一言で片付けられたくないっすね！」

「違くないもん！　二つに結わいてたらわたしの真似だもん！　そんなの許さないもん！」

「あらあら、埒があきませんわねえ。では、ここはひとつ、全員でツインテールにして、一番似合ってる方がその権利を得るというのはどうでしょう？」

　ネヴァーマインドが、名案とばかりにそう提案したが、頷く者は誰一人いない。

「……多分、そういうことじゃないと思う」

　静かな声で七海がツッコんだ。

　そこでなんとか収まりそうだった雰囲気を、一瞬でぶちこわす声が乱入する。

「ダメでちゅー！　ケンカは許しまちぇーん！」

　白い翼をはためかせフワフワと浮いているのは、自称『魔法少女』ウサミだ。

「話は全部聞かせてもらいまちた！　それでは、熱いご要望にお応えして、みなさんを変身させちゃいまーす！　ちちんぷいぷい、ちんちんぷいぷい！　えいやー！　みんなツインテールになーれ！」

　──そんなわけで、一瞬にして全員がツインテールになった。

　西園寺はもとのまま。辺古山は三つ編みでないツインテールに。

　澪田は、鬼の角のような捻りをほどき後ろ髪も結い上げたモノトーンのツインテールに。

　髪の長いネヴァーマインドと罪木は、流れるような美しいツインテールに。

　ショートカットの小泉、七海、終里の三人は、無理に括ったような少しかわいらしいツインテールになった。

みんなで互いを見つめ合い、小さく笑い合う。
「役目、大義ですわ、ウサミさん」
「はいでちゅ！　こういうことはウサミにお任せあーれ！」
　ネヴァーマインドのねぎらいの言葉で場の空気が和らぎ、一体感が生まれようとした瞬間。再び新たな闖入者が紛れ込む。
「うわ。ツインテールの群れがこんなところに！　一体どういうことだい？　なんのサービスデーなんだい？　いや、野暮な詮索はしないよ。ぼくは寛大な男だからね！　とにかくいいね！　その、ロリータと見せかけておいてうなじから溢れる色香！　ああ、わかっているとも。このぼくにそのうなじをあたためてほしいんだろう？　さあ、どんと来るがいいさ！　全員まとめて面倒を見ようじゃないか！　さあ！　さあさあさあさあっ！」
　鼻血とヨダレを噴きこぼしながら熱く語るのは、厨房から出てきた花村輝々だ。
　八人の女子たちは全員、髪を括っているリボンやゴムを無言で外した。

　翌朝。レストランには、またしても西園寺の声が響き渡っていた。
「いやー！　もうツインテールはいやだー！　なんか違う髪型にしてよ～小泉おねぇ！」

END

スーパーダンガンロンパ2
さよなら絶望学園
SUPER DANGANRONPA 2
[花村輝々の変態天国]
小説：水澤なな　イラスト：紗与イチ

「我が破壊神暗黒四天王たちよ……至高の正餐を楽しみに待つがいい」
　颯爽と歩く田中眼蛇夢がそう呟くと、マフラーの中から顔を出した四匹のハムスターたちが、同意するように頷いて声を上げる。
「きゅー！」
「すまないな。この俺様としたことが、備蓄分の食料を水浸しにしてしまうとは……。もうすぐだ。もうすぐ最高に栄養バランスのいい食事を入手してやろう」
「きゅーきゅー！」
　田中はロケットパンチマーケットにたどり着くなり、迷わずにペット用品コーナーへと足を運び、小動物用の棚からハムスター用フードを取り上げた。
「おお、これだ。『ハムハム健康セレクション』。穀類に肉類、糖類、乳類、ミネラル類、ビタミン類、酵母関連までも配合した完璧な栄養素のバランスフード。しかも葉酸まで入っているとは！　素晴らしい！　これこそ、我が暗黒四天王に相応しい栄養源となろう」
　田中が袋を見せつけると、ハムスターたちもうれしそうに声を上げる。
「きゅーきゅーきゅー！」
　何げなくほかの商品を見回していた田中は、ハッと目を留めた。
「なんと！　『小動物のための好き好き大好きミニコーンセット』まであるではないか。これは四天王の殺戮凶器の手入れに欠かせないシロモノだ。このロケットパンチマーケット、ただのスーパーと見せかけておいて、思いのほか侮れない品揃えのようだな……」
　田中は小振りの乾燥コーンが入った袋を握りしめて、感慨深げに頷いた。
　そんな田中の耳に、聞き覚えのある声が飛び込んでくる。
「あれあれあれ～？　おかしーなぁ。この品揃えじゃ、やってられないよ。仮にもマーケットを名乗るなら、もっときちんとした品揃えにしてもらわなくちゃ。やっぱり青山か麻布、せめて広尾あたりのマーケットじゃないと無理なのかな。ロイヤルかつセレブリティなこのぼくの顧客満足度を満点にするのは」
　よく通りスッと耳に馴染むとても美しい声なのだが、その内容は声質とは正反対だった。
　品揃えに対する感想も、田中とは真逆のようだ。
「なんだ、このおどろおどろしい邪気は……？」

田中はハムスターフードを手にしたまま、声の方へと歩み寄ってみた。

いくつかの棚を通り過ぎて、コスメコーナーにたどり着く。

そこには花村輝々の姿があった。

どこから調達したのか、ビニールのビーチチェアに水着姿で横たわっている。しかもその赤い水着の面積はやけに小さい。

そんなナリのくせに、律儀にいつものシェフ帽・トックブランシュをかぶり、赤いネッカチーフを巻いている。

そんな彼の周りには、化粧品らしきケースがいくつも散乱していた。

「……貴様、こんなところで何をしている？」

できるものなら見なかったことにして素通りしたかったが、あまりの異様な光景に思わず声をかけてしまった。人間、恐怖の対象は見極めておきたいと思ってしまうものだ。

「やあ、田中くんじゃないか！」

田中の姿を認めるなり、花村は短い腕でシュタッと敬礼をしてみせた。

田中がこれ以上ないほど深く眉間に皺を刻んでいるのに対し、花村はそののっぺりつるんとした顔に脳天気な笑みを浮かべている。

「キミも午後の散策かい？　こんなブリリアントな天候の日には、やっぱりショッピングだよね。本当ならもっとアバンギャルドなお店で買い物したいけど、この島にはこの店しかないからね。ここはひとつ、広い心で我慢しておくよ。それこそが、都会人の余裕ってヤツだよね」

田中の眉間の皺が一層深くなる。

「……貴様の能書きはどうでもいい。何をしているのかを端的に答えてもらおうか」

花村は体型のわりには細く形のいい指先で、前髪をハラリと掻き上げる。

「おやおや、せっかちさんだなぁ。そんなに焦ってばかりじゃ、恋心ははぐくめないんじゃないのかい？　愛が生まれるには、一見無駄と思えるような寄り道トークも必要だよ」

「……誰がそんなものをはぐくむか。俺様は、貴様がその禍々しい格好で何をしているのかと聞いているだけだ。まさか地球滅亡のための儀式でも執り行っているのか？」

確かに、散らばった商品が円を描き、花村がその魔法陣の中心にいるようにも見える。

「田中くんは、せっかちさんの照れ屋さんだなぁ。まあ、いいか。教えてあげるよ。ンフフフ……もちろん、みんなのボディの隅々にまで日焼け止めやサンオイルを懇切丁寧にヌルヌルと塗ってあげるためだよ！」

言われてよく見てみれば、床に散らばっているのはサンオイルや日焼け止めなどの容器で、花村の裸体はその溶液でヌメヌメと照り輝いている。

「面妖なことを……。自分の分だけ選べばよいではないか」
　花村は「チッチッチ！」と言いながら人差し指を顔の正面でワイパーのように振った。
　田中は四天王たちの餌食にしてくれようかと考えかけたが、大事な四天王が悪食で体調を崩すところを想像してその考えをかなぐり捨てる。
「こんな日差しの強いところにいるんだから、素焼きはダメでしょ？　だからね、一人一人の個性に合わせたチョイスが必要だと思うんだ。たとえば！　ソニアさんは断然色白だからね。強烈紫外線カットのSPF50にPA＋＋＋＋が必要なのさ。特に内ももあたりは血管が透けそうに白いハズだから、丹念に塗ってあげないとね」
「…………貴様が塗るつもりなのか？」
「ンフフ……当たり前だよ。だってこのぼくが選ぶんだからね」
「……地獄の門が開くのと同じくらいの迷惑さだな」
「またまた。完璧なチョイスだろう？　次に色白な西園寺さんにはミルクタイプが合うと思うんだ。小柄で塗布面積が少ないから、この最高級のタイプにしてあげるのさ。ンフフ」
「……全身に塗るつもりなのか？」
「もちろん！　このぼくのゴッドハンドが唸りを上げてその時を待っているよ」
「……神を名乗るとは、どこまでも図々しい男だな」
「どこか無機質な七海さんにはそうだなぁ……有機的なフローラルな香りのものを塗ってあげようかな。寝転がってゲームをしているところをバックから塗ってあげるんだ。きっとたまにピクンと反応するのがいいよね！　……ああ、高まるなぁ！」
「……むしろ頭を冷やしたらどうだ」
「そうそう！　個性的な澪田さんにはこのラメ入りのタイプがいいと思うんだ」
「……ラメ入りだと、何かいいことでもあるのか？」
「別にないよ。ただ、塗った時におもしろいだろう？　あの白い手足がラメラメにコーティングされるんだ。ぼくはもちろん、ケーキのデコレーションなみに優しくソフトに塗ってあげるよ。どこにもムラができないようにそおっとね！」
　花村は無駄に美しい指先を、いやらしく動かしてみせた。
「……神は創造の際に、ずいぶんと無駄なものを与えたようだな。貴様のような輩に、その声と指は不要ではないのか……。不条理だ」
　花村は、田中の声を無視して続ける。

「でね、辺古山さんと小泉さんと終里さんの三人は、日焼け止めじゃなくてサンオイルがいいと思うんだ。小麦色の肌が素晴らしく映えそうだからね。このヌットリとした液体を全体にふりかけてから塗り広げていくんだ。肌の表面から真皮の奥へと浸透するように、塗るべし！　塗るべし！　塗るべしってね！」
　自らのスネにサンオイルを塗りたくりながら恍惚の表情を浮かべている花村から、田中は数歩後ずさった。マフラーから顔を出した四天王も青ざめた表情をしている。
「だからね、そういうわけでこっちが女子用なんだ。いいチョイスだろう？」
　会心の笑みを浮かべる花村に、田中はついつい余計なことを聞いてしまう。
「……女子用？　では、男子用というのは貴様の分か？」
「もちろん！　男女差別はよくないからね！　ぼくはいつだって博愛精神の権化さ！　ほら、日向くん用だろう？　狛枝くん用だろう？　九頭龍くん用に、弐大くん用、左右田くん用に十神くん用もあるよ。もちろん、田中くん用もね！」
「…………っ！」
　田中は目を見開き、全身を硬直させた。花村は目をキラーンと光らせ、光の速さでそんな田中の手をつかむ。

「貴様、離せ！　何をする気だ!?」
　田中が我に返って足蹴にするが、花村が離れる気配はない。
「ンフフフフ……これはね、田中くん用だよ。田中くんはふだん肌を隠しているだろう？　そんな人の急な日焼けはよくないんだ。だからこのベビー用のオイルで徐々に焼いていくことをオススメするよ。田中くんは筋肉が程よくついているから、その筋に沿って丁寧に塗り広げてあげるよ。リンパに沿って、まるでねぶるようにね！」
「…………手を離せと言っている。聞こえないのか」
「まずは今やってみようか？　いや、やるべきだよ。今すぐに！　さあ、さあ、さあ！」
　海パン一丁のオイルまみれ男にすり寄られた田中は、全身に鳥肌を立てながらも必死にそれを払いのけようとした。しかし、蹴ろうが叩こうが、払いのけられる気がしない。
「離せ、バケモノ！　離せと言っているだろう！」
「またまた～！　照れずに、素直にその身体をぼくに預けてくれればいいだけなのに～！」
「ふざけるな！　地獄に堕ちろ、この淫魔めが！」
　田中は手にしていた三キロのハムスターフードを振りかぶって花村の頭に叩き付けた。
　破れた袋から弾け出た固形のハムスターフードが、あたり一面に飛び散る。
「あれ？　おかしいな……ぼくにそっくりのかわいい天使たちが、ラッパを吹きながら薔薇の花びらを飛ばしてるよ？　あれあれ？　なんだか、向こうに大きな川が見えるような……？　その向こうにいるのは、まさか、じっちゃんとばっちゃん……！　あれあれあれ？　え……ここってまさか……？」
　花村はグルグルと目を回しながら、その場に倒れ伏した。
「……間違いなく三途の川だ。成仏しろ」
「きゅきゅきゅきゅー！」
　田中と四天王は、パンイチで倒れた花村にそっと手を合わせ、その場をあとにした。

　その日以降、全員集合の際に田中が花村のそばに立つことは決してなかった。

END

スーパーダンガンロンパ2
さよなら絶望学園
SUPER DANGANRONPA 2
超高校級の友情
小説：小野上明夜　イラスト：富士原良

ジャバウォック島にてコロシアイ修学旅行が始まってしばらく経った。同じ希望ヶ峰学園の生徒とはいえ、直前まで面識のなかった者同士だ。最初はぎこちない空気が流れていたが、互いの性格も分かってきた今は、それぞれに仲のいいグループを形成しつつある。

毎朝の食事の席にもそれは表れていた。放っておいても男女別々の席で固まるのは日本の学生の性だが、近くに座るメンバーが固定され始めている。食器が触れ合う音に混じって、他愛もない話題ではしゃぐ声がホテル・ミライ二階にあるレストランのあちこちから聞こえる。

「コロシアイさえなければ、まんま修学旅行だよなあ……」

むしろ昼休みの学校のようだ。中学の時は確か……と、覚束ない記憶をぼんやり辿っていた日向創の前に背の高い人影が現れた。頭のアンテナが緊張を反映してピンと立つ。

「日向クン、おはよう！」

特徴的な髪を揺らし、明るく声をかけてきたのは狛枝凪斗だ。特異な才能と突飛な性格のためか、特定の誰かと親しいというよりは、集団の中をその髪のようにユラユラと泳ぎ回っている印象を受ける。

だが最近、彼はやたらと日向にまとわりついては、こう尋ねるのだ。

「ところでさ、日向クン。そろそろ自分の才能について思い出したかい？」

「……思い出してねーよ」

不機嫌丸出しで応じる日向の向かい側、先ほどまで左右田和一が座っていた椅子に狛枝は平気で腰を下ろした。ちなみに左右田は女生徒たちとおしゃべりに興じるソニア・ネヴァーマインドに「デザートを取ってきましょうか？」と紳士ぶって持ちかけ、笑顔で断られている。それはそれで嬉しそうだが。

「そうか、残念だね」

本気で残念そうにつぶやいた狛枝が食事を始める。日向はサラダをつつきながら、しつこくソニアに話しかけている左右田に眼をやった。

早いところ戻ってきて、この気まずい空気をどうにかしてくれないものか。せめて声でもかけてくれれば、席を立つきっかけになるのに。この際いちいち勘に障る発言をする西園寺日寄子でもいいから、誰か。

しかし日向の願いも虚しく、ものの数分も経たないうちに、狛枝が同じ質問を発した。

「ねえ、どうかな。そろそろ思い出したかい？」

「だから、思い出してないって言ってるだろ」

さっきよりさらにきつい口調で言い返したのだが、マイペースな狛枝は動じない。

「そうか、本当に残念だね」

　心底残念そうに、ため息をつくだけだ。彼が落胆を示すたびに募る焦燥を苛立ちに変えて、日向は狛枝を睨みつけた。

「左右田も大概だけど、お前もしつこいぞ、狛枝。最初は焦らなくていい、みたいなことを言っていたくせに、なんでそんなに……」

「だって、日向クンの才能だけがまだ分からないからね。これから先のことを考えれば、有益な情報は少しでも必要だろう？　何より幸運なんてチャチな才能しかないボクは、みんなの超高校級の才能にすっごく興味があるんだ！」

　しまった、と思っても手遅れだ。狛枝の瞳がきらきらと危ない輝きを放ち始める。

「他の人と同じ才能ってこともあるみたいなんだよね、一応」

　完全に席を立つタイミングを逃した日向をよそに、フォークを振り振り狛枝の推理が始まった。

「超高校級の料理人……違うなあ。だって日向クンが料理してるトコとか、見たことないし」

「食事は毎日こうやって用意されてるんだから、作る必要ないだろう。無駄だ」

　我ながら刺々しい、と辟易するような返答にも、軽い調子で反論されてしまう。

「でも、花村クンは独自にいろいろ作っていたと思うけど？　まあ彼の場合、口説くきっかけにしてたフシはあるけどね。じゃあ、超高校級の御曹司……うーん、これも違うなあ。失礼だけど十神クンと違って日向クンは、見るからに御曹司って感じじゃないし」

　料理人の才能はない。

　御曹司の才能はない。

　可能性を切り捨てる言葉がプライドを削り、焦りを育てていく。

「悪かったな、料理もできなけりゃリーダーシップもなくて！」

　カッとなって声を荒らげると、何人かが驚いたようにこちらを見るのが分かった。だが肝心の狛枝は、「確かに貫禄も体重も足りないよね」と朗らかに相槌を打つだけだ。

「でもさぁ、日向クンだって気になるでしょ？　自分の才能が、なんなのか」

　痛いところを突かれ、反論を封じられた日向を切れ長の瞳がじっと見つめている。髪はユラユラ、態度はヘラヘラ、いつも摑み所がないくせに、彼は才能に……希望についてだけは、異様なほどまっすぐだ。

　他の面々と違い、才能という支えを失った状態にある日向を容易にぐらつかせる程に。

「覚えてないって言ってるだろ!!　しつこいんだよ!!」

感情に任せてテーブルを叩いた瞬間、自分でも驚くほど大きな音が出た。朝っぱらからローストビーフを口に詰め込む作業に没頭していた終里赤音でさえ、眼を丸くしている。

「な、なに、さっきから……ケンカ？　もう、これだから男子って……」

小泉真昼が呆れたように口癖を言う。九頭龍冬彦などは「気合い入ってんじゃねーか」と満足そうだが。

「あは、ごめんね、日向クン。怒っちゃった？」

静まり返ったレストラン内に、軽薄に響く狛枝の謝罪。内心ばつの悪さを覚えていた日向だったが、その軽さにさらに腹が立った。

「……聞くまでもないか」

無言で立ち上がろうとする日向に狛枝が苦笑する。そして彼は、自分のトレイを持つとすばやく席を立った。

「ごめんね、邪魔して。ボクは向こうに行くから、日向クンは座っていなよ。本当にごめん」

ペコペコと頭を下げた狛枝が、ひとり離れたテーブルに移動する。だが日向も結局席を立ち、食べかけの朝食を置き去りにしてそのままレストランを出て行った。

気まずい朝食の一件以来、狛枝は日向につきまとうのをやめた。例の質問を浴びせてくるどころか、話しかけてもこない。

それどころか、視界にすら入ってこない。食べるタイミングをずらしているのか、本日の朝食時も顔を合わせなかった。

「極端すぎるんだよな、あいつ……」

午前中から強烈な日差しに瞳を細めながら、日向はげんなり顔で独りごちた。並んだコテージに意味もなく視線をやっては、再び正面に戻してため息をつく。

と、汗だくのシャツの背を、つんと突かれた。

「のあっ!?」

仰天して振り向くと、人を驚かしておいてのんきにあくびをしている少女の姿が見えた。ゲームのしすぎか、いつでも眠そうな七海千秋だ。

「日向くん、どうしたの？　狛枝くんに何か用？」

「い、いや、別に、用って訳じゃ!!」

　大きく手を振って否定するが、七海は眼をこすりながら指摘した。

「そう？　でもここ、狛枝くんのコテージの前だよね。この暑い中、ずーっとここに……いたよね？」

「……ってことは、お前もここにいたのかよ。ならちゃんとフードを被っとけ、熱中症になるぞ」

　いつもゲーム機に貼りついているインドア派の七海である。自分でさえちょっとクラクラするような日差しだ、長時間浴びっぱなしというのはよくないだろう。そう思って注意すると、七海は眼をぱちくりさせてから、おとなしくネコミミフードを被った。

「ん、ありがと。ところでね、日向くん。もしかして、この間狛枝くんと言い合いになったこと、気にしてる？」

　図星を指されたばつの悪さに、無意識にうつむいてしまう。

「……聞いてたのかよ」

「みんなに聞こえてたよ」

　普段はボケ役の七海に真顔で突っ込まれると逃げ場がない。日向はとりあえず、近くにあった十神のコテージの玄関先に七海を誘った。ここなら日陰になっている。

「ちょっと俺も、大人げなかったかと思ってさ。あれ以来ずっと、顔も見ていないしな」

　隣の狛枝のコテージに視線を投げながら、渋々口を開いた。

「狛枝のやつ、図太いんだか繊細なんだか分からないところがあるじゃないか。俺が原因で部屋に引きこもってるようなら、なんていうか、後味が悪いだろ？」

　狛枝は基本的にはおおらかで気遣いもできるのだが、時に驚くほどあっけらかんとネガティブなことを口にする。この間も最後までヘラヘラしていたが、果たしてあれは本心なのか。

「それにあいつ、特定の誰かと仲良くしてるって感じじゃないんだよな。男子とも女子とも分け隔てなく付き合ってはいるけど、どっか他人行儀っていうか……みんなの才能を褒めてばっかりで、自分も同じ才能を持つ仲間だと思ってないっていうか……」

「要するに、狛枝くんのことが心配なんだね」

　ズバッと要約され、日向は口ごもった。

「そりゃ、この間まで散々つきまとわれてたからな。急に来なくなったら、気にはなる」

「日向くんは優しいね。もしかしたら日向くんの才能って、超高校級のお世話係なのかも」

　七海が優しい顔でクスクス笑う。

「よせよ、縁起でもない」

個性濃厚なメンバー内での立ち位置に思いを馳せると、間違っていない気がするのが怖い。苦い顔で手を振る日向にまた少し笑ってから、七海は記憶を辿る表情になった。

「うーん、でも、狛枝くんのことは、心配しなくていいと……思うよ」

　意外と冷たい反応に、日向は苦笑した。

「そういやお前も、案外分からないところがあるよな。でも、やっぱりさ」

「だって狛枝くん、日向くんのいないところで、日向くんの才能について聞きまくってるもん」

　鮮烈な日差しに白く輝く砂浜へ向けて、日向の怒号が響き渡った。

「狛枝、お前、ふざけるなよ!!」

「日向さん！」

　応じたのは狛枝ではなく、彼としゃべっていたソニアだ。普段の楚々とした王女様ぶりはどこへやら、だだだっと砂を蹴って肉薄してくるなり、機関銃のようにまくしたて始める。

「日向さんはとんだ悪代官です!!　あなたの才能にこんなに興味津々丸な狛枝さんに、冷たくし過ぎです!!」

「そーっすよ、創ちゃんはイケズチャンチャンっす!!」

　澪田唯吹まで横から加勢してきた。

「凪斗ちゃんは確かにノンデリカシーだったかもしれないっす。だけど、それも創ちゃんを思ってのこと!!　つまり友情パワー!!　その熱いソウルに免じて、才能の一つや二つ、バーンと思い出すべきっすよぉ!!」

　スイッチが入るとハイテンションになるソニアと、大体いつもハイテンションな澪田に詰め寄られ、日向はたじたじとなった。おまけに二人の後ろから左右田が、「テメェ、ソニアさんがこんなにおっしゃってるんだぞ……!!」と恨みがましい視線を送ってきている。

「あはは、ごめんね、日向クン」

　当の狛枝も近づいてきて、何やら申し訳なさそうな顔をした。

「この間、しつこくして怒らせちゃったからさ。だからキミ本人じゃなくて、他のみんなが何か気づいていないかと思って聞いてたんだ。超高校級の才能の持ち主ともなれば、ボクなんかとは着眼点も違うだろうしね！」

「……お前、また……」

　すっかり聞き慣れた卑屈な発言に言及する前に、ソニアが「日向さん！」と力強く呼びながら顔を覗き込んできた。宝石のように澄んだ瞳が間近に迫ってきて、あまりの目力に反射的に仰け反る。

「日向さんは、ご自分の才能を思い出したくないのですか？」

　ストレートな質問は、だからこそ強く心臓に突き刺さった。

「いや、それは……もちろん、気にはなってる。俺自身のためにも、思い出したい」

「なら！　今こそ狛枝さんと心を一つにし、力を合わせて思い出すべきではないでしょうか!!」

　王女のカリスマ全開で正論を吐かれると、嫌とも言えない。返答に窮した日向へ、ソニアは畳みかけた。

「よく言うではないですか。後悔をしたい時には親はなしです!!」

「なんか違うしシチュエーションにも合ってない!!」

「つまり、悔いなく生きようってことっすね!!」

「うーん、大意は合ってる気がするねえ」

　澪田の荒っぽいまとめに、狛枝がのんきな同意を示す。元はといえばお前のせいだと責めようとした瞬間、地を這うような声が背後から聞こえた。

「ソニアさんと盛り上がってるなあ、日向……」

　嫉妬に眼を澱ませた左右田だった。不気味な迫力に怒りが吹き飛び、日向は慌てて弁解を始めた。

「いや、ほら、澪田ともしゃべってるし」

「ウッセー、余計な自慢を付け加えるんじゃねえ!!　くそっ、オレも記憶喪失ぶっとくべきだったか？　ミステリアスな男ってモテるんだよな……」

「おい、俺は別にモテたくて記憶喪失ぶってる訳じゃないぞ？」

　聞き捨てならない、と抗議しても、今の左右田は聞く耳を持とうとしない。

「ウッセーウッセー!!　とにかくソニアさん、この天才メカニックにお任せください!!　こいつの記憶ぐらい、チョッパヤで取り戻してやりますよ!!」

　色恋絡みだと面倒だが、左右田も超高校級の才能の持ち主だ。ちょっと待ってろ、と言い捨てて走り出すと、すぐに大型のヘッドホンのような謎の機器を抱えて戻ってきた。

「オラ、日向、つけろ」

　そのまま頭に被せられそうになったソレを手を突っ張ってガードしつつ、こわごわと尋ねる。

「な……なんだよ、それ」

「もちろん、記憶再生マッシーンだ」

　ひねりも何もないネーミングが、左右田の怒りの深さを表していた。

「ホレ、被れ。後は三分待てば記憶が戻る」

「カップラーメンかよ！」

　説明も雑すぎる。抗議しようとした日向の頭に、左右田は問答無用で装置を取りつけた。そして何事かと興味を示しているソニアと澪田を、とびっきりの笑顔で振り向く。

「主にソニアさん、見ていてください!!　日向の記憶再生ビックリショーを!!」

「人の記憶喪失をショーアップするな!!」

　がなる日向の後ろで、狛枝が「日向クン、そのマッシーンよく似合うね！」とにこにこしている。そうだ、こいつに文句をつけにきたのだと思い出した瞬間だった。

　安いコントのような爆発音を立てて、記憶再生マッシーンが四散した。

「ゴホッ、ゴホゴホゴホゴホ!!」

「アイヤー、ジャパニーズドリフ!!」

　爆音でやられた耳に手を当て、黒煙を吐き散らす日向を見てソニアが眼を丸くしている。

「だ、大丈夫かい？　日向クン。よかった、ちょっと火傷してるけど、大したことはなさそうだね」

　怪我慣れしている狛枝が煤まみれの日向の顔をぬぐい、澪田は腹を抱えて爆笑し始めた。

「あははー、爆発オチとか唯吹嫌いじゃないっす!!　ミステリアスな男と見せかけて、ミステイクな男っていうのもサイコー!!」

「うるせぇぇぇぇ!!」

　面目を失った左右田は泣きそうだが、泣きたいのはこっちだ。狛枝の手を振り払った日向は、必死に言い訳をしている左右田を捨て置いてその場を離れた。

　後ろから追いかけてきた狛枝が、遠慮がちに質問してくる。

「日向クン、どう？　記憶……戻った？」

「むしろ記憶を失うところだったよ！　くそっ、こんなところにいられるか、俺は部屋に戻る!!」

　いっそ狛枝のことを忘れさせてくれればよかったのだ。怒りのオーラをまき散らしながらコテージに向かって歩いていると、不揃いな黒髪の少女が話しかけてきた。

「あ、あのぅ、日向さぁん、今よろしいですかぁ？」

「罪木……」

　相手が罪木蜜柑と知って、日向は若干態度を軟化させた。

ただでさえ気弱な彼女が、見るからに不機嫌な自分へ話しかけてきた理由は決まっている。何せ罪木は、超高校級の保健委員なのだから。
「手当てしてくれるのか？　ありがとう、でも、大した怪我じゃ」
「私には、イケナイお薬で協力することしかできないんですぅ、生まれてきてすいませぇん!!」
「イケナイと分かってるお薬は断固断る!!」
条件反射で突っ込みながら、自分の考えの甘さを呪う。ちょっと泣きそうになっている日向の横で、狛枝は申し訳なさそうに身を縮めた。
「ごめん、日向クン。ボクがあんまりにも必死に聞き回ったものだから……」
「はい、そうなんです！　狛枝さんってば、とってもとっても真剣でぇ……最近の医療では、心のケアも重要視されていますから」
「じゃあ俺の心のケアも重要視してくれよ……」
日向の弱々しいつぶやきをよそに、罪木はいつの間にか取り出した小さな注射器を見つめて瞳を蕩けさせている。
「ふふっ、大丈夫です……痛いのは一瞬ですぅ……でも、後遺症は一生かも……」
「おい!?」
物騒な発言を追及しようと伸ばした手は、しなやかな指先に掴まれた。ひんやりと湿った感触にどぎまぎしたのも束の間、半袖の腕に狙いを定めるような視線が這う。
「うふっ、ぶっとい静脈発見！　さ、日向さん。ちょっとチクッとしますよぉ？」
「嫌だ！　一瞬チクッとするのはいいが、一生後遺症を背負うのは嫌だ!!」
ふるふると首を振る日向を、罪木は駄々っ子をなだめるような笑顔で見つめている。狛枝と違い、ストレートに卑屈な彼女だが、やはり希望ヶ峰学園に才能を認められた生徒だ。自分の専門分野となれば強い。
「大丈夫ですって、危険性は七割を切って……あひゃんっ!?」
だが、彼女はドジだった。
「あ、おい、罪木!?」
日向の腕を掴んだまま砂に足を滑らせる、という豪快なドジっぷりを発揮した罪木から、狛枝と一緒に慌てて眼を逸らす。毎度お馴染み、狙っているのかと勘繰りたくなるほど際どい転び方は健在だ。
「あー……」
おまけに目元をうっすら赤く染め、若干涎まで垂らした表情は目の毒としか言いようがない。

「大丈夫ですぅ……ふふ、なんてきれいな星空……」

転んだ拍子に手元が狂ったのだろう。右手にぶっすり注射器を突き刺した罪木が、海を見つめて完全にトリップしている。

日向は狛枝と顔を見合わせた後、珍(めずら)しく意見が揃(そろ)ったことを確認した。つまり、見なかったフリをして場を辞(じ)した。

「お前、みんなにどれだけ必死で俺の話をしたんだよ!?」

「いやあ、さすがにジャンピング土下座は引かれたよね」

爽(さわ)やかに笑う狛枝とこそこそ話し合っていると、目の前が翳(かげ)った。ぎょっとして見上げれば、分厚(ぶあつ)い胸板(むないた)が行く手を阻(はば)んでいる。

「なんじゃなんじゃ、小細工をチマチマと!!」

夏の砂浜がやたらと似合う筋骨隆々(きんこつりゅうりゅう)の大男、弐大猫丸(にだいねこまる)だった。隣に褐色(かっしょく)の肌(はだ)がまぶしい終里までいる。

「うーん、でも、記憶っていうのはとても繊細なものだからね。うまく取り戻そうとすれば、結果として小細工になってしまうのも仕方がないんじゃないかな」

いつもの調子で狛枝が反論する。「あっ、馬鹿(ばか)！」と慌てても遅かった。

「破(は)ッ、笑止！　記憶喪失を治す方法など決まっておるわ、なあ終里!!」

「ああ!!」

逃げる暇(ひま)もなく、終里が力強く答える。

「もちろん、激しい運動によるショック療法(りょうほう)だぜ!!」

「激しい運動による必要はないだろ!?」

うっかり突っ込んだことを後悔しても後の祭りだ。逃げる機会を失った日向の手首を掴み、弐大が呵々大笑(かかたいしょう)する。

「愚堕愚堕(ぐだぐだ)抜かすんじゃないわいッ!!　記憶を取り戻すついでにトレーニングもできる、一石二鳥じゃろうが!!　征(ゆ)くぞ、終里!!　まずはこの砂浜を端(はし)から端まで、ランニングじゃあ!!」

「日向、気合い入れろよ！　砂は足にクルぜぇ。よーい、どん!!」

言うが早いか終里が恐ろしい速さで駆(か)け出した。日向をがっちり捕(つか)まえた弐大が負けじと後に続く。

「日向クーン、がんばってー!!」

これも彼の才能の賜物か。ちゃっかり高みの見物を決め込んだ狛枝の応援が聞こえ、いつか殺す、と思った。

　全身から伝い落ちる汗が、砂浜に人形の染みを作る。ぜいぜいと喉を鳴らしながらうずくまった日向は、分かりきっていた結論を述べた。
「ぜ、全力疾走で、記憶、戻る、とか、ねーよ……！」
「日向クン、大丈夫？　はい、お水を持ってきたよ」
　親切ぶって狛枝が差し出したコップを奪い取り、一気に中身を飲み干してから彼を睨みつける。ちなみに弐大と終里は砂浜往復二回でダウンした日向を「だらしがないのう」とあっさり見切り、自分たちだけでトレーニングを続けている。
「も、元はと、言えば、お前が……！」
「フッ、つらそうだな、日向創」
　かすれ声で怒鳴りつけようとした時、計ったようなタイミングで田中眼蛇夢が声をかけてきた。何かと演出を気にする彼のことだから、実際にタイミングを計っていたのだろうが。
「……なんだよ。まさかお前のヘンな術とかで、俺の記憶を戻してくれるのか？」
「そうだな。俺様の能力でアカシックレコードに介入し、喪われし過去の詩を紐解いてやってもいい」
　自信満々にうなずいた田中は、包帯が巻かれた左手を突き出して邪悪な笑みを浮かべた。
「さあ、思い出せ日向。我が影なる右腕、『狂乱のアンテナ』として、共に焦土を駆けた日々を……!!」
「ありもしない記憶を捏造するな!!」
　幸い田中は超高校級の厨二病ではなく飼育委員だから、記憶の捏造はできないだろう。分かっていても怒鳴り返さずにはいられなかった。いいかげん体力も気力も限界なのに、連続して突っ込ませないでほしい。
「フ、捏造か……そう思いたがるのも無理はない。忌まわしき戦いの記憶は、うぉっ!?」
　懲りずに前世の妄想を繰り広げていた田中に、小柄な人影が斜め後ろからぶつかった。その拍子にストールにくるまっていたハムスターが転がり落ち、「ジャンＰ、チャンＰ！」と田中が悲痛な声を上げる。
「シロートの追い込みはヌルいんだよ。オラ、どきな」
　田中を押しのけて登場したのは、九頭龍となぜか、辺古山ペコだった。
「……そうだな。確かに、手ぬるい」

九頭龍は不穏な空気をまとっているし、辺古山は竹刀を構えている。嫌な予感しかしない。

「ま、待てよ、お前ら。なんのつもりだ……？」

「狛枝の野郎が、あんまりにもうるせぇんでな。ちっと黙らせてやろうと思ってよ」

　その割に、二人の視線は日向に向けられている。

「九頭龍クン、辺古山さん、だめだよ！」

　狛枝が止めに入ろうとしたが、九頭龍は「この間よせっつってんのに頭下げてきたのはソッチだろ？」と薄く笑った。さすが超高校級の極道、身長差の関係で完全に上目遣いだが迫力はある。

「男が頭まで下げての頼みだ、無下にするのも気が引ける。なあ、辺古山」

「ああ。それに私も、日向の才能には興味がある。武道の経験者とも思えないのに、その胸囲……」

　眼鏡の下、剣呑な光を帯びた辺古山の瞳に、日向の背筋が冷たくなった。並みの男でも勝てない超高校級の剣道家に本気で凄まれると、生きた心地がしない。

　要するにこの二人、弐大・終里コンビと同じ発想なのだ。すなわち、肉体を痛めつければ記憶が戻るのではないかと。

　冗談ではない。この上彼らのような暴力の専門家にまで出てこられては、学級裁判が必要な展開になってしまう。

「やめろよ！　左右田や罪木にだって結果的に痛めつけられたけど、俺の記憶が戻る様子はないんだぞ!?」

　真っ青になって止めようとするが、二人は無言で距離を詰めてくる。先の台詞からして、九頭龍は日向ではなく、狛枝がうっとうしくて事態の手っ取り早い解決を試みるつもりらしい。

　やっぱり狛枝のせいなのだ。再び腹が立ってきたが、そこに救いの女神が現れた。

「ちょ、ちょっとちょっと、なに？　なんの騒ぎかと思って来てみたけど……日向、一体どうしたの？　ボロボロじゃない」

「おねえ、記念遺影撮ってあげれば？」

　小泉と西園寺だった。西園寺はむしろとどめを刺しに来たような発言をしたが、女子二人を前にすると辺古山は少し気が咎めたらしい。竹刀の先を下げて、

「いや、今からもっとボロボロにする予定だが……」

「ええ!?　どうしてペコちゃんが……あ、もしかして、狛枝がスライディング土下座して頼んできたアレのせい？」

「お前そこまでやってたのかよ」

すかさず突っ込む日向を庇うように、小泉が彼の前に立った。

「やめなよ、馬鹿馬鹿しい。アタシはこういうの専門じゃないからよく分からないけど、殴って戻るようなものじゃないでしょ、記憶って」

「小泉……」

まとも過ぎるほどまともな理論が、荒んだ日向の胸を暖めてくれる。超高校級の写真家であること以前の、彼女本来の優しさがまぶしかった。

「ありがとう。そんなことを言ってくれたのは、お前だけだ……」

「ばッ！　馬鹿、何よ、こんなの当然でしょ」

髪と同じ色に頬を染め、小泉がぷいっと顔を背ける。一連のやり取りが、小泉おねえ大好きな西園寺に嫉妬を抱かせたようだ。

「何よ何よぉ、悲劇のヒーローぶって、みんなの同情引きまくってさあ!!」

ぱたぱたと振り袖を振る様は愛らしいのだが、冷ややかな表情はひどくサディスティックである。一部の好事家なら垂涎モノだろう。

「日寄子ちゃん、やめなって。日向、本当に思い出せないみたいなんだから……」

小泉がなだめたことで、かえって意地になってしまったらしい。何よぉ、と子供っぽく唇をとがらせた西園寺は、口元を袖で覆って意味深長な視線を寄越す。

「フーンだ、もったいぶっちゃってさぁ。ちょーショボい才能だったから、思い出せないフリしてるだけなんじゃないのぉ～？」

その言葉は、おそらく西園寺本人が意図していたよりも深く、強く、日向の胸に突き刺さった。

なぜならそれは日向自身、薄々危惧していたことだったからだ。

決して決して、フリをしているんじゃない。だがここまでして思い出せないのは、才能に関する記憶が自分にとって都合が悪いものだからではないか。例えば今、西園寺が言ったような、口に出すのも恥ずかしい取るに足りないものだったら？

「日向クン、そんなことないよ！　日向クンにはすごい才能がある、ボクは信じてる!!」

黙り込んでしまった日向に、狛枝が気遣いの言葉をかける。今この瞬間、彼からだけは聞きたくなかった言葉を。

無神経な部分も多いとはいえ、最終的には必ず日向を立ててくれる狛枝。だがそれは、日向に超高校級の才能があると信じているからだ。プライドを投げ打つような真似をして、みんなに聞き回っていたのもそのためだ。

しかし、そこまでして判明した日向の才能が下らないものであったらどうする？　考えるまでもない。彼

は二度と自分につきまとわないだろう。もちろん、日向を気遣った訳ではなく。

　うんざりだった。自分勝手な狛枝も、その身勝手さを分かっていながら想像で傷ついてしまう自分も。

「……うるさい」

「日向ク」

「うるさい、うるさい、お前らみんなうるさいッ!!」

「日向クン!?」

　大声で怒鳴ると同時に、誰の顔も見ずに駆け出す。なけなしの体力を使い切る勢いで、日向は一目散に自分のコテージまで走って帰った。

　南国らしく開放的に開いた窓から流れ込む、かすかな夜風すら気に障る。

「……ああ、くそ！」

　寝台でゴロゴロしているのも限界で、日向は枕を鷲掴みにしながら起き上がった。

　窓の外はすっかり暗く、時計を見ると午後九時前だった。怒りに任せて砂浜を去り、コテージに引きこもって以来、昼食も夕食も抜きだが全く食欲を感じない。あれだけ鼻面を引き回され、気力も体力も消耗したというのにだ。

　何をする気にもなれず、眠れば悪夢にうなされる。胃に居座って食欲を失わせている黒いモヤモヤが人の形を取り、うずくまる日向を取り囲んで無邪気に尋ねるのだ。お前の才能は？　お前の才能は？　お前の才能は？

「それもこれも全部、あいつのせいだ……！」

　怒りに任せ、掴んだ枕を壁に投げつけようとした時だった。

「日向クン、いるよね。入るよ」

　扉の開く音がして、ユラユラ揺れる髪が照明の光を弾く。

　当たり前のように眼の前までやって来た狛枝を、日向はあ然として見つめた。ぼす、と間抜けな音を立てて枕が手から滑り落ちるが、今はどうでもいい。

「狛枝!?　お前……どうやって入ってきた!?」

「不用心だね、日向クン。鍵、かけ忘れてたみたいだよ」

　困ったように肩を竦めて、狛枝はあっさり種明かしをした。

「他のみんなも様子見には来たようだけど、キミを気遣って、開くかどうかさえ確認しなかったのか……あ

るいはボクの、才能のおかげかな。どうしてもキミに会いたいと思ったから。会って、う、ぐっ……!?」

いきなり襟首(えりくび)を掴まれた狛枝は、苦しそうに顔を歪(ゆが)めている。その白い顔を、日向は憎しみを込めて睨みつけた。

狛枝の才能、幸運。全ての因果律(いんがりつ)を超越し、望みの結果を手に入れる力。

それを彼は、今の自分の前でひけらかしてみせたのだ。到底許せる気分ではなかった。

「お前の才能のおかげか。だったらこういう目に遭(あ)うのも、分かってて入ってきたってことだろ」

掴んだシャツの生地が狛枝の首筋に食(く)い込んでいる。その痛みを想像すると、冷たく胸がすいた。

「俺だってな、自分の才能を思い出したい気持ちはある。いや、誰よりも、そう思ってる」
　狛枝に指摘されるまでもない。個性も、そして才能も豊かなメンバーに囲まれて過ごしていると、折りに触れて意識せずにはいられないのだ。では自分には、何ができるのだろうか。どんな才能を持っているのだろうか。
　この際七海に指摘されたように、お世話係でもなんでもいい。誰かに言ってほしかった。認めてほしかった。お前にはこんな才能があるんだ、立派な希望ヶ峰学園の生徒なのだと。
「けどな、狛枝。お前なら誰よりもよく分かるだろう？　希望ヶ峰学園の生徒にとって、才能ってのは存在意義だ。生きる価値にも等しいんだ。なのに俺はそれを思い出せない。俺だけが……!!」
　シャツを摑んだ指に力がこもる。生地がますます首に食い込み、狛枝も痛いだろうが、日向の指にも同じく食い込んで痛い。それでも、放してやる気になれない。
「下手に口出しされたり、茶化されたい話じゃないんだ。なあ、お前なら分かるはずだろ、なのに……！」
「――ごめんなさい」
　子供のような謝罪が、ぽろっと狛枝の口から零れ出た。毒気を抜かれて思わず手を緩めると、狛枝はひどく殊勝な顔をしている。
「ごめん、日向クン。キミの言うとおりだ。ボクが悪かった。謝るよ。本当に、本当に、ごめん……」
　聞いたこともないような声で言うものだから、完全に手を放してしまった。伸びてしまったシャツの襟元が間抜けだが、狛枝はあくまで真面目な顔をしている。。
「でも、安心して。どんな才能だって、ボクのゴミクズみたいな幸運よりは上に決まってるんだから!!」
　殊勝な顔から一転、不意に彼の瞳に見慣れた光があふれ出した。
「ボクはみんなのキラキラした才能が生み出す希望が大好きだから、ついついしつこくしてしまったんだ。二度と余計なことはしないから、どうか許してほしい。あっ、これ以上ボクなんかの醜い姿を見たくないよね。じゃあ、本当にごめんね、日向クン!!」
　言うが早いか狛枝はさっと踵を返し、コテージを出て行ってしまった。
　あっという間に一人に戻った日向は、とりあえず床に落とした枕を元の場所に戻した。
　だが横になることはせず、寝台に腰を下ろしてしばらくの間、先ほどの狛枝とのやり取りを反芻していた。

　翌日から狛枝は、日向の才能の追及をやめた。

前回のように、本人に聞くのを遠慮しただけではない。他の面々に聞き回るのもやめたと、七海が教えてくれた。ついでに日向を避けるのもやめて、顔を合わせれば挨拶ぐらいするし、時には食事も一緒にする。

他の面々を相手にするのと同じように。

「……本当に勝手なやつだよな」

つい先ほどまで狛枝が座っていた席に眼をやりながら、日向は小さなため息をついた。一匹狼を気取る九頭龍を除けば他のメンバーは全員まだ食事中なのに、狛枝はなぜかものすごい速さで食事を搔き込むなり出て行ってしまったのだ。

ユラユラ揺れる頭が欠けていても、朝食の席は昨日までと変わらずにぎやかである。特定の誰かとつるむことをしない狛枝の不在は、場の雰囲気に大きく影響しないのだ。

「俺の才能は本当に、お世話係なのかもしれない……」

西園寺にいびられた罪木の泣き声に耳を傾けつつ、ここにいない彼のことを考える。罪木には小泉と澪田がついているから今は大丈夫だろう。

狛枝の才能、幸運。

本人の意図すら凌駕する幸せを運び、その幸せに等しい不幸というツケを強制的に払わせる恐るべき才能。説教強盗みたいだよな、とぼんやり考え、「それは違うぞ！」と自ら突っ込んだ。多分耳朶をくすぐる澪田の言語センスが影響しているのだ。

制御の難しい才能を持つがゆえに、他人の才能に人一倍興味を抱く狛枝。日向と違って自分の才能には自覚的だが、同時にひどく自嘲的で、明るく笑いながら己を否定する。

手間のかかる、面倒なやつだ。だがそんな面を一部でも見せてきたのは、自分にだけではなかったか。

――後から不運のツケ払いがくる。それが分かっていて、あいつは俺のコテージに入ってきた。なのに俺はあいつの襟首を摑んで締め上げ、責め立てた。

謝りにきた狛枝を、その才能が求める因果どおりに。

眉をひそめて己の手を見下ろせば、狛枝と自分の肌に食い込んだ布地の痛みが蘇ってくる。振り切るように頭を振った瞬間、窓の外にあるものを見つけた。

「狛枝？」

並んだコテージの屋根の向こう、白い砂浜に浮き上がったカーキ色のパーカー。ヤシの木の下に狛枝が立っている。

「あれ、日向くん、どこに……ふわぁ」

席を立った日向に七海が声をかけてきたが、日向は少し笑って手を振った。

「腹一杯で眠いんだろ？　座ってろよ、俺はちょっと用事を思い出しただけだから」

　レストランを出て小走りに駆けた日向は、程なく砂浜に辿り着いた。昨日はほぼフルメンバーで大騒ぎした場所に今いるのは、狛枝だけだ。
「おい、狛枝……」
「来るな！」
　呼びかけた瞬間、鋭い声で制された。まず言葉を失い、続いてむかっ腹が立った。
　我ながら心が狭いとは思うが、ここ最近どれだけ狛枝に引っかき回されたと思っているのか。追いかけてきたりするのではなかった、やっぱりこいつに構うのはやめよう、と思った瞬間だった。
　ゴーン、と豪快な音を立てて、ヤシの木の実が狛枝の頭に激突した。
「あたた……よし、これで大丈夫。なに？　日向クン」
　大きなたんこぶをさすりさすり、狛枝が笑って近づいてきた。
「い、いや……お前がずいぶん早食いして出て行くから、何かあったのかと思って……」
「ああ、今日の朝食、ボクの好きなものばっかりでさ。これはすぐに揺り返しがくると思ったから、みんなを巻き込まないために離れたんだ。でも、もう大丈夫だと思うよ」
　さらりと言われ、瞠目する。
　同時にユラユラと、狛枝の髪や態度のように不安定に揺れていた心の天秤が、ある一方に決定的に傾いたのを感じた。軽く呼吸を整え、なるべく平静を装って切り出す。
「――あのな、狛枝。俺の才能の話なんだが」
「え？　あ、いいよ、ごめん。気を遣わせてしまって」
　先回りしてさえぎろうとする狛枝は、心底申し訳なさそうだ。あの日誓ったとおり、本当に日向の才能を探る気はないらしい。
　今までぐいぐいと一方的に押され続けていた分、神妙な態度が面映ゆい。やっぱり俺はお世話係なのかもしれない、と自嘲しながら、腹を括った。
「俺の才能を思い出せない理由を考えたんだが、その……お前と二人じゃないと発揮できない才能、って可能性もあるんじゃないか」
「……え？」
「ほら、ちょ、超高校級の友達、とか、さ」
　無意識に眼を伏せていたようだ。気がつくと視線の先に狛枝の靴先があった。

背中にどっと汗をかいているが、自分が照れたら言われた狛枝は余計に気後(きおく)れしてしまうだろう。どうだとばかりに勢いよくあごを上げると、冷め切った眼と眼が合った。
「何それ、恥ずかしい」
「……お前なあ!?」
思わず声を裏返らせる日向だったが、狛枝は至って冷静だ。
「だって……恥ずかしいでしょ、日向クンだって。顔が赤いよ？」
真顔で指摘され、ますます頬が熱を持つのを感じた。慌ててうつむいた頭に、追い打ちとばかりに呆れた声が降り注ぐ。
「もう、ちょっとさ、勘弁(かんべん)してよ？　確かにボクは日向クンを含めた才能あふれるみんなが大好きだし、ボクなんかを友達扱いしてくれるのは嬉しいけど、いくらなんでも」
突然ゴーンという音が再び響き渡り、ペラペラしゃべっていた狛枝がばったり倒れた。
「お、おい、狛枝っ!?」
「……うう……」
見れば狛枝の頭には、さっきのたんこぶの上にもう一つこぶが盛り上がっている。不運のツケ払いには慣れているはずだが、続けざまの一撃は効いたようだ。
その手を取って起き上がらせてやれば、狛枝はムッとした顔でこちらを睨んでいる。
「……なにニヤニヤしてるんだい。気持ち悪い」
「そりゃな」
辛辣(しんらつ)な言葉も今は逆効果でしかない。浜辺に転がる二つのヤシの実を眺めて、日向は含み笑いをした。
「いきなり不運に見舞われたってことは、今の話、嬉しかったってことだろう？」
思いきり意地悪く言ってやれば、狛枝は無言で手を振り払った。ツンと顔を背(そむ)けて歩き出す後ろ姿が、完全に怒っている。
それがまた面白くて、不思議(ふしぎ)なほど嬉しくて、日向は彼の背中を追いかけた。
「なあ、手当てしてやろうか」
「いいよ、罪木さんに頼む」
「そう言うなって、俺たち超高校級の友達だろ？」
「それはキミだけだろ、ボクを巻き込まないでくれ!!」
狛枝がイライラするほどに笑いが止まらない。狛枝が自分を構う理由が分かった気さえしてきた。
いつも周囲のメンバーを過剰(かじょう)に持ち上げ、自分はその足元にも及ばないと言い続ける狛枝。過度な

謙遜(けんそん)は壁となり、彼の本心を覆い隠していた。

だが今、少しだけ、壁の向こうが見えた気がした。信奉者(しんぽうしゃ)、あるいは狂信者(きょうしんしゃ)の仮面の下に垣間見(かいまみ)えた素顔は、真面目に友達扱いすれば動揺(どうよう)し、からかわれればムッとする同年代の少年でしかなかった。

いつかこいつとは本当に、超高校級の友達になれるのかもしれない。小さな希望を胸に抱いて、日向は狛枝の背を追い続けた。

END

人よりものすごーく幸運なだけだよ。
by 明咲トウル
皆は才能があって凄いなぁ
あーー
狛枝みたいな「幸運」だけじゃ入学不安だった？
入学前じゃなくて
入学後に不安になっちゃったんだよ
少数精鋭にしたって生徒が少なすぎるよ
GAME OVER
LUCK
POWER
確率があがっちゃうからね
ボクの幸運の反動が皆に跳ね返っちゃうからさ…
でも良かったよ…
どうせ殺し合いするんだしね…
やっぱり来て良かった
ボクみたいな才能でも役に立つなんて！
あ…
この人ダメな奴だ…！
逃!!

COMMENT

伊織咲

もし誰も死んでいなければ…という彼らの if 日常生活を楽しく書かせていただきました。ありがとうございました！

小野上明夜

希望万歳

まさかこの作品のアンソロに参加できるとは……！好き放題に書きましたので、どうぞご笑覧ください。

佐々木禎子

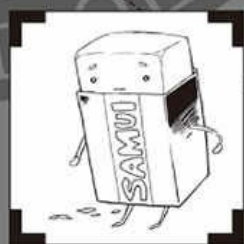
大好きなダンガンロンパの世界。彼らを書くことができて楽しかったです。ありがとうございました。

志麻友紀

楽しいアンソロに参加させて戴きありがとうございます。大変遊ばせていただきました。いや、遊びすぎたかも?

水澤なな

キャラが好きすぎて趣味に走りましたが、素敵なイラストでフォローしていただき感無量です。ありがとうございました！

明咲トウル

1作目も2作目も寝る間を惜しみすぎて徹夜でプレイしていました。新作はいつプレイを始めるか…！ジリジリ連休を見計らっております。

カズアキ

メイン探偵役の3人+先生を描かせていただきました！南国のお日様の下でゲーム対戦してほしいです。

左近堂絵里

大好きな子ばかりとても楽しく描かせて頂きました！ 誰と並んでも引き立てながら食いコロス！ みたいなモノクマ先生のデザインが本当にカッコいいです。

さとい

ダンガンロンパはどのキャラも魅力的で素敵で、今回参加させていただき嬉しかったです。ありがとうございました！

サマミヤアカザ

大好きなダンガンロンパのイラストを描かせていただくことができて幸せでした！ ありがとうございました！

紗与イチ

大好きなロンパのアンソロに参加できて本当に光栄でした！ キャラ達のつかの間の日常が感じられる内容で個人的にもとても嬉しい一冊です！

高山しのぶ

素敵なアンソロジーに参加させて頂けて幸せです！ 新作やるぞー！

花邑まい

昨年ゲームをプレイして以来、希望ヶ峰学園の生徒たちが愛おしくて仕方ない。このような機会を頂けて幸せです！

COMMENT

富士原良

ゲームプレイ当時を思い出しながら朝日奈さんのお胸を描きました。楽しかったです。

電子版 ビーズログ文庫
ダンガンロンパ1・2（ワン ツー）
Beautiful Days（ビューティフル デイズ）

原作・監修／スパイク・チュンソフト
カバー・絵扉・人物紹介イラスト／小松崎類
編集／ビーズログ文庫編集部

2015年1月15日電子版ver.1.0発行

発行人 青柳昌行
発行 株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
電話 0570-060-555（ナビダイヤル）
http://www.kadokawa.co.jp
企画・制作 エンターブレイン
デザイン 土倉 恵（Zapp!）

本電子書籍はビーズログ文庫『ダンガンロンパ1・2 Beautiful Days』（2014年12月26日発行 初刷）を元にして制作しております。